

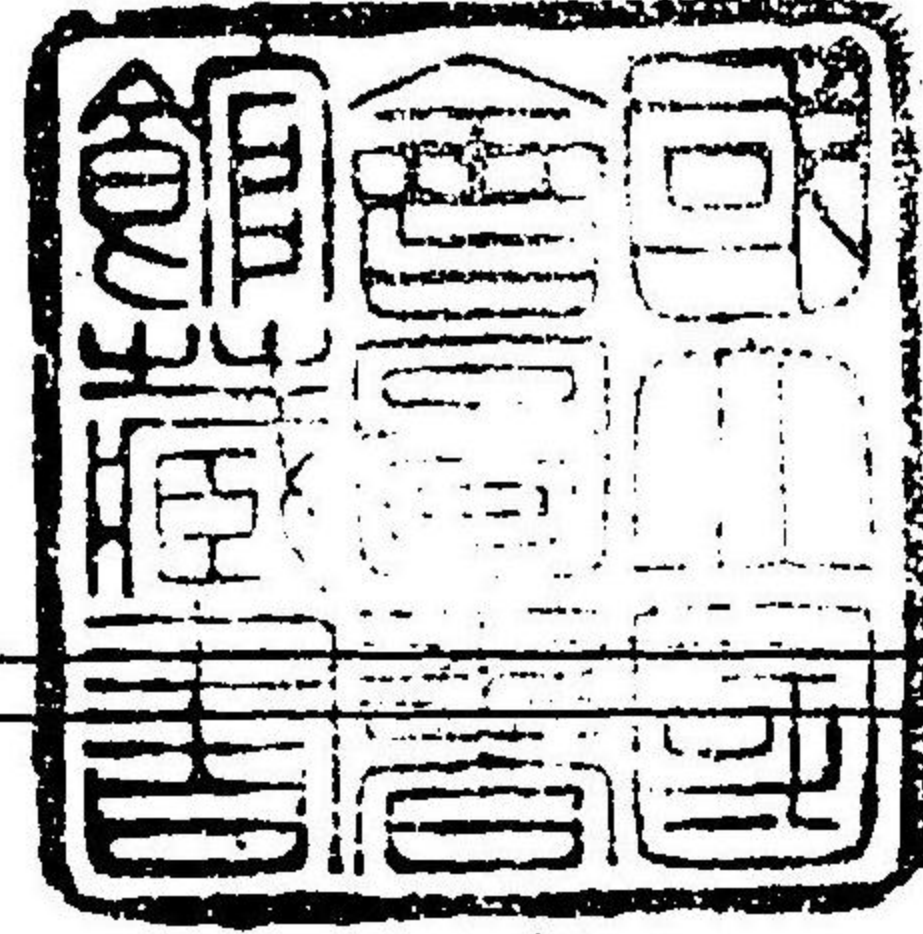
55/00

近松著作一斑

上卷

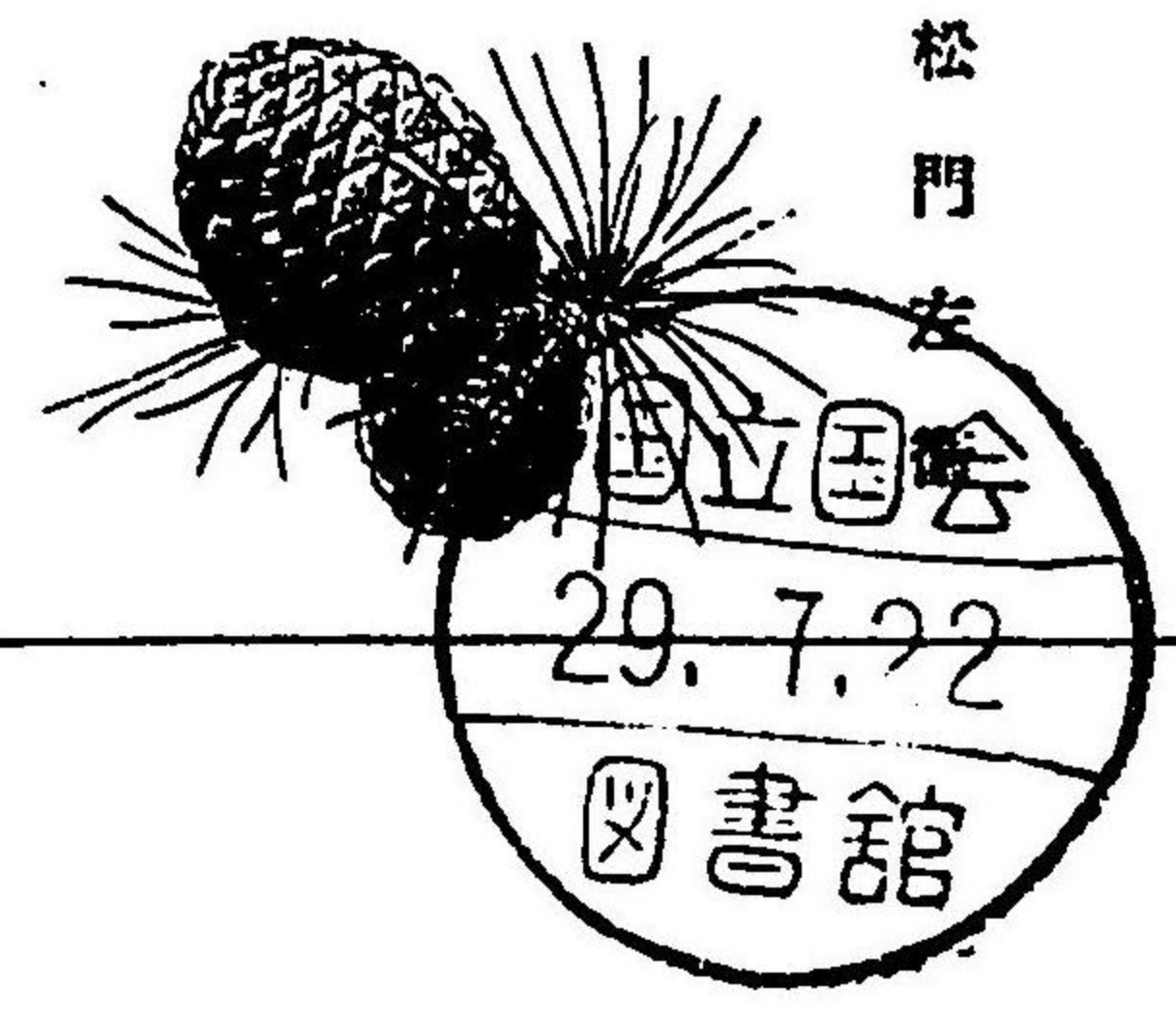


912.4T1238T.2T

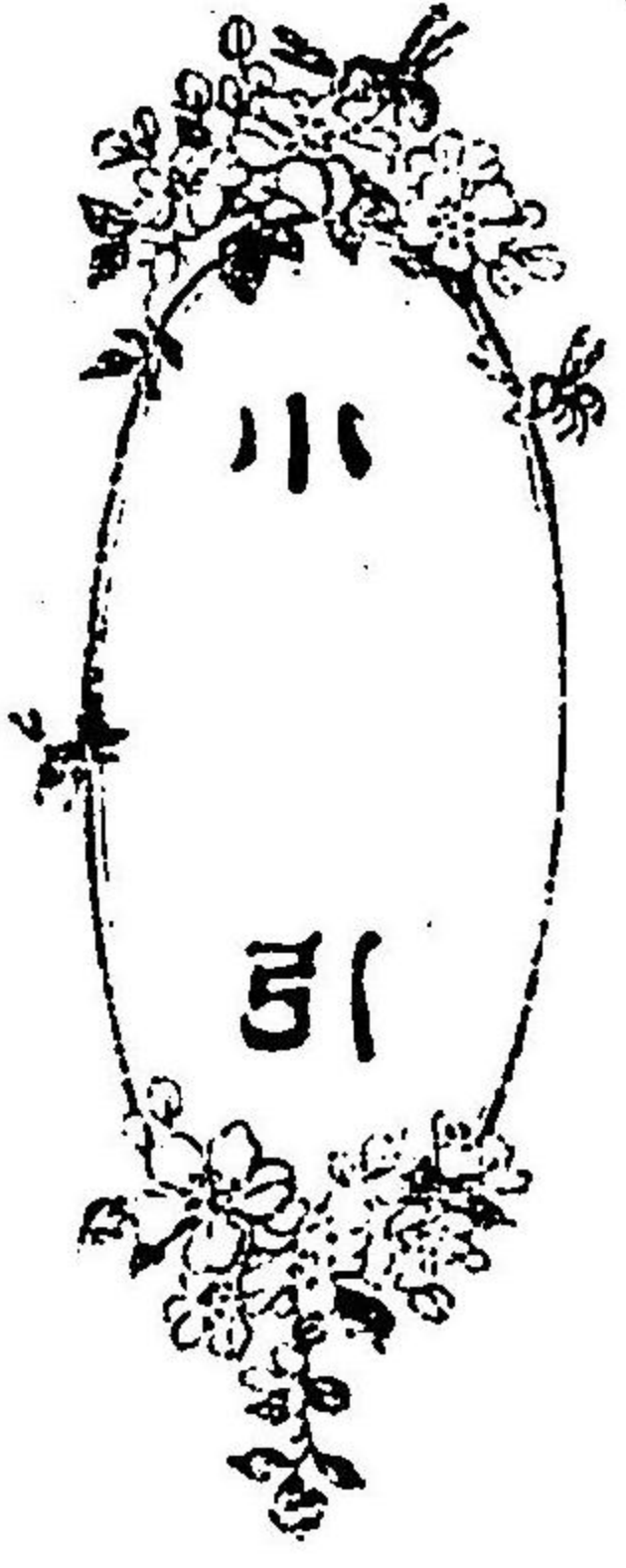


近松門左衛門

是れ曩に「近松著作一斑」著者の手に由て成されたる者  
近松著作一斑を讀む者は「近松門左衛門」を讀まざる可からず  
近松門左衛門を讀む者は「近松著作一斑」を讀まざる可からず



337051



余曩に「近松門左衛門」を稿するや、自ら記述の順序を定めて、第一に現實界に於ける彼を叙し、以て其生涯を傳へ、第二に思想界に於ける彼を叙し、以て其著作中に顯はれたる意義の歸納的結果を明し、之に附録するに彼が著作表を以てして彼が著作の種類を數へ、彼が著作一斑を以てして思想界の彼として歸納したる彼が著作の意義を實にし、彼に於て大要を擧げしものを此に於て細説し、且つ日本戯曲史を添へて彼が日本戯曲界に於ける位置と關係とを示さんと欲したりき。  
然るに「十二文豪」の紙數は始より二百頁内外を以て之が定數となしたりしを以て、之が著作一斑の如きは、纔に其極めて單簡なる解題を残すに止め、他は總て之を削り去りたりし也。



既にして書成て之を見るに、更に補修を要すべきもの多々なりき。乃ち巽に削り去りたる「近松著作一斑」を別に一冊子となし、以て其足らざる所の一部を補はんと欲し、雌黄を加ふるもの二三にして、他事の驅る所となり顧みざること多時。而して今者僅に成る。

然れども巽には之を「近松門左衛門」に附録せんとし、今は之を一冊子として單行せしめんとす。勢之一冊子として單行せしむるに適すべく改削し且つ修補せざるを得ざる也。従て「近松門左衛門」の所説と重複するの嫌あるものあるを免るゝ能はず。茲に舊稿を改むること大半也。庶くは以て一方に「近松門左衛門」中足らざる所の一部を補ひ、一方には單行して人の彼が著作の一斑を窺ふに便するを得ん乎。

書中評釋する所史戯曲若干篇、社會戯曲若干篇。傑作なるが爲に擇べるもあり。意義結構の種々を示さんが爲に擇べるもあり。然れども皆彼が成功の著作にあらざるはならず。而して其主として成功の彼を示して進歩途上の彼を畧せるは、書冊の徒らに冗曼に趨り、以て讀者を煩はさんことを恐れて也。且つ全たき彼を知らんと欲するものは、寧ろ彼が全集を讀むの優れるに如かざるを思へば也。

こゝに評釋したる若干篇の外、猶宜しく紹介すべきが如く然るもの亦あり。亦徒に其冗曼を來さんことを恐れて且く之を割愛す。

又書中彼が著作の梗概を叙するに當り、之が所作光景の境界を示したるは、其如何に劇場に上すに適する乎を見んと欲して也。吾人は信ず、彼が成功の戯曲中若し之れを劇場に上すに多少躊躇せざるべからざるものありとせば、そは彼が戯曲の躰にもあらず想にもあらずして、却て元祿時代の一反影たる圍間のことを忌憚なく叙述したる所にあるべしと。

彼が著作の梗概は、則ち之を梗概といふと雖、成るべく多からざるの省畧を以て之を抄したり。他なし、甚しく彼が戯曲の面目を損せんことを恐れてのみ。

書中説く所「近松門左衛門」に重複するものあること固よりなると共に、亦彼此相譲りて其解説を省きたるもの少なからず。讀者参照して可也。

彼が戯曲につきて説かんと欲する所猶多し。况や彼につきてをや。今は唯彼が著作の一斑を世に紹介して止む。吾人は彼が爲に更に幾多の執念き研究をなすべき時間を有せざるを奈何ともするなき也。



明治二十八年八月二十七日

東京に於て

停春樓主人

四

(潔 芳)



敷島の  
大和心を  
人間は  
朝日に匂ふ  
山櫻花



第一 近松の著作

(一) 彼が著作の類別	一……………九八
(一) 史戯曲	三……………二八
(二) 社會戯曲	三……………九
(三) 史戯曲と社會戯曲	一〇……………二二
(二) 彼が戯曲の躰	一一……………二八
(一) 如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎	二九……………三一
(二) 如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎	三一……………四七
(三) 彼が戯曲の躰の進歩	四八……………五九



(四) 彼が戯曲の想

(一) 戯曲の主意

(二) 人物の性情

(五) 彼が戯曲の想の開展

(六) 彼が戯曲の効果

(一) 彼の戯曲より學び得べき教訓

(二) 彼の戯曲より學び得べき歴史

(三) 彼の戯曲より學び得べき文學

第二 彼の史戯曲

(一) 「雪女五枚羽子板」解剖

(二) 「國姓爺合戦」解剖

(三) 「曾我會稽山」解剖

(四) 「關八州繫馬」解剖

六〇……六八

六〇……六五

六五……六八

六九……八五

八六……九八

八八……九六

九六……九八

九八……九八

九九……五一〇

九九……一八三

一八四……二八三

二八四……三八五

三八六……五一〇



近松著作一斑

塚越芳太郎 著



第一 近松の著作

『彼が遺著には永久の少時あり』とは、吾人が嘗て近松門左衛門の著作を評したる言なり。

固より其總てとは言はざる也、固より其多くとは言はざる也、人神にあらざるよりは焉ぞ思想の産物をして悉く不朽ならしむるに足らんや。况や中實に拙劣見るに堪へざるものを混するをや。

然れども其傑作若干篇に至りては、則ち人生を活寫して温かき血あり、直に千古に傳ふる



に足る。彼が日本二千年の人生詩人たる所以は、其未成功時代に於ける拙作を有すること  
 に由て妨げらるゝものにあらざる也。願ふに元祿文學は國民の月桂冠として彼を彼等が一  
 世の頭上に置くことを耻ぢざるべき乎。

然らば彼が文學は如何に元祿國民の月桂冠として彼等を榮するに足りしや。抑既往の日本  
 は如何に彼が著作を秘藏することを世界に誇るに足りしや。是れ實に吾人が茲に之が解釋  
 を試みんと欲する問題なりとす。故に吾人は今進歩の彼よりは寧ろ多く成功の彼を語るべ  
 し。彼が未成功時代の著作よりは寧ろ多く彼が成功時代の著作を紹介すべし。

鶏 登 茅 店 月  
 人 跡 板 橋 霜



(時少の久永)

## (一) 彼が著作の類別

彼が思想の産物として世に留めたるものは戯曲百餘種也。皆操芝居と稱する木偶劇に被ら  
 しめ、淨瑠璃樂として唱歌したるもの。暫く其疑はしきを缺きて九十七種あり。  
 九十七種中嚴格なる意義を以て論ずれば、戯曲の戯曲たるべき主観兼客觀の詩たらずして  
 主ら歴史の事跡を寫し、客觀詩たるが爲め、或は淨瑠璃樂として唱歌すべき一種の形ある  
 が爲め、之を戯曲と云はんよりは寧ろ之を叙事詩と云ふを適當とするもの少なからず。然  
 れども其木偶劇に被らしめたる用より見れば皆戯曲たらずんばあらざる也。

今便宜上極めて普通にして極めて見易き區別に従ひ、資料の由る所よりして、之を史戯曲  
 及び社會戯曲の二大部となす。而して九十七種中史戯曲實に七十有三種。社會戯曲實に二  
 十有四種。

之を著作の後先によりて次第し、以て作者の詩人生涯各時期に配すれば下の如し。

## (二) 史戯曲



彼が詩人生涯前半生即ち修業時代の作

第一期 普通修業時代

- 徒然草 年二十五六若くは廿六七の作 延寶の末年
- 世繼曾我 前者より稍後の作 天和の頃
- 天鼓 年三十二以前の作 貞享二年前
- 一心五戒魂(復鳥羽戀塚) 年三十前後の作 貞享二年前
- 主馬判官盛久 未詳 未詳
- 團扇曾我(百日曾我) 年三十前後 貞享元年若くは其前
- 遊君三世相 未詳 未詳
- 願朝七騎落 年三十二前の作 貞享二年前
- 出世景清 年三十四の作 貞享三年
- 佐々木大鑑 年三十四の作 貞享三年
- 源氏冷泉節 年三十六の作 元祿元年

天智天皇  
源氏十二段

年三十七の作  
年三十八の作

元祿二年  
元祿三年

第二期 高等修業時代

- 新本領曾我 年四十一の作 元祿六年
- 松風村雨束帶鑑 年四十二の作 元祿七年
- 釋迦如來誕生會 年四十三の作 元祿八年
- 鎌田兵衛名所鑑 年四十三の作 元祿八年
- 今様小栗判官 年四十六の作 元祿十一年
- 源氏烏帽子折 年四十七の年 元祿十二年
- 浦島年代記 年四十八の作 元祿十三年
- 蟬丸 年四十九の作 元祿十四年
- 大掛物十幅對 年四十九の作 元祿十四年

彼が詩人生涯後半生即ち成功時代の作



第三期 得業時代

- 大磯虎稚物語 年五十の作 元祿十五年
- 加古教七墓巡 年五十の作 元祿十五年
- 最明寺殿百人上臈 年五十一の作 元祿十六年
- 甲賀三郎 年五十二の作 元祿十七年
- 用明天皇職人鑑 年五十三の作 寶永二年
- 雪女五枚羽子板 年五十三の作 寶永二年
- 傾城反魂香 年五十三の作 寶永二年
- 源義經將基經 年五十四の作 寶永三年
- 兼好法師物見車 年五十四の作 寶永三年
- 碁盤太平記 年五十四の作 寶永三年
- 同跡追一段物 年五十四の作 寶永三年
- 曾我扇八景 年五十四の作 寶永三年

第四期 成熟時代

- 吉野忠信 年五十五の作 寶永四年
  - 酒呑童子枕言葉 年五十五の作 寶永四年
  - 狛狩劍本地 年五十七の作 寶永六年
  - 赤染衛門榮花物語 年五十七の作 寶永六年
  - 曾我虎石磨 年五十八の作 寶永七年
  - 百合若野守鏡 年五十八の作 寶永七年
  - 本朝五翠殿 年五十九の作 寶永八年
  - 吉野都女補 年五十九の作 正徳元年(改元あり)
- 第四期 成熟時代
- 傾城掛物語 年六十の作 正徳二年
  - 弘徽殿鸚羽産家 年六十の作 正徳二年
  - 姫山姥 年六十の作 正徳二年
  - 傾城吉岡染 年六十の作 正徳二年



天神記 年六十一の作 正徳三年  
 孕常盤 年六十一の作 正徳三年  
 新撰大職冠 年六十一の作 正徳三年  
 相摸入道千匹犬 年六十二の作 正徳四年  
 瀨口娥歌加留多 年六十二の作 正徳四年  
 嵯峨天皇甘露雨 年六十二の作 正徳四年  
 二人静胎内探 年六十三の作 正徳五年  
 持統天皇歌軍法 年六十三の作 正徳五年  
 國姓爺合戦 年六十三の作 正徳五年  
 國姓爺後日合戦 年六十五の作 享保二年  
 聖徳太子繪傳記 年六十五の作 享保二年  
 日本振袖始 年六十六の作 享保三年  
 曾我會誓山 年六十六の作 享保三年

日蓮上人記 年六十六の作 享保三年  
 傾城酒香童子 年六十六の作 享保三年  
 本朝三國志 年六十七の作 享保四年  
 平家女護島 年六十七の作 享保四年  
 島原蛙合戦 年六十七の作 享保四年  
 井筒河内通 年六十八の年 享保五年  
 雙子隅田川 年六十八の作 享保五年  
 日本武尊東鑑 年六十八の作 享保五年  
 攝津國夫婦池 年六十九の作 享保六年  
 信州川中島合戦 年六十九の作 享保六年  
 唐土斷今國姓爺 年七十の作 享保七年  
 關八州繫馬 年七十二の作 享保九年  
 右大將鎌倉實記 年七十二の作 享保九年



(二) 社會戯曲

彼が詩人生涯前半生即ち修業時代の作

第二期 高等修業時代

長町女腹切

年四十八の作

元禄十三年

淀鯉出世瀧徳

年四十八の作

元禄十三年

彼が詩人生涯後半生即ち成功時代の作

第三期 得業時代

曾根崎心中

年五十一の作

元禄十六年

源五兵衛薩摩歌

年五十二の作

元禄十七年

徳兵衛 心中重井筒

年五十二の作

寶永元年(改元あり)

心中二枚繪草紙

年五十四の作

寶永三年

茂兵衛 大經師昔曆

年五十四の作

寶永三年

堀川浪の鼓

年五十五の作

寶永四年

おかめ 卯月の紅葉

年五十五の作

寶永四年

おかめ 卯月の色上

年五十五の作

寶永四年

丹波與作

年五十五の作

寶永四年

衆之助 心中萬年草

年五十六の作

寶永五年

おなつ 歌念佛

年五十七の作

寶永六年

おさき 掛鯛心中

年五十八の作

寶永七年

心中 及は氷の朔日

年五十八の作

寶永七年

夕霧阿波鳴戸

年五十八の作

寶永七年

梅川冥途飛脚

年五十九の作

寶永八年

第四期 成熟時代

おさか 生玉心中

年六十三の作

正徳五年

鎗權三重帷子

年六十五の作

享保二年

山崎與次兵衛壽の門松

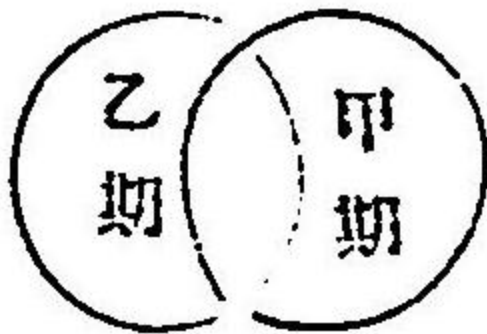
年六十六の作

享保三年



博多小女郎涙枕	年六十六の作	享保三年
小はる 心中天網島	年六十八の作	享保五年
女殺油地獄	年六十九の作	享保六年
心中宵庚申	年七十の作	享保七年

去れども彼が著作各期は本と此くの如く截然たるものにはあらざる也。境界附近相交錯して、甲期に置かれたるものにして乙期に置かれて不可なきあり。乙期に置かれたるものにして甲期に移されて不可なきあり。其状實に斯くの如し。



今は只其大躰より類別したるのみ。

(三) 史戯曲と社會戯曲

(一) 彼が史戯曲と社會戯曲とは如何に同異ある乎。 則ち、

史戯曲

一、材料を歴史上の事實に採り、天地を歴史上の天地に置く。時に或は材料を現社會の出來事に採るとありども亦之を歴史上の事實に假托せざるはなし。「曾我會稽山」

以下悉く歴史上の事實を基礎とし—假令其基礎は極めて微弱且つ不堅固にして、多くは空中樓閣を築き、僅に名を假るに過ぎざるにもせよ—結構したるのみならず、

「基盤太平記」等現社會の出來事も皆之を歴史上の事實に假托したり。

二、歴史上の事實は皆尋常以上の出來事なるにより始めて歴史上の事實として傳はるものなるを以て、歴史上の事實を骨子として作りたる史戯曲は、多く尋常以上の事を寫し、尋常以上の人を寫したるもの也。曾我の復讐其外皆然り。

三、五所作の大結構を用ひたり。全曲を五所作に分ち具備したる戯曲的體をなすに至りたるは彼より始められり。

四、敘事的性格を含むこと多し。淨瑠璃樂たる一種の體に於ても。客觀詩たらんとす



る其想に於ても。所謂、地の文がもと叙事詩性格のものなると同時に、多く人の内部に於ける現在の活動を顯はさずして、外部に於ける過去の事實を寫せり。

五、日本人の理想を寫せり。即ち最も多く武士道を寫したり。義俠、勇武、忠、孝、貞操等は其大に力を用ひたる所なりき。孝を寫さんとして曾我の二孤を寫し、忠を寫さんとして大星由良之助、箕田二郎母子等を寫し、俠武を寫さんとして和藤内を寫し、義烈を寫さんとして山本勘助の母を寫したるの類。

六、其人多くは公生涯を有する人にして、其事亦多少公共に影響を及ぼすべき事たり。

「關八州繫馬」「本朝三國志」「國姓爺合戦」以下其主人公は皆公生涯を有せざるなく、

其事は則ち公共的性質を帯びざるなし。

七、彼が史戯曲の幾んど總てが喜的收結のものなりき。蓋し其理想戯曲なるが故也。現實は衝突すること少なからざれども、——故に現實を寫實したる社會戯曲は悲劇曲多けれども——理想は調和するを以て、理想戯曲は自ら多く喜劇曲たり。

八、事を主とせり。「國姓爺合戦」が國粋心の發揚したる遠征を主眼としたる如く、「曾

我會稽山」が復讐を主眼としたる如く、「釋迦如來誕生會」が釋迦の傳記にして、「一

心五戒魂」が佛教五戒の解釋なるが如し。

九、寫す所理性の人多し。甚しきは人其人にあらずして或る道德技能の權化也。亦其理想戯曲たるが爲めに然るのみ。和藤内の如きも鄭成功を假りたるものなれども、其描き成したるものは却て鄭成功にあらずして、武俠の化身たる理想的日本武士なるにあらずや。

十、重に人が外界と闘ひたる事跡を寫せり。或は人と闘ひ、或は家國と闘ひ、或は社會と闘ひ、或は自然と闘ひ、或は命運と闘ひたるものを寫せり。故に其受くべき艱難の多くは自家以外より來る艱難ならざるなし。例之ば曾我の二孤が父の仇及び父の仇の直接若くは間接の幫助者と闘ひ、和藤内が韃靼王の兵と闘ひたるが如き是也。

十一、専ら崇高の美を歌へり。假令其結構文章は中等以下の觀客の爲に力めて之を通俗的にしたりしにせよ、其意義に至りては雄大壯嚴にして、通俗ながらも崇高の美感到訴へんと欲したるものたり。山本勘助の母が謙信子供の臍を嚙倒す如き、眞柴肥



前の大領久吉が六十餘州を握る手に松下が草履を摺みし如き、九仙山の吳三桂の如き、豈一世に高き概なしと謂んや。

十二、荒唐不稽なることを避けず。是亦其理想戯曲たる結果乎。母を猛虎に駕せしむる和藤内あり。禁庭を荒れ廻りたる相馬家の幕の紋なる繫馬あり。

十三、探題の種類。

(一) 時代若くは場所を以て類別すれば、

一、神代の事を作りたるもの。(「日本振袖始」の類)

二、奈良朝以前の事を作りたるもの。(「日本武尊東鑑」「用明天皇職人鑑」「聖徳太子繪傳記」「天智天皇」「新撰大職冠」の類)

三、奈良朝の事を作りしもの。(「持統天皇歌軍法」の類)

四、平安朝の事を作りしもの。(「關八州繫馬」「弘徽殿鸚羽産家」「酒吞童子枕言

葉」「嵯峨天皇甘露雨」「天神記」の類)

五、源平鎌倉時代の事を作りしもの。(「曾我會稽山」「源氏烏帽子折」「源氏十二

段」「出世景清」「最明寺殿百人上臈」の類)

六、南北朝より室町時代の事を作りしもの。(「吉野都女楠」「相模入道千匹犬」「雪

女五枚羽子板」「攝津國夫婦池」の類)

七、織豊氏時代の事を作りしもの。(「信州川中島合戦」「本朝三國志類」の

八、江戸時代の事を作りしもの。(「碁盤太平記」の類。皆天地を他に假る)

九、支那の事を作りしもの。(「國姓爺合戦」「國姓爺後日合戦」「唐土噺今國姓爺

の類)

十、印度の事を作りしもの。(「釋迦如來誕生會」の類)

(二) 人を以て類別すれば、

一、王室の事を作りたるもの。(「天智天皇」「日本武尊東鑑」の類)

二、公卿の事を作りたるもの。(「新撰大職冠」「天神記」の類)

三、武家の事を作りたるもの。(「本朝三國志」等史戯曲過半)

四、宗教者の事を作りしもの。(「日蓮上人記」「釋迦如來誕生會」の類)



五、平民の事を作りしもの。(幾んど全くなし。「傾城酒吞童子」の平木の長の如き僅にあるのみ。)

(三)事を以て類別すれば、

- 一、撥難反正のもの。(史戯曲の大半)
- 二、氏族家國の復興を謀り、若くは爲に怨を報せんとせしもの。「源氏烏帽子折」

「出世景清」の類)

- 三、王位争奪并に戀争より起りたるもの。(天智天皇の類)

- 四、佛敎理説明のもの。「一心五戒魂」嵯峨天皇甘露雨」遊君三世相」最明寺殿

百人上臈」の類)

- 五、復讐を寫したるもの。「曾我會稽山」碁盤太平記」の類)

- 六、權勢の争より事起りしもの。「攝津國夫婦池」の類)

- 七、義侠的遠征のもの。「國姓爺合戦」の類)

- 八、忠君若くは孝を寫したるもの。「碁盤太平記」曾我會稽山」の類)

其他。

乃ち知るべし、史戯曲の寫す所は主として貴族社會に在りたることを。

社會戯曲

- 一、材料を現社會に採り、天地を現社會に置く。「女殺油地獄」心中天網島」以下然らざるなし。

- 二、社會に現在ありたる事實を骨子として作りたるが故に、其事は尋常あり得る事に於て其人は尋常あり得る人也。忠兵衛與兵衛お吉お辰おさん小春の類。

- 三、全戯曲多く三所作より成る。史戯曲に比すれば其結構稍小也。

- 四、敘事詩的性格を含むこと少し。唯其地の文あるの故を以て敘事詩的跡ありといは

べし。則ちいふべきのみ。然れども是寧ろ日本戯曲特種の跡と謂ふを適當とす。

- 五、日本人を寫せり。殊に多く大坂人を寫せり。而して其寫したるものは皆生命あるの人也。彼が寫したる人に理性の人少なかりしは其主として大坂人を寫して江戸人を寫さざりしこと亦之が一因たらずんばあらざるべし。何となれば理性の人は大坂に



於けるよりは寧ろ江戸に於て最も多く之を見出すべかりしを以て也。

六、其寫したる所の人幾んど總て私人にして、其事皆私人の事也。殊に多く市民の事也。中に武士社會を寫したるものなきにあらざれども、多くは公生涯を有するものにあらざり。たとへ公生涯を有するものも皆公生涯の人として寫されたるにあらざる也。從て其事皆公共的性質を有するものにあらざる也。

七、寫實(勿論寫眞實)なるが故に、社會の實際があり得る如くに、喜的收結のものもあり、悲的收結のものもあり。而して其分量に於ては多く悲的收結のものを寫したりき。

八、人を主とせり。「油地獄」は殺人犯者として自家を見出すに至りたる與兵衛を寫し、「重帷子」は有夫姦の汚名を受くるに至りたる才を寫したるが如き是也。

九、寫す所感情的人多し。勿論悉く感情的人のみにあらずと雖、其動くや多く激越せる感情に驅られざるもの稀也。何をあてに人の金封を切て債主の類へ投付たる忠兵衛の類。

十、重に人の内部に於ける意思と意思との闘を寫せり。即ち重に愛情若くは勢譽心の道徳心と闘へるものを寫したりき。治兵衛忠兵衛以下例を擧ぐるまでもなし。

十一、専ら優麗の美を歌へり。與兵衛の殺人を始め、治兵衛其他の心中苦悶を寫したる如き、沈痛慘凄、優麗の情を惹くよりは寧ろ崇美の情を惹かんと欲するものなきにあらざれども、若し史戯曲を以て崇高の美を歌へるものとせば、一般の傾向に於て社會戯曲が寧ろ優麗の美を歌ひたること見易き所たり。彼は壯大を主とすれども此は深痛を主とし、彼は宏麗を主とすれども此は凄婉を主とせり。

十二、荒唐不稽にして夢幻的事なし。是其寫實戯曲にして、社會の實際がある如くに寫したるに因る。「戀飛脚」以下荒唐不稽の事なきは、一讀したるもの皆之を知るべし。

十三、探題の種類。

(一)時代若くは場所を以て類別すれば、

一、廣き意味に於ける元祿時代。(社會戯曲の總て)



二、廣き意味に於ける京大坂。(幾んど總てが關西に於ける出來事也)

(二)人を以て類別すれば、

一、市民を寫したるもの。(「油地獄」「戀飛脚」「天網島」以下大半然り)

二、武士を寫したるもの。(「重帷子」「薩摩歌」「堀川浪の鼓」「丹波與作」の類)

(三)事を以て類別すれば、

一、心中即ち男女對死を寫したるもの。(「天網島」を始め十二種)

二、殺人取財。(「油地獄」の類)

三、愛情若くは勢利と罪惡との關係を説きたるもの。(「博多小女郎浪枕」「淀鯉出

世瀧徳」の類)

四、過誤と罪惡との關係を示したるもの。(「大經師昔曆」「重帷子」の類)

五、愛情若くは勢利と發憤義俠等との關係を説きたるもの。(「壽の門松」の類)

要するに愛情若くは勢利を基因として事起りたるもの幾んど其の總てならんとす。

乃ち知るべし、社會戯曲の寫したる所は主として平民社會に在りたることを。

(二)彼が史戯曲と社會戯曲とは文學として如何なる位置に在る乎 試に彼が史戯曲の如何

に史戯曲たるべき性格を具したりし乎を見よ。試に彼が社會戯曲の如何に社會戯曲たるべき性格を具したりし乎を見よ。抑等しく近松門左衛門たる彼にして、史戯曲作者たる彼と社會戯曲作者たる彼と何を以て幾んど別人の如くに相同じからざりし乎を見よ。

彼は其筆を把るに當りてや、常に重きを史戯曲に置き、常に力を史戯曲に用ゐ、竊に史戯曲を以て自家の本領とし、社會戯曲は却て其緒餘の業の如く思ひたりき。

然れども彼が史戯曲は、其實千古の偉人の名を假り、千古の歴史の事實を假り、以て日本人の理想を寫したるものにして、殊に之を元祿國民に紹介すべく通俗譯したるものなるを以て、之を史戯曲として其具けるを賣るよりは、之を理想戯曲として論ずるの穩當なるに如かざる也。故に社會戯曲が直に造化の足跡を活寫したるものと頗る同じからざりき。

社會戯曲は唯造化の足跡を活寫したり。故に彼は此時造化に直接にして、乃ち造化の足跡のあるが如くに之を寫すことを得たりし也。史戯曲は唯日本人の理想を寫したり。殊に通俗



譯して元祿日本人の理想を寫したり。故に彼は此時大に人意を挿まざるべからざりし也。造化の足跡を寫すは、造化の足跡の在るが如くに自在に之を寫すを得たれども、日本人の理想を寫すは、日本人の理想の在るが如くにすべく幾多の掣肘を受けざる能はざりき。是を以て、彼が社會戯曲は寧ろ多く不用意の作たりし也。其全たき不用意にあらざりして實は用意の極たる不用意なること勿論なりと雖、其之を心に取て之を手に注ぐに當り、少なくとも其半以上は忘我の境涯に在て筆飛び神舞ひたりし也。然り、彼が社會戯曲は多く不用意の作たりし也、是の故に其聲や則ち多く天籟たり。史戯曲に至ては勿論多く用意の作たりし也。其力を用ふるに固より社會戯曲の比にあらざりしと雖、其力を用ふること多きは則ち用意の作の用意の作たる所以なりし也。然り、彼が史戯曲は多く用意の作たりし也。是の故に其聲や則ち多く人籟たり。

勞苦の大小は必ずしも成功の巧拙を意味せざることあり。用意の多少は必ずしも結果の良否に伴はざることあり。而して掣肘の有無は實に人の天才をして或は竭さしめ或は竭さしらしむ。天才を竭すを得るの所は、則ち其本領の在る所にあらざや。天才を竭すを得ざる

の所は、則ち其本領の在らざる所にあらざや。

然らば則ち知るべきのみ。彼は縦令自ら重きを史戯曲に置きたりしにもせよ、縦令自ら史戯曲を以て其本領なりと信じたりしにもせよ、彼の彼たる所以は則ち史戯曲にあらざりて、却て社會戯曲にありたることを。即ち社會戯曲家たる彼は本領の彼にして、史戯曲家たる彼は本領の彼にあらざること。

以て彼が史戯曲及び社會戯曲の相對比したる位置如何を知るべき也。亦以て彼が戯曲の文學界に於ける位置如何を知るべき也。

即ち彼れが社會戯曲と史戯曲との差異は天籟と人籟との差異也。彼が戯曲の文學界に於ける位置は造化の足跡を活寫したる位置也。彼が戯曲は其軀に於て特種なるものなるにも係らず、十分に人を歌ひ得たるもの也。

故に彼は日本に於ける千古の人生詩人たるのみならず、亦世界に於ける大なる人生詩人の一也。唯彼に限れる所は、其多く元祿に於ける日本人を歌ひ、殊に多く大坂に於ける日本人を歌ひて、未だ人間の總てを歌はざりしこと是也。彼は固より各種の人を歌ひたれども、



其歌ひたる所多くは多數普通の人にして偏僻特種の人稀に、感情の人多くして理性の人少  
 なかりし也。彼は比較的に理想に活きたる江戸人を寫さずして、比較的に實際に活きたる  
 大坂人を寫したりし也。彼は千古の偉人たり傑士たり特種の人たる人を歌ふべかりし史職  
 曲に於ては、當日社會の理想を透して之を寫したるが爲に、活きたる人を寫さず。而して  
 其の活きたる人を寫したりし社會戯曲は實に之れが材を普通平民の中に取りたるものなり  
 し也。

是の故に彼が限れる所は、其技術にあらざして其探題の方法と其區域となりしのみ。彼が  
 「傾城酒吞童子」に於て平木の長を描きたりし手腕を見よ、其史戯曲をして社會戯曲の筆法  
 を用ひしめば、即ちそれをして理想戯曲ならざらしめば、其成功する所豈此くの如きに止  
 まらんや。嗚呼彼をして一たび江戸に遊ばしめざりしは千古の遺憾と謂ふべし。彼をして  
 政治權勢の社會を實見せしめざりしは千古の遺憾と謂ふべし。將た當日の演劇をして徒に  
 下層社會の歡娛を博するものなるのみならず、兼て上層社會の遊觀にも供するものならし  
 めざりしは實に千古の遺憾と謂ふべし。

\* \* \* \* \*

人生詩たる戯曲の本旨を以て之を論ずれば社會戯曲は勿論彼が本領にして、史戯曲は一種  
 の理想戯曲なりと雖、若し之を敘事詩として見去らん乎、彼が史戯曲は之を最も上乘なる叙  
 事詩として世に誇示するを得べき也。  
 彼が想像力の富麗にして、其結構の自在なる、其文詞の雄麗なる、無中有を生じ、空中樓  
 閣を築くの概あるにあらざや。

文章の妙に至ては、辭藻豊富、社會戯曲の優婉に對して史戯曲の壯麗なる、社會戯曲の痛  
 切に對して史戯曲の雄大なる、社會戯曲の嚴厲なるに對して史戯曲の揚悠なる、縱令下層  
 社會の爲に其文詞の通俗を旨としたるものなるにせよ、辭品の種々にして而も各其妙致  
 を窮めたるは、春秋一時に來り、紅綠野に滿るの觀あり。今古の作家儔匹すること稀也。  
 (三)國民の嗜好は如何に彼が史戯曲と社會戯曲とを軒輕したりし乎。元祿の國民は彼が作  
 中社會戯曲をも勿論愛好したりしと雖、其最も愛好したるものは却て史戯曲なりし也。「雪  
 女五枚羽子板」「國姓爺合戦」「曾我會稽山」は之を三傑作と稱し、就中「國姓爺合戦」の如き、



同一所に於て日又日之を反覆すること三年にして人倦むことを知らざりき。遂に傳唱して遠く津々浦々に至り、以て近世に及べり。而して今之を見るに其戯曲として社會戯曲に及ばざるあること、何人も見易しとする所たり。而るに猶且此くの如くなりしは何故ぞや。

史戯曲の歌ふ所は實に彼等の理想なりしを以て也。人は現實の眞實よりは理想の不眞實を聽かんを欲する傾あるもの也。目慣れたる眞理よりは奇抜なる不眞理を愛する傾あるもの也。人は翫味するよりは驚嘆せんと欲する傾あるもの也。蓋し人は進歩するものなれば也。進歩は人の性なれば也。而して理想は進歩の標的なれば也。

眼前致口頭  
語意極高寓於  
極平至難出於  
至易有忍反遠  
無心者自近也



(我裏吾)

## (二) 彼の戯曲の躰

彼が戯曲は二様の目的に向て應用すべく作られたるものなりき。一は敘事詩的用法によりて唱歌すべく。一は脚本的用法によりて演劇すべく。蓋し淨瑠璃樂なるものが、一方に耳の美術として謡はるゝと共に、一方に眼の美術として木偶に由て踏舞せらるゝが故也。

### (一) 如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎

是れ多く稱説するまでもなき也、何となれば彼が戯曲は其稿を脱するや直に適當なる躰として幾度か公衆の前に於て唱歌せられたるものなれば也。彼以前のものは彼のものよりは勿論幼稚なりしのみならず、寧ろ多く敘事詩躰を含みたりき。即ち多く場所の轉換を厭はず、多く時間の進移を厭はず、多く事の來歴を叙して現象を記せざるを厭はず、觀て其出來事を知るよりは寧ろ聽て其顛末を詳にすべき者なりし也。彼が成功の作に至ては大に然らず。總ての結構に於て觀るを主とし、ものにして、唯其間



を填綴したる風色場所時日戯曲人物の意思行為に關する第三者の批評形容等の表彰即ち所謂地の文ありて、兼て聽くを得せしめ、以て戯曲の躰に敘事詩的躰を兼ねしめたり。然れども其觀るを主としたるものは則ち之を聲に發すれば直に聽くを得べきものなるを以て、彼が作は一方に演劇するに適當なると同時に、一方には唱歌するに適當なりし也。殊に其節奏に至ては變幻自在、聲景情に伴ひ、怒を叙するには急言疾聲を以てし、喜を叙するには快調暢節を以てし、哀を叙するには則ち凄切。樂を叙するには則ち悠揚。壯大を歌へば堂々たり。雄麗を歌へば燦爛たり。山を歌へば巍々たり。海を歌へば浩々たり。美人を歌へば嫣然たり。英雄を歌へば泰然たり。かの竹本筑後をして表情表景最も自由に、聲の大小調の高下節の短長一として意の如くならざるなき淨瑠璃唱歌術を大成せしめたるもの、實に彼が戯曲の在る有りしに由らずんばならず。

唯彼が筆鋒は餘りに縱横に、彼が節奏は餘りに奔放なりき。是を以て聲調富麗の竹本筑後は善く彼が戯曲を歌ひたりしも、後の淨瑠璃唱歌者中彼が作の歌ひ易からざるを説くもの少なからず。

蓋し竹田出雲近松半二以下の作家は則ち歌はしめんが爲に作りたりし也。故に固に歌ひ易かりしのみ。彼は則ち作りたるが爲に歌はしめし也。故に固に歌ひ易からざりしのみ。其主とする所各同じからず、正に以て作家見地の高卑を見るべし。

### (二) 如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎

彼が戯曲は二面より見れば敘事的躰とも稱すべき一種の躰を有し、唱歌するに適當なること上述の如くなりと雖、之を其全き戯曲の躰として見れば、其唱歌すべく適當なるよりは更に大に適當して演劇すべく見出すことを得べし。

試に彼が戯曲の如何に演劇するに適當にして、如何に光景の調和即ち場所の一致を有したる乎、如何に經過の調和即ち時間の一致を有したる乎、又如何に所作の調和即ち事柄の一致を有したる乎、抑如何に其所作の調和を有すべく人物の配合、事件の配置脈絡、動作變化、詞美等を有する乎を見よ。

(一) 光景の調和 戯曲と敘事詩とが其躰に於て大に同じからざるもの一は、實に戯曲は眼の美術にして兼て耳の美術なるに引換へ敘事詩は耳の美術たるに在り。是を以て敘事詩



は事の來歴を叙するを得て場所の轉換窮りなきを厭はずと雖、戯曲に至りては事の顛末を一二場中に聚めて之を觀せしめざるべからず。而して其二場中に聚むる能はざるものは、戯曲人物の口を假り若くは其他の方法を假りて之を其間に示さざるべからず。且已に事の顛末を一二場中に聚め得たりとせん乎、戯曲は更に其各場の變化を有し、以て全劇の調和を成さざるべからざる也。部分の美と全體の美とを具へて人間美を歌はざるべからざる也。

彼が戯曲は、史戯曲に於て多く事の顛末を五所作中に收め、社會戯曲に於て多く三所作に收むるを常とし、更に之が各所作を幾多の光景に分つを例としたり。史戯曲は事の大にして且つ複雑なるを以て五所作を便としたるのみ。社會戯曲は事の小にして且つ比較的簡單なるを以て三所作にて足りたるのみ。且つ五所作三所作は觀聽時間上の便宜もありたりし也。

而して之が各所作各光景の調和に至ては、

曾我會稽山(史戯曲)

第一所作

建久四年五月廿八日朝

第一光景、鎌倉殿中竹取の間(諸侯の妻御臺所(頼朝妻)御機伺の席上、工藤木田の妻靜論)

第二光景、登船途上(一、梶原景高蒲入道へ無禮す、蒲入道曾我の家來鬼王に割符を與ふ)

第三光景、北の丸大廣間(一、梶原と巴母子、二、蒲入道又傷切腹、三、二の宮急使を命せられ妻(曾我氏)を離別す)

第二所作

同廿八日晝

第一光景、二の宮宅(二の宮妻去狀を見て驚悲し夫の跡を追去る)

第三光景、藤澤(一、梶原近江森計、二、二の宮妻と梶原との争、三、二の宮妻、四、争闘)

第三所作

同廿八日宵

第一光景、工藤假屋(一、祐經と龜菊、二、曾我の家來團三郎捕はれ來る、三、曾我兄弟出づ、而して祐經馬を贈る)

第二光景、曾我の宅(一、虎少將兄弟の母を訪ひ來る、二、兄弟歸り夫妻の盃す、三、兄弟別れ去る)

第四所作

同廿八日夜

第一光景、狩場への途上(一、道行、二、二女母と共に雨を祈る)

第二光景、工藤假屋(一、本田間接に幫助し、兄弟復讐す、二、祐成圖死、時致捕はる)

第五所作

同廿九日朝

同廿九日朝



右大將家假屋(一) 賴朝裁斷  
時致の尋問處置  
女殺油地獄(社會戯曲)

第一所作

享保六年(?)四月十一日

第一光景、舟中一與兵衛馴染の姉妹小菊會津客と野崎詣す

第二光景、野崎詣途上(一)お吉與兵衛に意見す  
(二)與兵衛會津客と喧嘩す  
(三)與兵衛武士に泥を投掛け斬られんさす

第二所作

同五月二日

與兵衛宅(一)山上講立寄る  
(二)與兵衛勸當の相談  
(三)法印與兵衛妹おちの病を祈禱す  
(四)與兵衛勸當せらる

第三所作

同五月四日夜(第一光景)  
同六月六日夜(第二光景)  
同六月八日夜(第三光景)

第一光景、お吉宅(一)お吉夫七左衛門掛乞に出行く  
(二)與兵衛親體兵衛夫妻暗に與兵衛を悪まんて来る  
(三)與兵衛金を借らんさ欲し遂にお吉を殺して金を奪ふ

第二光景、(一)備前屋前 與兵衛の遊蕩  
(二)花屋

第三光景、亡お吉宅(一)お吉三十五日遠夜  
(二)與兵衛捕はる

「曾我會稽山」は二孤の復讐を寫したるもの、而して二孤の復讐は最も人口に膾炙したるのみならず、彼亦幾度か之を讀きたるを以て、此曲は却て二孤を寫すに之を正面よりせずし

て之を側面よりし、第一第二所作の如きは全く二孤の關係者のみを寫して二孤を出さず、  
纔に第三第四第五所作に於て之を出したりき。

第一所作に於ては當日輿論の如何に二孤に同情を表したりし乎を示し、浦殿さへも爲に身を殺すに至りたることを叙し、第二所作に於ては第一光景の結果として事變報告に走るの途上の兩派争鬪を叙し、第三所作は第一第二所作に於ける他人の同情幫助を寫したるに引換へ、親族の之が爲に如何に苦心する乎を寫せり。即ち二孤は仇人と相見るに至りたれども母の爲に一たび故郷に歸らざるべからざるに至り、虎少將に逢ふて去る。第四所作は二孤が親族友人の苦心と幫助とを負ふて遂に復讐するを叙し、兄祐成は死し弟時致は捕はるゝに及び、第五所作に至り、賴朝が二孤復讐の爲に起りたる出來事の善後裁斷をなし、并に時致の尋問處置を以て終る。

精しくいへば、第一所作は第一光景の綺羅粲然たる大奥婦人列坐を以て起り、第二光景の憎らしき梶原の無禮、しめやかなる浦殿鬼王の暗涙となり、第三光景の梶原と巴母子の可笑味ある争となり、激越せる浦殿の刃傷生害となり、急遽なる二の宮の急使となれり。



第二所作は第一光景二の宮妻の驚悲に起り、第二光景藤澤に於ける姦計となり、多忙なる二の宮夫妻の争となり、疾風枯葉を捲くが如き争闘となれり。

第三所作は第一光景祐經の遊興より人をして手に汗を握らしむる團三郎の捕はれ并に仇敵相見に至り、第二光景虎少將と母との悲惨なる會合夫妻の契りの悲中の喜び出立の劇痛となれり。

第四所作は第一光景母と二女とが惡念の道行焦心の雨乞より、第二光景復讐の絶頂に至り、勇壯なる祐成の鬪死に至れり。

第五所作は頼朝の遺憾なき裁斷より、時致が慷慨なる尋問答辨に至る。

亦○以○て○成○功○し○た○る○彼○が○史○戯○曲○の○如○何○に○轉○換○し○た○る○光○景○を○有○せし○乎、如何に之が各光景は彼此の調和を保ちし乎を見るべき也。

「女殺油地獄」に至ては、彼が戯曲の最も具備したる跡を有せるもの。一の我儘者が遂に殺人取財をなすに至り遂に捕はるゝに至ることを寫し、之が光景の配置轉換亦其宜を得たり。

第一所作は外に於ける與兵衛を寫し、第二所作は内に於ける與兵衛を寫し、第三所作は殺人取財の與兵衛を寫し、遂に罪と罰との與兵衛を寫せり。

精しくいへば、第一所作は、第一光景與兵衛相識の娼婦小菊が會津客との遊樂を叙し、第二光景も吉が意見、與兵衛が會津客との喧嘩、過誤の爲に斬られんとしたる危難に及べり。

第二所作は、喧しき山上講中の出場、痛心なる勘當の相談、馬鹿らしき祈禱より出でたる怒號、聲涙淋漓たる勘當を叙せり。

第三所作は、第一光景に於て悲痛なる徳兵衛夫妻の慈愛と義理の纏綿より、遂に慘毒なるお吉殺に至り、第二所作に於て噴火口上の踏舞に均しき遊蕩を叙し、第三光景に於て遂に大破裂の捕縛を叙せり。

亦○以○て○彼○が○成○功○し○た○る○社○會○戯○曲○の○如○何○に○轉○換○し○た○る○光○景○を○有○せし○乎、如何に之が各光景は彼此の調和を保ちし乎を見るべき也。

而して光景の潤飾物とも稱すべき場所の形容即ち舞臺に於て大小道具となるべきものは、所謂地の文中に於て之を叙したり。



(二) 経過の調和 戯曲が叙事詩と其の躰を異にする上に於て、多くの進みつゝある時間を有する能はずして、成るべく事の顛末を二三のまとまりたる時間(即ち各所作の経過中)に聚めざるべからず。而して其の二三のまとまりたる時間に聚むる能はざるものは、戯曲人物の口を假り若くは其他の方法によりて之を示さざるべからず。且つ出来得べくんば其まとまりたる時間の甲者乙者の距離さへ甚しく遠からざらんことを望むものたり。何となれば戯曲に於ては重に其経過を見ることに由て事の顛末を知らざるべからざれば也。何となれば甲乙二所作間の數分時に十年二十年の経過を想像するは一日二日の経過を想像するよりも困難なれば也。

要するに場所の轉換は成るべく異りたる風色を有さんことを欲し、時間の轉換は成るべく遠き距離を有さんことを欲す。

彼が戯曲は其成功の作に於て経過の調和を害することなき下の如し。

曾我會稽山(史戯曲)

第一所作の出来事

建久四年五月二十八日朝

第二所作の出来事

同二十八日昼

第三所作の出来事

同二十八日昏

第四所作の出来事

同二十八日夜

第五所作の出来事

同二十九日朝

女殺油地獄(社會戯曲)

第一所作の出来事

享保六年(?)四月十一日

第二所作の出来事

同五月二日

第三所作の出来事

第一光景、同五月四日夜  
第二光景、同六月六日夜  
第三光景、同六月八日夜

(三) 所作の調和 戯曲は斯く事の顛末を二三光景二三時間に於て見且つ聞かざるべからざるを以て、亦此の二三光景二三時間の中に戯曲的動作を聚めざるべからざる也。而して其舞臺以外の動作は、戯曲人物の口を假り若くは其他の方法によりて之を示さざる可らざる也。且つ其戯曲的動作即ち所謂所作の調和を保つには亦人物の配合、動作の配置、動作の統一、動作の點綴、動作美、詞美等の宜きを得るものあらざるべからず。

今彼が成功の戯曲につきて之を檢すべし。



人物の配合 「曾我會稽山」(史戯曲)に於て之を見れば、

曾我十郎祐成(敏捷)

曾我五郎時致(疎豪)

二の宮太郎安清(好武人)

蒲入道範頼(思謀深からずと雖血性にして依慈の意に寛む)

曾我の母(思慮あり)

虎及び少將(婦人)

右大将頼朝(入主)

工藤左衛門尉經(森智)  
梶原平次景高(邪慢)  
京の小四郎(利に目くらむ小人)

其各所作に於ける配置は、

第一所作

蒲入道と梶原

第二所作

二の宮夫妻と梶原等

第三所作

工藤経と曾我兄弟

第四所作

曾我の母と虎少將附たり京の小四郎

第五所作

曾我兄弟附たり二の宮

頼朝と時致

頼朝と時致

以て其如何に配合せられたるや知るべきのみ。

「女殺油地獄」(社會戯曲)に於て之を見れば、

河内屋與兵衛(世間知らずの我慢者)

繼父徳兵衛(忠實小心の者)

母お深(義理強き者)

四島屋女房お吉(如在なき世話女房)  
夫七左衛門(物學き男)

其各所作に於ける配置は、

第一所作

與兵衛と世間

第二所作

與兵衛と父母親戚

第三所作

與兵衛とお吉

以て其如何に配合せられたるや知るべきのみ。

動作の配置 「曾我會稽山」に於て之を見れば、

第一所作

曾我に同情を有する蒲入道と工藤經たる梶原等の衝突

第二所作

曾我の縁者二の宮夫妻と工藤經たる梶原等の争闘

第三所作

仇敵相見て空しく別る(曾我と工藤)

第四所作

相逢ふ喜と相別る悲(曾我と母及二女)

第五所作

曾我復讐

即ち第一所作の又傷生害人をして遺憾の感に堪へざらしむるものより、第二所作の急遽人



をして焦心煩悶に堪へざらしむるものに進み、更に高まりて第三所作の逼促手に汗を握るもの及び離合感慨窮りなきものに至り、遂に第四所作復讐の最高頂に達し、以て第五所作の收結となれり。

以て動作の如何に安排せられつゝある乎を見るべき也、以て動作の如何に變化を有する乎を見るべき也、又以て動作の如何に進行しつゝある乎を見るべき也。

而して其部分に於ても、各所作中其動作に各種の安排を有し變化を有し進行を有すると、こゝに詳説するまでもなし。

「女殺油地獄」に於て之を見れば、

第一所作

世間知らずの我慢者たる與兵衛と社會との衝突

第二所作

與兵衛と父母との衝突——放逐

第三所作

父母の悲痛  
與兵衛を吉を殺して金を奪ふ  
大破裂(與兵衛捕はる)

即ち第一所作の喧嘩危難人をして持餘すの思あらしむるものより、第二所作の亂暴放逐人をして悲憤淋漓たらしむるものに進み、第三所作父母の慈心より殺人取財の慘酷なる最高

頂に達し、下て結局の捕はれに終れり。

以て動作の如何に安排せられつゝある乎を見るべき也、以て動作の如何に變化を有する乎を見るべき也、又以て動作の如何に進行しつゝある乎を見るべき也。

而して其部分に於ても、各所作中其動作に各種の安排を有し變化を有し進行を有すると、こゝに詳説するまでもなし。

之を要するに彼が成功の戯曲は一方に全戯曲に於ける趣味の大激騰點あると共に、一方に各部分に於る趣味の小激騰點あり。而して各部分に於る趣味の激騰點は其實全戯曲に於る趣味の激騰點を作る所以に非ざるはなし。唯其社會戯曲は多く中央集權的にして全戯曲の趣味激騰點十分の高さを有すれども、史戯曲は多く地方分權的にして部分の趣味激騰點比較的に大なる高さを有し、時に尾大振はずの勢を呈せんとするものあるを惜むべきのみ。

動作の統一 「曾我會稽山」に於て之を見れば、其最大脈絡は、第一所作の浦入道自害に

よりて第二所作を起し、第三所作母の思慮が暗に妻母と訣するの機會を與へ、而して浦入道自害の原因たる割符の贈與及び妻母の祈念の効果(?)たる雨は主として二孤を幫助し、



以て第四所作の復讐に至らしめ、遂に復讐の收結たる第五所作に終るにあらずや。  
 「女殺油地獄」に於て之を見れば、其最大脈絡は、第一所作の喧嘩と危難とが第二所作に於ける勘當を惹起す基となり、勘當が金銭の需用を急にし、忽ち第三所作の殺人取財に至り、遂に結局の捕はれに終るにあらずや。

其第二位脈絡第三位脈絡以下は今擧げず。

彼が史戯曲の社會戯曲に比し、其動作の配置上比較的の部分過重の弊を見るは、畢竟するに動作統一方の幾分か薄弱なる所あるに由らざるべし。

動作の點綴 是れ彼が戯曲特殊性の一也、稱して地の文と云ふ。以て風色時間及び獨白を以て顯はすべきもの、總て并に戯曲人物行爲の批評等を表し、以て動作の間隙を點綴す。彼が戯曲の一方に唱題すべき躰あるは主として此の地の文あるが爲め也。

而して地の文は勿論風色其他を顯はすと雖、其最も重なる働きは獨白に代はるにあらずんばあらざるべし。獨白を用ふると傍に於ける地の文の唱歌即ち所謂淨瑠璃を以てするとの得失は今且く論せず。然れども吾人は戯曲にして所謂淨瑠璃を用ふるもの亦優に其の一躰

たることを認むるに躊躇せざる也。

動作美 彼の所謂實と虚との皮膜の間が則ち藝なりとは、則ち現實と理想との調和に成れる美的結象にして始めて一の戯曲的動作を形くることを唱破したるもの也。

此の意能く戯曲の真相を説明したるものと謂ふべし。實に戯曲的動作は全き現實を以て満足するものにあらずして、必ずや美的洗禮を受けたる現實ならざるべからざる也。即ち眞實ならざるべからざる也。

彼が史戯曲は則ち理想戯曲なるが故に、其虚其實に過ぎて、時に荒唐不稽に陥らんとするの傾なからず。故に其動作の美的現實なるものは其れ唯彼が社會戯曲にある乎。

彼が社會戯曲中「女殺油地獄」の如き其普通躰として最も成功したるもの。これ別に説くまでもなしと雖、他に一種の「道行」なるものを挿める躰あり。亦彼が成功戯曲の一躰にして、而して彼は却て多く此躰を採用したりき。

「道行」とは何ぞ、一層嚴密なる意義に於ける唱歌により、踏舞を以て表情するもの也。其唱歌は平家物語太平記の重衡東行俊基東下の條若くは謠曲の道行等より脱化し來り、其踏



舞は猿樂より應用したり。即ち世の所謂所作事なるものは也。而して専ら男女同行等の途上に於ける情景を并叙するに用ゐ、尋常の戯曲的動作よりは更に大に其動作を美的にし、却て現實よりは稍遠ざかりしもの也。

是れ彼が戯曲中其最も多く抒情詩的躰を含めるの所。其文辭は彼が雅俗折衷文中に於て最も多く雅躰を含めるものたり。情思纏綿、落花の雨ふるが如く、飛雪の風に驚くが如し。而して其踏舞に至ては雍容搖曳、行雲の月を掠め、柳條の地を拂ふに似たり。

詞美 戯曲は言ふまでもなく眼の美術たると同時に耳の美術なるを以て、動作美に并せて詞美を有せざるべからず。

彼が戯曲の詞美は各種の詞品を具へて富瞻豊艶幾んど天縱の技能を逞ふしたること再言するまでもなし。

蓋彼は能く雅俗文を折衷し、會話に於ては多く俗躰を用ゐ、地の文に於ては多く雅躰を用ゐ、殊に所謂道行の如きは最も多く雅躰を用ゐたれども、然れども彼此相調和して毫も接續の痕跡を示さざりし也。彼は最も自在なる省筆を用ゐたりし也。彼は宛然活けるが如くに

景情を叙したりし也。彼が詞美にはあらゆる潮觀變化を有したりし也。

蒼波萬古  
流不極  
白鳥雙飛  
意自閒



(在自幻變)



### (三) 彼が戯曲の躰の進歩

彼が戯曲の進歩史は即ち日本戯曲の發達史なりき。彼より以前のものは幾んど戯曲として之を見るに足るものなかりしは言ふまでもなく、彼より以後のものも勿論「假名手本忠臣藏」の如き大序より大團圓に至る十一所作の大曲ありたりと雖、其大曲なると其幾分か踏舞上の便宜を増したるの外は、之が躰に於て幾何の進歩をも見ざりし也。而して其戯曲として見るに足らざるものより、一個の具備したる戯曲にまで日本戯曲を進捗せしめたるは、實に彼の成功に因らざるばあらざりき。

然れども彼と雖、亦固より多少の前者に負ふ所のものなくんばあらざりし也。否、彼は首として左の數者に負へり。

彼以前の淨瑠璃 彼が戯曲は、實に此の彼以前に於ける淨瑠璃を發暢せしめたるものなること言ふまでもなし。

謠曲 彼が其戯曲に高雅の要素を添へ得たるは、謠曲與て大に力あり。其如何に謠曲

に取る所ありたる乎は彼が戯曲の「天鼓」「酒吞童子枕言葉」「沓狩劔本地」「最明寺殿百人上臈」以下の謠曲翻案より成りたるを見ても知るべし。就中所謂「道行」の如きは最も謠曲に負ふ所の大なるもの。又「天鼓」の如き謠曲躰を加味して未だ圓熟せざるものあるのみならず、「最明寺殿百人上臈」の如き、猶故らに謠曲に擬したる所ありしを知らずや。

#### 最明寺殿道行

行衛定めぬ道なれば、越方も何處ならまし。是は一所不住の沙門にて候。我此處は信濃の國に候ひしが、餘に雪深く成り候程に、先此度は鎌倉に上り、坐禪に籠り、春になり修行に出ばやと思ひ候。蝶の翼の白粉を草にこぼして、梢には鶴の霜毛を脱ぎ懸る。雪は花より花多き、木曾の三坂の谷風は、吹けども袖に寒からず。

歌舞伎 即ち演劇。主として其敘事詩的躰を戯曲的躰にするが爲に採用する所ありたり。彼は曾て都萬太夫の爲に脚本の一種を書きたりしのみならず、其「天鼓」の如きも、現に多くの脚本的痕跡を見る。

舞(舞の本を参視せよ)。歌祭文。説經。小歌。詩歌。雜藝。



「平家物語」「太平記」を首として、和書。漢書。佛書。其外。

然り、彼は實に此等の數者に負へり。去れども彼は徒に模倣是れ事とするものにはあらずして、消化したるものなりし也。舊き材料を以て新らしき結構をなしたるものなりし也。此等各種の資料も、一たび其天才の坩堝中に投すれば溶解して美的結象をなし、而して其渣滓は沈澱排除し去りたりし也。

斯くて彼が此等の負ふ所を地盤として天才の工作を加へ、以て一種の具備したる戯曲の躰を成すに至るまでには、實に進歩の四階級を歴たりき。

(一) 彼が戯曲躰の進歩第一期は、則ち其舊模型套襲時代也。概ね六所作に分ち、每所作極めて短簡に且つ之を叙事詩として聽くべきも之を戯曲として觀るべからざらんと欲する所多く、其文詞も至て幼稚なるものなりき。彼以前の作と幾んど異なることなき也。彼が初作數種是のみ。

試に吾人をして爰に彼が初作及び彼以前の作の一所作を抄し、以て其如何に相似たる所ある乎を對比せしめよ。

續源氏 (作者未詳)

土佐少権正勝が語りたるもの、所謂土佐節の曲也。寛文延寶の頃より、専ら江戸に行はる。抄する所は其第一所作。

第一

借も其後、抑一條の院の皇后をば上東門院ほうしと申奉り、御堂の關白道長公の姫君にて、後一條の院の國母也。ゆげん柔和の御生得。上より中はさもあらん、下つ下の事までも、御心なづくばれの隆より茂き御喜。赤染衛門少納言泉式部を始としてあまたの官女暇なく日夜にうしつき奉る。其比又、當今の御めのきに式部の前と申せしを門院へ付させられ、ゆかりの者ぞと勅ありし御詞の色を取り紫式部と召されける。容顏優美なるのみ、和歌文學に長つて、しうちの譽れ有りければ、日なふる雨のつれづれに珍らしき草紙を御目につけよと仰を受け、石山寺に引籠り、心を清め、只管に趣向を案す。こころゆゑなく、思のままに書きたて、御前に静々持出でて、ななし置き、人々に會釋なし、もこの座敷にならる。門院の仰には「誰なりとも此草紙開き見よ」この御事なり。泉式部坐を立て草紙のもこに跪き、そと押開き讀みけるに、何れのおく人時に女御更衣あまた侍らひ給ひける中に、いとやんこなききわにはあらぬが、すくれて時めき給ふ有りけり、こいふよりして書き始め、光源氏の高明幼くおはせしよりけふまでのこころなきを結び合せて、唐大徳佛の道も残りなく筆にいはせし言の葉は類稀なる事ともなり。則ち是を源氏物語と名付けられ、三個の大事、五個の傳、種々の讀くせ、未代まで和歌の鏡さなりけるは誠に日出度き草紙なり。門院御機嫌淺からず、紫式部に品々の御褒美を賜りて、御簾の内に入給へば、皆々お暖賜りて、局々に入給ふ。

以上は則ち一光景を見るべきものなり。其行文の叙事詩的なるは勿論、趣向の單純に、其動作の乾燥なる



こゝを見るべき也。

是は、源の頼光は去る永延年中に平親王將門が子平太郎良門を追伐有りしけんやうに、從四位の上攝津守に任ぜられ、渡邊の右舍人源の綱、主馬の丞坂田の金時、碓氷頼貞の丞橋の貞光、勘解由の判官卜部の末武、何れも今度の思しやうに任官あれば、日にそひて源氏武門の繁昌は目出たかりける次第なり。頼光仰けるやうは、『我夜前の夢に一國を三つに切り其一ぶんを我手にいれ大敵を滅す見たるは如何に面々』と、皆に仰有りければ、平井丹波の守保昌しほし案じて申様、『刀さいふ字を三つ書きてゑいふ字に候得ば、三つに切て其一つ御手に入るを見給ふは、如何なる猛將大敵をも唯一刀に切縊め、御代泰平になし給ふ、御靈夢に存る也。夫れ武の一字は戈を止るに申せども、畢竟我家の器物、敵を碎くに之を以てす。然らば、戈に止まるに申す義理こそ然るべし。斯る目度出き折柄は、益々御願をこらしめて、男山正八幡へ銘劔一振御奉納宜しむるべく候』と手をつかれてぞ申さる。頼光は聞召『實に尤の調哉。神前の奉納には新にうたせ然るべし』と御でうあれば、渡邊進み出で、『さん候。三條の小鍛冶宗近こそ無雙の鍛冶にて候へば、仰付られ候へ』と申上れば、頼光『宗近召せ』と有りければ、頼貞の丞貞光畏て三條の宗近の方に立越へて仰ひお前に罷りけり。

是れ明に叙事詩体にして、戯曲にあらざる也。

頼光御覽下、右の次第を一一に仰あれば、宗近語でお請をなす。『場所はいづくぞ宜しき地を望申せ』と有りしかば、宗近承り、『某多年信仰の御神にて候得ば稻荷山にはを立て打申さん』と言上す。さらば、渡邊御劔の越奉行を仕れ、斯様の時には必ず障碍のあるならい、悪魔除の爲めにさて、伯耆の安綱が打たりし黄金作りの御太刀を綱にこては下されけれ。綱は三度頂戴し、宗近を召具して稻荷山へぞ急ぎける。

以上亦一光景。

去る程に、三條の小鍛冶宗近は稻荷山にほごを立て、ないげしやう／＼しんをさり、『夫れ神代の昔いさなきいさなきの尊、天の浮橋を踏渡り、豊葦原を探索り、此國を求めさせ給ひしも、この餘の徳ならずや。それよりして日本武東夷退治の勅を受け、關打越へて遙々東の旅の道すがら、此處彼處より朝敵の誇りたけつて騒ひ寄り、追つ、返しつ戦ひしに、或は降参、或は又逃る者、討るゝ者、其の數がきり白雲の、はや遠山にちら／＼と槍を隠す折柄に、翠御狩に出給ふ。夷はこれを幸き四方より取圍み、枯野の草に火を掛ければ、ほのふ天に燃上り、煙は伏してこれを捲く。夷は鼓を打鳴らし、おめき叫んで掛りける。翠御劔を抜持て枯野の草を薙ぎ給へば、劔の精靈嵐となつて煙も草も吹き返せば、天に耀き地に滿ちたる猛火は却て、たきを焚けば、數萬の夷は失てんげり。それより四海波靜かに國も治まり民の戸もさす事を忘れしも、此御劔の徳さや。まつた唐土漢王の三尺の劔は居ながら秦の亂をトヘリ。去るに依て今の世までも大將軍の御劔をば御はかせと申さや。和漢共に是同ト。今打つ所の御劔も宗近一人の高名を所るにあらず。普天率土の重寶萬代ふへきの器也。當山稻荷大明神、十方ごうしやの御神、力を合てたび給へ』と幣帛を捧げつゝ、立てさゆうさ居てさゆうさ、千度の拂ひ、百度の拜、天に仰ぎ、地にひれ伏し、肝膽碎きて祈りける。重れて幣帛振り立て、『さんトやうさいはいく』と『せんさいく』いかに宗近劔を打へき時至りぬ。たのめや／＼とたのまふ御聲諸共に、童男腹に飛上り、宗近に再拜し、腕き、扱御劔の金はと問へば、宗近ちつと答へて取出し、敵への槍をばつたど打てばつと打つ。つと打てばつたど打つ。つとはたりてう／＼／＼。打重れたる槍の音、山下に響きておびたしく、悪魔も恐るゝ計りなり。表に小鍛冶宗近を打ければ、童子は相触なりける故、裏に小狐丸さあざやかに打たりけり。太刀の刃は天雲の亂れて風に散る如く、動くばかりの有様は誠に天下第一の二つの



餘、此の御劔にて忽ち東西南北のかたきをやすく打治め、五穀成就たるへき也。如何に宗近、丸は汝が信心なす此山の主稻荷の神靈、力を添て出願せり。猶々行末守らん」と、雲にうつりて内陣の扉内に入給ふは、有難かりける次第なり。

斯る所に天地頓に鳴動し、風枯木をかへしつゝ、さも凄下き鬼女顯れ、「如何に小鍛冶。其名劔なたへ渡せ。我は是平親王が娘如藏の尼が靈魂也。此土に殘て信州戸隠山にさいらいなす。今劔成就せば我本懐の妨也。此方へ渡せ」と呼はつたり。渡邊の綱すはこそ、大紋の袖引ちぎつて君より賜はる安綱の太刀拔持つて切拂ふ。鬼形は怒てついでに振りしげし闘ひたりけるが、鬼女渡邊をかゝり掴んで雲をさしてぞ飛行なす。折筋に頼光は名劔出來の日なりとて、人々を御供にて、稻荷山へぞ社参ある。宗近急き出向ひ、御劔を差上て、渡邊が有様明神の加護有し始終を言上なす。頼光驚き給ひしが、御劔を頂戴ましめて、宗近には數の褒美を賜り、がくらの花取々に神をすいしめ給ひけり。去程に渡邊は雲中にて組合ひしが、名劔の加護にてや、拂ふ刀に鬼女がいな切て離せば、雲中より大地へさうさ落ちたりける。頼光始め、「こはいかに、扱も危き次第や」と喜び給ふは限りなし。時に伴の鬼女又顯れて馳せかゝるを綱は太刀にて切拂ふ。今は飛行の通力消へ、「重て本望達せん」といふ聲はかり残りつゝ、虚空に飛んでぞ失にける。綱は行方暇み付け、さも候は下き、それよりも君の御供仕り、御太刀を差して歸りける。天晴れ危き次第や、貴殿上下おしなへて皆感せぬ者こそなかりけれ。

世繼曾我 (近松初時の作)

彼が天和の頃宇治加賀の爲に作りたるもの。其最初の時代を代表すへきものなり。抄する所は其第五所作。

その後、「二の宮の姉御前母上に近づき餘り兄弟を待懸給ふ御姿見申も悼はしく候へば、露の間なりとも御心を慰さめ申さん爲めにこそ斯は計らひ申なれ。是に在ます方々は、大儀の虎御前化粧坂の小將とて兄弟が思ひ人、記念を持姿し給ふが、母の異例を聞給ひ、斯いたはらせ候」と、涙と共に給へば、母上聞し召。「何方々には聞及びし虎少將にて候とて。誠に世になき者共を死後まで不便を加へられ、是迄訪せ給ふ事、おへす」と嬉しけれ。左は云ながら昨日にも母も空しくなるならば、今の憂き目は聞下もの、思へば方々の訪に憂きの増り草、葉末の露も消失し、元の聲の我身が」と、また絶入てぞ歎かると虎少將も涙に暮れ、「御歎はよも露下。老少不定の界にて、若きも先立習なり。歎きを止めましめて、記念の御文御覽下、暫し慰みませ」と、彼の品々を奉る。悼はしや母上は、文押披き讀んまはしたまへども、こぼるる涙に目かくれて、文字も定かに見へ分ず。一くだりを見給へば、「あち不思議や、十郎が手跡にて守刀は誰者に取るを書て有る。此帖は誰事ぞ。虎承まはり、」借は左様に候や。耻しながら自らに三歳の若ましますな、手越の伯母が許に隠し置れ候と涙を共にぞ申さる。母は夢とも辨まへず、「十郎が忘記念のありけることやはや疾々」と身隠し、唯兄弟が蘇生たる心地して、頼て使を立ちらる。乳母抱き來りけり。

前者の「頼光の丞貞光畏て宗近方に立懸へて伴ひ御前に頼りけり」と異なる所なきにあらずや。

老母は膝に掛抱き「さても、面さしの善く祐成に似しものかな。十郎も時宗も此孫一人の樂ぞや。左こそ最期に祐成が此子が事こそ思ひけれ。思へば不便や」と聞熟れて泣給ふ。左れ共姉君甲斐々しく老母に力をつけ委せ「何れよしなき御歎き。夫侍の家に生れ、刃に懸るは習なり。これ又親の爲め事を殘し討るれば、果報いみじきあやかり者。誠に斯様の勇まき世繼の有れば、何事も打忘れ御祝ひませ。と諫め給へば、虎少將「又こそ委り候



はん」を、古里さしてぞ歸りける。

「光景の單簡見るべし、

是は借置。新開の荒四郎五郎丸兩人は朝比奈に追散され、耻辱の上に身の大事如何せん案下しが、所詮此上は虎少將を懸つて、曾我が所縁を相尋ね、一々亡ぼし、其後朝比奈をも打殺し、浮世を廣く送りんこ、兩人謀合せつゝ、化粧坂へ急ぎけり。彼處になれば先案内乞ふて頓て座敷へ入にけり。虎少將思ひ寄ざる事なれば既に座敷を立んとす。其時に五郎丸少將が手を取れば、荒四郎虎が手を取り、「情なし、先暫く」と引留む。虎少將是を見て、「御川あらば重れて」と立上るを引留め、「それ遊君は風情を元とし情深きを遊女とす。御身達は引替て世に無き曾我が殿原の情深きは何事ぞ。今より後は我々を彼の兄弟と思し召し、情を懸て給はれ。」と、むくつけなる體男が愛想なげに申にそ、虎少將打笑ひ、「兎角の答辭へ申せばこそ、御心にや障りなん。我等も積らば腹立ん。」と、差俯いて居たりけり。兩人聞て「奇怪なり汝等。是へ来るは別義なし、曾我十郎祐成が一子ある由上聞に達し、召捕て参れの上意を蒙り來りたり。片時も早く出すべし。」と奥を差して入んとす。流石女性の事なれば、偽り事とは知らずして、裾や袂に纏り付き「君の上意は左もあらん。去ながら死矢たり共御披露あり助けさせ給はれ。」と手を合せてぞ歎かると。元より實なき事といひ、名にし負ふたる虎少將左も嫌かに申にぞ「左程に思し召ならば、いかに無情く當るべき。心易かれ方々。命助くるのみならず御前宜しく云直し、曾我が家を取立て参らせん。先は目出たし益」と、暫し時をぞ移しける。斯る折節鬼王兄弟、虎少將を頼み曾我古里への紀念の品を送りしゆへ聞ま欲しく思ひ、化粧坂へ來りしが、此由を見るよりも大きに悦び、偏へに天の與へぞ、義秀方へ使を立る。朝比奈聞と均しく一息に馳來り、「亦乳女抱き來りけり」と同じ大音上に申す様。君を掠むる偽りもの此内に有と聞く。是非の實否を暗さん爲め小林の朝比奈是迄來りたり。

早く出よ」といふ隙に、鬼王つゞみ入り、頓て障子を押開き、五郎丸今は逃れぬ所ぞと、元より聞へし大力物々しやと云まゝに、弓右手に掻きみ七八間投出す。朝比奈透さず走り懸つてむづみ組む。兩方勢らぬ大力、金剛力を出し、此處を最期とせり合しは、是や龍虎の戦ひも斯やと思ふ氣色なり。斯する隙に鬼王兄弟起上り、五郎丸に飛懸る。朝比奈さつと見て、「不覺なり汝等。流石名を得し義秀が加勢を頼み討べき」と、云より早く取て伏せ、高手小手に纏めて、新開尋れて駈廻る。あら無慚やな荒四郎、此勢ひに恐れをなし、逃る處のあらずして、邊に有し長櫃の蓋をあけ、其中へ身を隠す。虎少將こは幸ひと蓋の上へ乗りかゝり、女なりとて夫の敵いのでか以て餘さんと、出んとすれば乗懸る。義秀立寄て長櫃に繩を懸け、つれづれなり共新開殿、御前へ運行く其内は驚かてまします。五郎丸を引立御前を差してぞ上りける。彼の朝比奈が其振舞天晴剛なる働さやと貴殿上下おしなへて昔感せぬものこそなかりけれ。以て彼が曲藏の第一期を知るべき也。

(二)彼が戲曲の進歩第二期は其新藏曲の初めて定まりたるもの。全曲五所作を以て成り、大體に於ては略新藏曲を成功したり。唯だ未だ舊模型を脱し得ずして多少の敘事詩跡痕跡を存したる所あり。

之が標本たるものは「世出景清」也。即ち全曲を

第一所作 惡七兵衛景清尾張の國熱田大宮司の家に隠れ、其女おのゝ姫を娶りてありしも、頼朝南都東大寺を再興するを機とし、平氏の爲に仇を報せん欲し、工人中に混して、先づ秩父の庄司重忠を狙撃せんせしに、事敗れて遁る。



第二所作 景清これより先き京都清水坂のかたほきりにて遊女あこやに馴れ、二人の子ありしが、今南都より連れ來りて其家に隠れぬ。然るにあこやの兄に十藏といふ悪漢あり、之を官人に密告して賞を得んと欲し、之をあこやに隠れしを。偶おのゝ姫の替來るを見、あこや嫉妬の餘りに之を告げ、景清は再び捕手を破りて遁る。

第三所作 景清を誘ひ出さんか爲に大宮司を囚ふ。おのゝ姫父に代はらんさし來る(道行)。梶原之を捕へ、水火を以て責め問ふに及び、景清之を聞き、自ら出で縛に就く。

第四所作 景清の牢舎にあこや二子を伴ひ來り、罪を謝し、二子を刺して死す。偶十藏來りて景清を尋かむるや、彼大に怒り牢舎を破りて出て、十藏を引裂き、走り行きしが、又引返し自ら元の牢舎に入る。

第五所作 大佛殿再興成るを以て大赦す。然るに景清は二日前已に斬られ三條なはてに梟せられしに、景清猶死せずして依然牢舎にありといふものあり。賴朝京都に歸りて三條繩手に至り之を見れば千手觀音の首也。賴朝遂に景清を召して之を宥す。景清これより賴朝に従ひしが、其後姿を見て忽ち敵意を生下たりしも、自ら悔いて其兩眼を抉せり。

の五所作に分ち、未だ全く敘事的躰を脱せずと雖、大畧戯曲的躰を成したりき。

(三)彼が戯曲躰の進歩第三期 史戯曲躰五所作もの、全く成功したるもの是也。是に至りて第二期躰は確立して全く戯曲的躰を成せり。勿論彼が戯曲の躰として一方より見れば悉く敘事詩風なることはいふまでもなしと雖、少なくとも此期のものは敘事詩的躰を以て其戯曲的躰を損することあらざる也。

「曾我會稽山」の如き、之が標本として見るべきもの。

(四)彼が戯曲躰の進歩第四期 即ち彼が成功の社會戯曲躰也。概ね三所作を以て成る。

「女殺油地獄」の如き、及び

第一所作 河内屋

第二所作 紙屋

第三所作 大和屋

第一光景

第二光景 (名残の橋臺し(道行) 綱島)

を以て成る「心中天の綱島」の如き、其標本たり。

第四期第三期の差異は曲に五所作三所作の別あるの外、後者は前者よりも戯曲的躰の確立したること比較的に多きを見るに在りとす。故に二者の優劣は寧ろ多く想にありて少く躰にあること知るべき也。

閉雲野鶴

何天不飛





### (四) 彼が戯曲の想

戯曲は言ふまでもなく人生詩也。人及び人の戯曲的動作を歌はざるべからざる也。人とは何ぞ、戯曲の骨子たるべき個人の性情是のみ。戯曲的動作とは何ぞ、戯曲の主意たるべき個人と四圍及び個人想と社會想との衝突若くは調和是のみ。

### (二) 戯曲の主意

(一) 彼が戯曲主意の狀況 史戯曲及び社會戯曲は、二者大約左の異りたる狀況を有せり。

史戯曲(理想戯曲)

人事を中心として寫せり。

故に其寫すや、客觀的にして、從て過去の也。

人間(人の普通性)及び人間の戯曲的動作を歌へり。

故に其戯曲的動作は、共同中心想即ち道念(人間の光明的半面)の權化たる廣き意味に於ける善人と自己中心想即ち私心(人間の暗黒的半面)の權化たる廣き意味に於ける惡人との相衝突して、終に善人が惡人に勝つものたり。從て及共同中心想と自己中心想との相衝突して、終に共同中心想の勝利に歸するものたり。



是の故に彼が史戯曲の幾んど總ては、其想より論すれば、嚴格にして狭き意味に於ける戯曲の資格を具せざる也。

社會戯曲(寫實戯曲)

人を中心として寫せり。

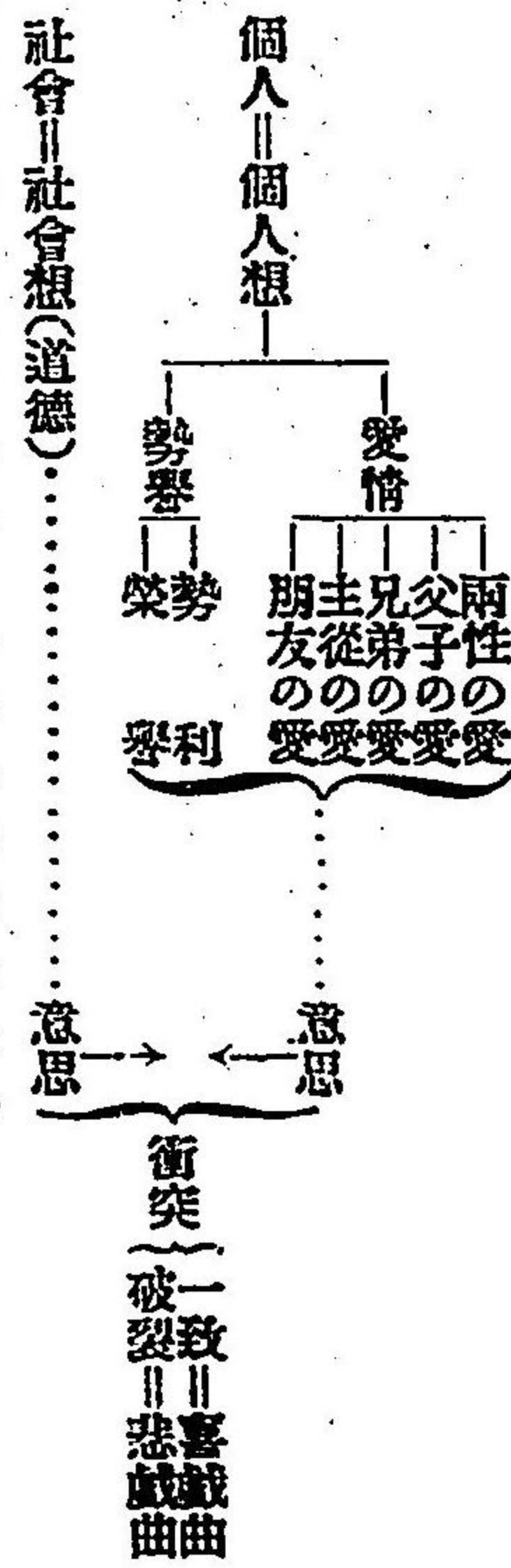
故に其寫すや、客觀的兼主觀的にして、從て現實的也。

個人及び個人の戯曲的動作を歌へり。



故に其戯曲的動作は、個人想社會想との相衝突して、終に二者一致し、若くは破裂するものたり。

從て又個人と社會との相衝突して、二者一致し、若くは破裂するものたり。



是の故に彼が社會戯曲は、眞成の戯曲たる也。

今以上の所論をこゝに彼が戯曲につきて一々證明するとは、煩ふを厭ふて之をなさざるべし。若し其果して史戯曲が人事を中心として寫し、從て其寫すや客觀的にして又過去のなりしや否やを知らんと欲せば、試みに鄭成功の事跡を寫し、「國姓爺合戦」其他を見よ。若し其果して史戯曲が人間及び人間の戯曲的動作を歌ひたるものなるや否やを知らんと欲せば、試に鄭成功即ち和藤内が當日の理想的武士にして其爲す所は則ち當日の理想的武士の

爲す所なりしを見よ。若し其果して社會戯曲が人を中心として寫したりしや否やを知らんと欲せば、試に忠兵衛を寫したる「戀飛脚」其他を見よ。若し其果して社會戯曲が個人及び個人の戯曲的動作を歌ひたりしや否やを知らんと欲せば、試に忠兵衛等が活きたる人にして其爲す所は則ち活きたる人の爲す所なりしを見よ。

(二) 彼が戯曲收局の狀況は、

史戯曲 喜的結案

社會戯曲... 喜的結案 樂世的意向ありたるもの

悲的結案 厭世的意向ありたるもの

史戯曲の喜戯曲なりしは其理想戯曲なるが爲め也。理想は調和す、故に理想戯曲は多く喜戯曲たるの傾ある也。

社會戯曲の喜戯曲たり又悲戯曲たるは其寫實戯曲なるが爲め也。現實は調和し又衝突す、故に寫實戯曲は以て喜戯曲たるべく又以て悲戯曲たるべき也。

彼の社會戯曲中の喜戯曲

「長町女腹切」。「淀麗世瀧澤」。「陸奥歌」(辛ふりて喜戯曲なる)。「戀八世吉原」(辛ふりて喜戯曲なる)。「丹波奥作」。「夕霧阿波騎馬」。「霧の門校」。



彼が社会戯曲中の悲戯曲

「會根崎心中」。「心中重井筒」。「心中二枚繪草紙」。「堀川浜の鼓」。「卯月の紅葉」。「卯月の色上」。「心中萬年草」。「五十年忌歌念佛」。「掛鯛心中」。「心中刃は水の明日」。「戀飛脚」。「生玉心中」。「繪權三重帷子」。「博多小女郎涙枕」。「心中天の網島」。「女殺油地獄」。「心中宵庚申」。

而して彼が悲戯曲中には、個人想の社会想に衝突するに當りて、好て社会想に服従したるもの即ち個人想を打破して自死を甘じたるものあり。是れ其厭世的意向あるもの也。紙屋治兵衛の類是也。然れ共其中樂世的意向の餘に出でたる厭世的意向なりしもの亦少なからず。個人想の社会想に衝突するに當りて、猶個人想を社会想より重視したるもの即ち自死の意なくして止むを得ず死に陥りたるものあり。是れ其樂世的意向あるもの也。龜屋忠兵衛河内屋與兵衛小町屋惣七笹野權三の類。

是の故に彼が戯曲政局の状況は、必ずしも彼を厭世詩人なり若くは樂世詩人なりとして之を宣告すべき斷案にはあらず。宇宙の暗黒なる半面を見て、人生の極致を衝突にありと信じたるもの、世の所謂厭世者にあらずや。宇宙の光明なる半面を見て、人生の極致を調和にありと信じたるもの、世の所謂樂世者にあらずや。知らず彼は宇宙の暗黒なる半面のみ

を見たりし乎、宇宙の光明なる半面のみを見たりし乎。

「心中」の題目の如き、彼は唯如何にして観客の同情を惹き得べき乎の上より工夫し而して之を見出したるのみ。始めより自家の理想を其間に挿みたるにはあらず。日本人の理想を寫實して史戯曲を作りたりし也。日本人を寫實して社会戯曲を作りたりし也。

## (二) 人物の性情

(一) 彼が史戯曲の人物 彼が史戯曲は吾人が屢之を繰返す如く、歴史の出來事を假りて國民の理想を寫したるもの也。

唯歴史の出來事を假りたるもの也、故に其出來事は千古の出來事にして、其人物は千古の人物也。唯千古の人物也、故に勿論尋常以上の人也。唯尋常以上の人也、故に多くは理性の人也。

唯國民の理想を寫したるもの也。故に其出來事は其出來事が當に有すべき波瀾の極致を有し、其人物は其人物が當に有すべき性情の極致を有するもの也。



是の故に彼が史戯曲の人物は、多く理性の極致たる人物なる也。多く理性の極致たる人物なる也、是の故に彼が史戯曲の人物は多く理性の權化なる也。多く理性の權化なる也、是の故に彼が史戯曲の人物は人間の普通性を有して個人性を有せざる也。人間の普通性を有して個人性を有せざる也、是の故に彼が史戯曲の人物は人間にして個人にあらざる也。人間にして個人にあらざるものは則ち理想の人にして活きたる人にあらざる也。是の故に彼が史戯曲の人は亦理想の人にして活きたる人にあらざる也。

例之ば彼が史戯曲の大將たるもの、頼光も頼朝も悉く同一人なるが如き則ち是。

(二) 彼が社會戯曲の人物 彼が社會戯曲は吾人が屢之を繰返す如く、材を現實社會に採りて現實國民を寫したるもの也。

唯材を現實社會に採りて現實國民を寫したるもの也、故に其出來事は世上實際にあり得べき出來事にして、其人物は尋常世上にあり得るの人也。唯尋常世上にあり得るの人也。故に多くは感情に支配され易きの人也。

是の故に彼が社會戯曲の人物は多く感情に支配され易きの人にして、理性に富みたる人であること稀也。蓋し理性に富みたる人は、能く智の力意の力を以て情の作用を抑制し、以て其高尚なる行爲を擇ぶべしと雖、亦能く煩惱以上の道理を以て其個人想となし、以てかの愛國愛人信仰等の如き大且つ高き個人想の爲に其命運を賭することあるべしと雖、要するに是れ尋常以上の人にして、彼が擇みたる國民中には甚だ之れを見出し易からざりし也。

然れども其社會戯曲中に寫したる人物の性情に至ては、之を世上實際にあり得たる人より寫しを以て、皆明に個人性を有し、皆明に活きたる人なりき。

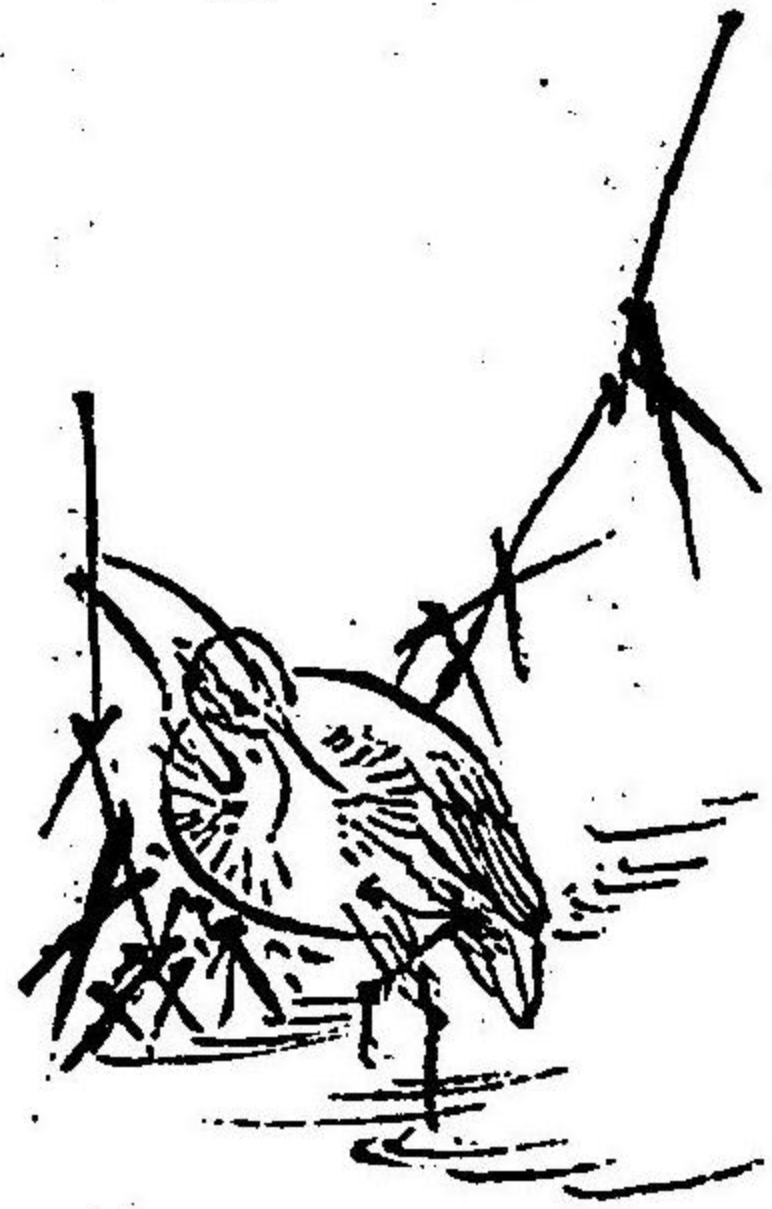
例之ば紀伊國屋小春の如きを見よ。彼女が辛酸幾多を経來りて如何なる場合にも決して自家を失ふとなきは、豈其總ての婦人の中に於て別に一個の小春として見出さるゝ所以にあらざや。彼女は初會の武士に逢ふても、猶外界の刺撃の爲に毫も其思念を妨げらるゝ所なく、自家の問はんと欲する所は之を問ひ、自家の言んと欲する所は之を言ひ、恰も男性の如く然るものありき。然れども其問ふて十夜の中に死したるもの、地獄に往くや否やに至り、うつとりとして幾微の間に女性の本然を呈露し來れるが如き、竟に是れ彼女も亦明に女性な



るにあらざるや。其男性的なるは彼女の個性のみ。其竟に女性なるは則ち女性の通性のみ。彼が社會戯曲の人物が能く生命ありて能く千載に不朽なる所以は、實に其個性を保ち亦并せて其通性を保つに由らざるはあらざる也。

夕陽山外山

春水渡傍渡



### (五) 彼の戯曲の想の開展

彼が日本戯曲を成功せしめたるは、其躰に於て成功せしめたるよりは其想に於て更に大に成功せしめたりき。彼は全く自家の力を以て日本の戯曲想を其未だ戯曲想をなさないものより其絶頂なるものに至るまで開展せしめたりし也。

彼以後の戯曲は、其躰に於て時に彼の戯曲よりも踏舞に便を有したるものなからざりしと雖、其想に至ては遠く彼が戯曲に及ばず。遂に彼をして我が人生詩人壇上に獨り千古の長技を繼にせしめり。彼の彼たる所以は實に此の戯曲想の開展にあらざるはあらざる也。

而して彼が其戯曲想を開展したるは、三期を經過したり。

(一) 彼が戯曲想の開展第一期 是れ彼が舊戯曲模倣時代及び新戯曲工夫時代のものにして、自ら前後兩半期に分たる。

前半期即ち舊戯曲模倣時代のもの、其想に於て舊戯曲と幾んど異なる所なし。即ち舊戯曲



が一種の鬼神戯曲滑稽戯曲にして、怪力亂神復讐武功嫉妬冤鬼繼子談男女情話等の小頓末を歌ひたるが如く、彼が此時代の戯曲も同じく一種の鬼神戯曲滑稽戯曲にして、亦怪力亂神復讐武功嫉妬冤鬼繼子談男女情話等の小頓末を歌ひたるもの也。

其全曲を六所作に分ちたる「世繼會我」時代のものは論なきのみ。其稍進歩したる「天鼓」の如き、其跡に於ては寧ろ新戯曲工夫時代のものに遠からざれども、其想に於ては猶極めて卑俗なるを免れざりき。

試に吾人をして彼が戯曲想の如何に大に開展したりし乎を知るべく、こゝに「天鼓」の梗概を掲げ、以て異日に於ける彼が戯曲と相對比するの便を得せしめよ。

天鼓

第一

寛平法皇の院の御庭に太見の縣主時景萬歳樂を奉り、初春の賀をなす。月窟雲客上下の女中喜ひ衰めそやす。末の宮樂の親王御階近く出させ給ひ、「我朝に萬歳樂を奏ること何の時代より起りしか」を問ふ。縣主「聖德太子攝政の時高麗の伶人を召され、一越關の島の樂をうつし、鳥追を初め、平調の萬歳樂を和け、萬歳樂を申す事を造り創り玉ひ、千歳功經る狐の草にて張りしを天鼓と名け、此樂と共に傳へて故三位富士原に至りしが、富士原死して家を繼ぐべき男子

なく、娘澤瀉と申して當春明けて十八歳、聲も拍子も無類の器量なれど、女なれば憚りて今庭上に奏演したる二人徳若智界之介才若武界之介なる舊代のものに傳へり。故にこの二人は主人に代て、かくは奏演するものにて、又自家は是れ澤瀉が母方の叔父なるにより、後見養育する』よしを告ぐ。親王は時景が言葉の色に見ゆ戀の、心の水の下草と埋れて、繁る澤瀉が噂に、深く迷はせ玉へり。關白基經「苦しからざれば、澤瀉を宮に召され、且其珍蔵する天鼓を獻せしむべし」とて、重ねて院宣あらんを告げ、此日はこの儘退出すべしと命す。

これより徳若才若二人の萬歳の舞あり。才若は遂に丹波國能勢の稻荷へ、徳若は津の國西の宮殿裏へ參詣せんが爲め出で去る。

太見の縣主は御所より急ぎ歸りて、「今朝院の御所にて智界之介武界之介が萬歳を御覽の序に、澤瀉の噂を申し上げし所、御宮仕に参らせよとの仰せなり、姪ながらも澤瀉は果報の者ではないか」といふ。妻聞て、「何がそれが目出度いぞや。我が娘の夕映が親王殿へ参らばこそ目出度くも有るべし。其上あの澤瀉は、幼うて二親に離れ、根性ひがみ、意地悪く、屋内の者が憎めども、御身殿の姪子と思ひ、皆々こらへて居るばかり。あの殺演しを憂らせ、我根を埋らせ、隣の實を數へる様に目出度いの娘のとは、おの様に不氣轉な。春の初に聞ともなや。」と、ぶつくさく不機嫌なり。時景も其氣になり、「娘の夕ばねを澤瀉とすりかへ、親王へ参らん」といひ、鼓をも上げよとの宣旨に因りて之を奪ひさらんと欲し、嫡子宇治太郎と謀れり。

春日影門松の縣主の門外に、「やらん目出度や、千町や萬町の鳥追が参りて、福の神祝い」さて鳥追來れり。かねてしめし合する所ありて、澤瀉鼓を袖にして鳥追と共に逃げ去らんす。宇治太郎見つけて追かけ、澤瀉を奪ひかへす。



鳥追は笠引ちぎつて隠ししたる大刀を取出し、遂に「某は吳服の中將雪枝が家人巴丸と云ふ童なり」と名乗り。「主君雪枝と澤瀉姫人知す玉章を通はし御夫婦の約束有る所に、不慮に勅勘を蒙り都をよそに流浪となり、互に割なき御心察しまいらせ、姫君をすかし出し、添せ申さん爲に此に及びし」と呼はる。二人將に闘はんせしに、時景聲を付けて、之を止め、「堪忍し難き所なれども、深き懸之間からは、中將も痛はし、姪も不憫の上なれば、某夫婦が了簡して如何にも遣し添はせ、御所へは銀夕映を差上て澤瀉と許るべければ、鼓を夕映に渡せ」といふ。澤瀉姫は「そは羨き仰せなれど、智界之介兄弟が田舎より歸りなば、鼓を渡すことを肯せざるべければ、逆ものこそに此の御思案もしてたまはれ」と涙を流して頼む。時景鼓を偽造して兄弟をあさむかん欲す。巴丸因て姫と共に狐を釣らん出て行く。

\* \* \* \* \*

二人は淋しき野中の小屋に潜みて狐の至るを待つ。忽ちに草原戦き、物音あり。すばやみすかし見れば、器量勝れし若侍、臘月夜に心をなやまし、春宵一刻千金月眺めすたる男つき。巴丸怒て狐の妨をなすことを叱せんとす。姫之を止めて「男同士は大事のもの、自らに任せよ。」とて出で、「薬にせん爲に狐を釣らんして吾なかけ置き候へば、愛を退て餘の所で遊ばさんせ」といふ。男「女郎の狐釣りは似合しからず、人に夫婦のあるやうに狐にも夫婦あり。妾をつらねば其つらさ人間同前と思はされぬは、神ぞ懸知らず。平に殺生止め玉へ。狐の代に此男を氣に入らずと手帳の情の害に掛らん」と手を取れば、振放し、「初對面に懸知らずは卒爾也。懸を知ればこそ狐を釣るのみ。邪賢になる故其所退くべし」といひすて、草舎の中に入る。既にして「是は丹波國能勢といふ所に千年功經し古狐、狐釣の大名巴丸が我眷族の若狐をも釣て殺す故、餘り不憫に存す、色ある男と變化し、兎や角いへども承引せされば、彼が叔父なる僧と化て意見し止めん」とて、狐僧と化して顯る。即ち出で、巴丸を見、佛法の五戒中殊に殺生界の戒むべきを説

きて之を止め、吾を觀て去り、而して吾の若鼠の油搗に生根を取られて遂に自ら吾にかよる。巴丸之を殺さんとする。狐道士の形を顯す、「我は是れ能勢の稻荷に仕へきて千年の白狐の神、汝が家の天鼓は我妻狐の皮なる故、付添守護を加ふる所に、太見の縣主夫婦心を合せ鼓を奪ふ偽り事知らず。殺生の罪を助けに來りしなり。其鼓だに持たらば彌守殿にかへりん」と告ぐるにより、始めて叔父の悪計を知り、「彌加護し玉へ」と伏拜み、歸らんせし所に、時景宇治太郎がけ來り、「御所より急に召さるるを以て夕映を上ぐべし、はやく其鼓を渡されよ、已に公卿等迎へに來れり」と、殿上人等出づ。姫巴丸にさやまき、「智界之介兄弟歸るまでは渡さず」といふ。迎へ公卿「異議に及ばず奪ひ取れ。」と令す。偶智界之介兄弟飛鳥の如く驅來り、官人等を投げ散らし、二人の公卿は冠裝束を引馴れけるに、刺下奴の下部なり。時景父子は圖て逃去る。因て共に大和路さして急ぎぬ。

第二

桃に柳に唐錦都の彌生を眺めんさて吳服の中將の弟小六郎露長出づ。謂ふ「我代々公家と生れながら、末子たる故幼少より東に育ち只人となり、關東の小六と呼ばれ候。去程に餘り都のなつかしさに去々年京都に上りては候へども、兄にて候吳服の中將勅勘を蒙り、澤瀉姫とやらんを伴ひ行方知れずなりて候へば、頼むべき人もなく、其ま東へも歸られず候所に、山路の判官梅豊と申す侍の情により、當年も京都に逗留致し候。然るに某若年より笛を好み吹き申し候間、此度鄙人の笛を聞き習ひ、藝一道の上手になつて東の土産に致さばやと存候。」と道途しつゝ、早咲櫻をくれ梅桃は盛りの屏越に女の住める家を覗き、兒女が三月の節句の難遊びしつゝあるを見る。小六郎其業を見て、釣り出してよく觀んと思ひ、横笛を取て果籠りの曲を吹く。女中聞て感に堪へ、皆條先にこぼれ出て、聴く。姫君言ふ、「驚は早や去時、今の笛に引されて時鳥なき啼くならば、夫を看に酒事せば、さふもさふも云へまへ。」腰元「ほんに左様



に候はマ、猶與あらんに。こりや〜時鳥聲ならはたつた一聲來啼け〜。』とささめく。小六郎聞て時鳥のまねを吹き、ほんぞんかけたさすらすせ、吹きけし〜まねける。女中主従の別ちなく駆け出で聲を尋ぬ。小六郎遂に見出されければ、姫君小六郎袖を扣へ、『妻なし鳥の傍近く音信玉ふ雄さま、ほんぞんかけたの御聲に、妾は雌思ひかけたぞ。羽がいの下で一番、四翼の鳥を成りたや。』と抱き付き、『姫御前の近頃はでなき御さげしきも耻しけれ共、今日よりは自らが殿御に持ればなりませぬ。』と言ふ。小六郎其怒ち遂て怒ち夫妻たらんといふを異む。姫君遂に仔細を語れり。『自らは太見の縣主時景が娘夕映と申す者。妾が従妹に澤瀉姫とて天鼓と申實の鼓を持たる人のおはするが、鼓踏共御所様へ上よとの事なるを、妾が父母怒に迷ひ、彼の實を奪ひ取り、自を澤瀉と偽り、宮仕させんとの恐ろしきたくみ故、痛はしや澤瀉様、鼓を持って館を出て其行方知れざれば、彌々父母怒りつよく、搜して殺し、實を奪ひ妾に付んと巧み玉ふ。夫が悲しう候へば、自早く男を持ち、父の邸を出るならば斯様の憂事聞くまい爲め、早ふ殿御が欲さのまゝ、あれ御覽せよ、今日の節句の難遊びも、女子難は一つもなく、男の難計にて、妾が殿を待心に奇縁を祝ひし折からに、なふ羅男の御出は守本尊の引合せ、ほんぞんかけたは其證據。猶二世かけて此上は、厭でも厭でも夫婦ぞや。』と。小六郎手を打て其奇に驚き、自家が澤瀉と契約ある呉服の中將の弟なるを告げ、澤瀉は今安くありやと問ふ。『常々津の國西の宮の姫夷、丹波の國能勢の里稻荷神信仰なれば、能勢の里の西の宮にあらん父母に内通せしものありと聞けば、いよく氣遣はしき故、大事の出て來ぬうちに如何にかしたし。』と答へけるに、小六郎は『幸ひ山路の判官とて思案第一の弓取と熱懸なれば、之と謀らん』と將に去らんと言ふ。姫も俱に共に去らんと言ふが、白晝にしてせんすべかりしに、家例にて難遊びに男難を興に乗せ腰元共を男装せしめ、殿様事して門外を練りて遊ぶことありしを利とし、遂に共に走る。

是より先澤瀉姫は丹波の國能勢の里稻荷の社司松垣藏人興宗を頼みて潜伏せり。而して智恵之分武畧之分巴丸をして中將の行衛を尋ねしむ。姫獨り藏人が家に在りしに、小六郎夕映來りければ、姫は驚て奥に遁入るを夕映疾にすかり涙を流して、其父母と一味するものにあらざるよしを語り、小六郎も自家が中將の弟にして氣遣ふべきものにあらざるを告げ、打さけて共に奥に入る。松垣が女房夫を招て、『縣主様よりの御頼み故、澤瀉が實を奪ひ取て参らせんと請合ひ、御褒美まで受けながら早く奪はすして、今は小六郎とやら夕映とやら従黨のもの多くなりたれば、最早自由になるまいが、思案が有るか。』といふ。松垣思案して言ふ、『御身狐が取附たりと俄に物に狂ひ、我は澤瀉が實の鼓の革に張られし千年狐の妻なるが、澤瀉が悪性故鼓の皮を取へさん爲め、附たりとつこらしう口をしやべれ。其上にて某智恵を出し、彼の鼓を取らん』と。是に於て女房伴狂して鼓を取らんと言ふ。小六郎聽かず、言争ふうちに山路の判官來りければ、小六郎理由を告げて頼む。判官引目の由來を説き、携へ來りし重藤の弓を引て己に放たんとす。女房恐れて『なふ恐ろしや、最早退を請ぞ』と叫びながら逃げ伏す。松垣任損たりと驚きしが、忽ち自ら狐澤のまねして罵る。判官之を詰て、太刀に手をかくるに、社人神巫『小狐我々にも附たり』とて鼓を奪はんと言ふ。偽狂あらはれ、小六郎二女を拉て去り、判官松垣夫妻を縛し、之を撲て然然として出て行く。

第三

頃は卯月。西の宮に呉服の中將巴丸が見なる年は廿七なれ共心は三つ子同前に感銘なる金目丸一人と共に住めり。一日堺の大寺は澤瀉が父富士屋の墓所なれば、行て住僧に謀り、澤瀉を尋ねんきて金目丸を具して出で立ち、寺に至りて富士屋の墓所を問ひ、ゆかりのものなりと告ぐ。僧語るに、『富士屋の娘澤瀉姫呉服の中將と申す勅勤の人に密通し



宣旨に背きしを以て、去願縣主時景の墓を廻り毀らるるを以てす。中將悲歎し、『所詮澤瀉我事を思切り親王に宮仕せば、波風立たず、自家も勅勘御免あるべし』と思ひ、形見書置を金目丸に與へ、澤瀉に尋達て自殺したりと告げしむ。澤瀉は松垣が難を逃れ、父の菩提所なるを以て此寺の宿坊に由縁を求め忍びたり、日参して中將に逢はんことを祈れり。一日途金目丸に逢ひ、之を問ふに、彼大聲上げて泣き御自害といひ、遺言を告ぐ。姫悲泣し、死せんとす。愚鈍なる金目丸遂に眞に死したるに非るを白す。姫は赫させき上げ、『我より先に大内にて陸奥の内侍さかやと御親みの有き聞く。昔の戀に引かれて自を思ひ捨て、親王様へ参りなば、思のままに陸奥を添はんがら、爲りて腹切て死たるまな。エ、腹立や嫉まじや。』と、忽ち半は狂し、『年月戀れし戀男、よその花はよもなまじり、起つ轉ひつ馳出づ。』

\* \* \* \* \*

五月五日の短夜も待ては久しの菖蒲草、菅屋の里の青井に、女中の住居唯ならぬ琴の鳴歌も植込の松に通ひて優しく聞ゆり。中將堺の浦より漫歩し來り、田舎に稀なる女歌に古郷忍びしく、籬の外面に立ちやすらひしに、何ぞ料らん歌は一歳我ちかひて陸奥の内侍が歌ひ出せし一曲なり。誰が傳へしかと聞き居るに、月待の用意と覺しく膝を庭に供けるに、空腹に覺ゆしまゝ、之を盗み食はんを、庭に忍び入り、聞はあやなし、軒の蓬や菖蒲もわがす、香をきめて徐く道寄れば、三方に行當る。賊に天の與へまは此事なまりと押頂き、油圓を解て押開き包まんとする所に、後の障子を明る音に驚き、膝は懐中し、油圓を捨て、襟先の手水鉢の石に身を寄せ、坐敷ひておはします。此度は一人神酒を持ち、『チ、くら、膝は何所らに有らん。』と探り當て、『ハア申し、お局様、そなへの膝を誰取たや見へませぬ。』といふ。中將彌息をつめ身を縮めてぞお在ける。若女障子の内より『な、御白洲に置け故、犬めが引て行つらん。』

其御神酒をもこぼさぬやうに手水鉢の上に置や。『あい』と答へて神酒を持、そりりくみすり足し、手水鉢を居ながら中將の頭の上に神酒の三寶置ければ、足の内へ頭は入り、肩の上に坐るにぞ、よしと思ひてお腰元障子の内にぞ入にける。中將元より酒好にて是も天の與へぞと手を指のべて神酒の湯をそと取て、三方のくりかたより瀧飲にすつとほし、我を忘れ、『ハッ、よい。』とちやつと口を押へ、夢に成さぞ觀せらる。や、有て局は襟先に立出、『お日様の御出迄御經讀申さんにて、いで手水を』と、三寶をそとせらるし、『な、誰ぞ手水をかけてたも。』腰元は柄杓を持出、『いかう聞いこいな。』と、中將の月代をがさりくみすり共、水の有べき様はなし。『イヤ申しお局様。宵に汲たる水なれ共、石鉢が漏るがして、水は雫もなし。』と云へば、局はあざ笑ひ、『あのいやるこまはいの。何の石が漏るぞ。忘れて汲ますに置きつらん。誰ぞ汲たての水を持って來て入りや。』と呼ばれば、南無三寶頭から水掛られては黒かりなると、椽の下よりくもりもて表へ漸く抜け出て、溜息ついて居りぬ。主の女行燈を持たせ椽に出で、庭を散歩し、油圓包を踏み、驚き、内に女ぶみあるを見れば、自身の筆にて吳服の中將に贈りしものなり。『我大内にて陸奥の内侍と呼ばし時、吳服の中將雪枝朝臣といふ人と深く契りかはせし故、數聞にひらき、不義の科さて、中將殿勅勘を受け玉ひ、妾も此身を成りける』よしを語る。折しも中將柴折月に音訪れ、『拙者は行暮たる旅の者、御門の外に宿り候所に、油圓包を大が御門の内へ入ぬれば、慮外ながらお尋ねなされ此方へたへ』といふ。そりやこそ主の出たるはと各のぞき立歸り、『斯様の文持てば、さぞ有らんぞ存しに、紙子の單物山田の案山子に異らす。』と、みつみ笑ふ。主嫌止めて『此文を持つからは中將のゆかりの人ならん。』と叫入れしに、中將なり。驚きしが知らざる眞似して語り、中將も同じく知らざるまねしてそれさなしに語り、『御身の落せし文の中にしのぶすり云ふ文もあり、おもたかみ云ふ文もあり、いづれが誠の戀なるか』との間に對して、『昔大内に在て陸奥の内侍に契り、勅勘を蒙りて止、こまなきの忘れ草に、』



太見の縣主の姪澤瀉に心をかはしたる』を告げぬ。主婦泣て、『陸奥の事をも思ひ切り、おもたかをも内裏へ上げ、勅勅御免の訴せよ』といふ。

此時おもたか姫中將の跡をしたひ來り、火影を力に此屋の門に抜捨てし鞋と履のあるを拾ひ上げ、『不思議や是は我方より中將殿へ贈りし履。まさしく、中將愛に居玉ふべし』とて、門をあらけなく打たとき、名乗りて明けよき叫ぶ。

中將驚きしが、陸奥『思案あれば先其御方を奥へ入れ衣裳を召替へさせよ』と腰元に命じ、自ら出て『左様の人は名も聞かず』と辭するに、強て入らん争ひ、腰元等來り、遂に門外に押出せばおもたか泣き伏せり。

陸奥中將をすくめて落ち去らしめんとせしに、中將『御身は陸奥の内侍ならずや』と抱きつかんとせしを、内侍つきのけて、『其御心故にこそ斯様におぢふれ玉ふなれ。自ら澤瀉も御身様に連添ふては帝の道標、世の闇へ、勅勅強くなり、御出世のあたならん管より名のらす忍び参らせ、おもたか様にもつれなくあたり、偽り歸したれば、妾が事と思ひ切り、おもたか様をも内裏へ上げ、世に出て、耻辱を雪がせ玉へ』と戒め、別杯を酌みしに、澤瀉が魂杯中に爛きなつて浮みしに、それをも知らず之を飲みければ、内侍怒ら顔色がはり、澤瀉が一念入替りて抱き付く。中將身の毛立ちてつきのければ、『生れがはつて何時迄もつひ離れぬ我妹者、放ちばやら』と泣叫び、かつび伏して絶入る。

時に宇治太郎家來を引具し來り、伏したる女を見るに澤瀉なりければ、これをいましめおき、中將もゐるに極つたりと戸を打破らんさひしめきける。内侍も正氣付き中將をすくめて柱を上り、天井屋根つたひに落ち去らしむ。宇治太郎押入りし故、欺て奥に入らしめしに、殘る一人屋根に心付くものはしこ上る所を突き、井の中に落さし。『中將を井中に突き落したり』と呼はる。亂槍井を刺し『中將を殺したり』と皆喜ぶ。

中將はこのひまに屋根傳ひに逃げ去れり。

宇治太郎澤瀉をも引出し、討て捨ん』いふ所に、金目丸大汗になつてかけ來り、『私は中將の家來金目丸申す者なれど、世になき主を頼まんよりはと分別いたし、澤瀉が家の寶天鼓を盗みとつたり』とさし出す。澤瀉怒て金目丸を罵りければ、金目丸『あの口が憎くければ切て捨てたし』とて、刀をかり、却ておもたかがいましめの繩を切ほごき、姫を押圍ひて天鼓をて持來りし箱の内なるは風の神の古太鼓なりとて、宇治太郎を嘲り、内侍は奥より出でて、井の中に殺せしは其連れ來りし侍なりと晒ふ。宇治太郎怒て圍ひしが、つなはずして逃行きぬ。

第四 澤瀉姫道行

したひ行く情の澤瀉思ひの沼、戀に育ちし澤瀉姫、夫に逢はんを力帯、心一つにとつをいつ、杖と笠よミ夕波の、立行末もあてなく落行く。

是は扱置。智畧之介兄弟は、中將の行衛を尋ねて大和路を越ねんミ水津の渡にかゝる。兄弟打乗り押出さんとする時、十五六なる童一人飛乗りしが、舟岸に逢するに及んで、童運賃を拂はすして行かんミす。松頭捕へて引戻す。兄弟之をなだむれども聽かず。童遂に我は伊賀の國に隠れなき上野の彌左衛門狐といふ老狐の子彌介といふ狐也。故の富士鷹の息女澤瀉姫が狐の皮の寶の鼓を持て泉州堺の寺に居りしが、姫は忍び出てたるため四松明神の命にて日本國中の狐三日代りに鼓の番を勤るこゝにて、我は親の名代として番に行くなり』とて、野干となりて騙り往く。二人驚き、智畧之介は大和路へ、武畧之介は都へ、姫君中將を尋れんと分れ去る。

\* \* \* \* \*



時景父子は堺の寺に姫忍ふよしを聞き來り圍み、住僧拒みしが、暴力に敵しがたく皆縛せらる。此時當番の彌介狐鼓をさられてはと澤瀉の形を顯す、鼓を抱て逃んさせしに、時景之を見付け飛つたり、むんづと組み、脇腹を二刀指とほすに、時景が首の骨に喰付きたり。宇治太郎「扱すさま下き女め」きたみかけて切殺し、雖なく天鼓を奪ひ取り、半死の父を肩に掛け勇みつゝ立歸る。

第五

斯て鏡の親王は、和州三笠山の麓に御遊の御殿をしつらはせ、七月初七の夕乞巧奠の音楽あるべしと、歌人文人を會す。縣主親子天鼓を擔へ參上し、『澤瀉は自害したれば』と、一通の書置と天鼓を捧げ奉り、『拙者が娘夕映をおもたかと思召、御宮仕に召上られば草葉の影の悦なり』と遣言せしと啓す。親王驚き『ア、不憫や自ら彼を聞き戀慕ひ、暫時思はかけしかど、吳服の中將雪枝と深き戀路を聞きしより、其後ふつと思ひ切り、過しことさへ悔みしに、我故自害したるは、不憫の者の心底や。』と、打しほれさせ玉ふ。而して『汝が娘のことは世の聞ゆ懼りあり。』とて、之を退け、今宵は七夕祭、乞巧奠の音楽におもたか形見の天鼓を打て、心を慰むべしとて手づから打玉へと、聲出です。豊林院の左少將進み出で、『昔唐土後漢の代に、斯様の例も候ひき。如何様主の別を悲み、鼓聲を出さぬと覺て候。折から近き手蘭盆會聖靈祭る折なれば、此猿澤の渚を八功德池に擬へ、管絃講を以て水施餓鬼を仰付られ、彼者の善提を御吊ひもや。』と申す。實にもとて、此事ある。

此時髪髻として池上に幽霊出で、左少將と問答し、おもたかが幽霊なりと稱し、鼓を打ち立ち舞ひ、面もかつらもなくなりすて口の鋭りし大の男となり、時景親子に飛かまり踏付け、『身共は伊賀の上野に隠れなき彌左衛門といふ古狐なり。』とて、子彌介が丹波の國千牟狐四松殿の仰にて、鼓の番をせしに時景に殺されしを告げ、時景が悪事を語り、遂に二人の首を引抜きすてける。親王驚き感して、『皆是處が誤より事起れり。』とて、中將の在所を尋ね、勅勘を宥めおもたかが一家主従をも召出し、本領本官を與へん』とのたまふ。彌左衛門狐喜ひ、人間のかつらも現し、播磨の姫路のお須磨狐中將おもたがをつれ庭上に顯る。宮田林の興九郎狐陸奥夕映を誘ひ來る。江州月の輪左衛門狐と名乗り、小六判官をつれ、勢州鹽合の小坊主狐丸金目丸兄弟を、京都六條左近狐武畧之介を、大和狐源九郎智畧之介を伴ひ來り、切那の間に一家會す。

以て此時に於ける彼が戯曲想如何を知るべき也。

斯くて其後半期たる新戯曲工夫時代に至りて、彼が戯曲は或る理想の説明となれり。即ち「一心五戒魂」が佛説五戒を説明し、「遊君三世相」が三世因果説を説明したる如き是也。巖に野狐の神靈を歌ひたるもの、今は三世の因果を歌ひ靈魂の五戒を歌ふに至りたり。

一心五戒魂

第一 殺生戒

文覺臘月十日餘りに於て奈智彌靈に入りて流行す。五日目に精氣竭き覺へず浮み出て流れしに、天童之を救ひ里人をして介抱せむ。文覺蘇生し、再び水中に入り、第三日の明方に隔絶す。此時一山鳴動して文覺が胸中より五色の魂飛び去る。

大納言資方卿の息女薫姫清水寺の觀世音に詣で、道に鳥部山に迷ひしに、向の峯より青色の玉飛來り征原に落つ。忽



ち見る十五六の童小鳥を捕りつゝあるを。姫遂に伴はれて其庵に至り、童は是れ遠藤左近將監の子虎若なるを聞き、

遠目鏡を見て家に於て姫の家出を聞き居るを知り、虎若に伴はれ歸る。姫の家にては御簾所及び家來早瀬源内武里の悪計にて覺力坊に姫を阻せしむ。虎若の内に姫を入れて往き、其悪計

第二 偷盜戒

源内齋姫を奪ひ嵯峨野に來り、姫に迫る。姫偽て之を詰し、共に棲まんが爲め下嵯峨に衣川といふ富貴の尼あれば、  
こに入りて物を奪ふべしといふ。遂に源内と共に忍び入り、密に主人を頼み脱れんとせり。虎若姫を奪來り、叔母  
即ち衣川に逢ひ、姫を救ひ、源内を縛す。虎若是に於て武者所に叙せられ、遠藤武者盛遠と更名し、渡邊の橋奉行  
す。

覺力坊の爲に復讐せんとして、山伏大勢橋に來り亂暴せしが、盛遠に橋の下に投込まる。

第三 邪淫戒

盛遠齋姫と結婚の席に袈裟御前を見、袈裟と結婚せんといひ出で、袈裟歸り去るや、彼は遂に狂ひ往く。

袈裟は夫源渡が宴しつゝある所に歸り、戸外の音を出て見て盛遠に迫られ、詰て自ら夫に代て殺さる。齋姫亦來り、  
渡に捕へられ、袈裟を殺したる事情を知れるものなるべしとて責問はる。

盛遠自ら出でて實を告げ、遂に渡諸共髮を切り、齋姫亦尼となる。

第四 妄語戒

袈裟の子爲若北山に僧とならんが爲にありしも、一日祖母衣川の所に歸り、父母を問ひ、祖母が持佛堂の袈裟の像を

指し、鳥羽の里にありと告げ、父は南都にて俊乘坊長源といふ高僧なりと語る。

齋姫、袈裟の侍女松が、杖尾録と共に尼となり、巡禮し鳥羽に至る。

爲若亦鳥羽に至り、袈裟の幽霊に逢ふ。

盛遠入道文覺爲若に逢ひ、自ら渡入道俊乘坊重源なりといふ。一如比丘尼即ち齋姫來りしかば、文覺之を袈裟なりと

いひ、伴ひ京都に返らしむ。

爲若の僕族藏尋來り、文覺に逢ひ、殺さんといひ、其勅せぬを見て止む。

第五 飲酒戒

渡入道俊乘坊南都東大寺大佛殿を諸國に勧化し再興す。文覺一如尼爲若を伴ひ來り、之に逢はしめ、共に奈良の名所

を見、猿樂の池のほとりにて酒を飲むに、茶店の女小春爲若に戯れ、遂に采女の執念なりとて池に引入れ、萬歳一如

尼之を止めんと欲して共に引込まる。

文覺驚き覺むれば、身は猿那智の瀑布下にあり。五色の魂(即ち五戒魂)は飛て其胸中に取まる。

要するに此期の作は鬼神戯曲滑稽戯曲の二種にして、人間以外に人間の禍福をなすべき靈  
力あること、或る小奸智者の悪計が笑ふべき失敗をなしたること等を歌へるものにて遠く

りき。

(二) 彼が戯曲の開展第二期は彼が新神史戯曲是也。復た徒に神怪滑稽を以て其目的とする



ものにあらず。人事を寫すを目的とし、史上の出來事を假りて經とし、人情を緯とし、以て人間及び人間の戯曲的動作を歌へるもの。即ち善者悪者と衝突し、善者中を徹にして頗る困厄を窮むることありと雖、正義は竟に最後の戦勝者なること是れ其想とする所也。第二期を分て亦前期後期とす。後期は其理想戯曲として成功したるもの。前期は其未だ確定するに至らざる者にして、往々に宿命説等を混ぜり。後期は寫して人情の琴線に觸れたれども、前者は猶未だ皮相の描寫たるを免れざる所あり。後者は主として所謂義理と人情との衝突を以て観客の同情を惹きたれども、前者は多く善者の社會若くは悪者より窘迫せらるゝを以て其同情に訴へたり。

彼が新史戯曲初時の作と其成功の作とを對比せよ、必ずしも嗷々を須みずして兩者を判別するに難からざるべし。  
 (三) 彼が戯曲想の開展第三期 彼が社會戯曲之に屬す。即ち人を中心として寫し、個人及び個人の戯曲的動作を歌ひたるもの。個人と社會との衝突、若くは個人想と社會想との衝突により、遂に破裂し若くは一致するは、彼が社會戯曲に於ける人生の極致とする所たり。

所謂義理と人情との衝突は、個人の上に於て、温かき血ある人の上に於て、観客の同情を燃すべく行はれたる也。  
 之を彼が戯曲想開展の頂上とす。

方宅十餘畝

神屋八九間



(閑 清)



## (六) 彼が戯曲の効果

門頭に立て叫ぶも猶返響あり。元祿文學の絶頂に吹鼓したる彼が戯曲、豈世上に反應なしと謂はんや。願ふに日本國民は如何に彼に負ふ所ありたる乎。

彼は國民の趣味を昂上せしめたり。天和貞享の頃までは、櫻井丹波土佐少椽井上播磨宇治加賀等に因て謠はれたりし一種の御伽物語然たる小話を以て、其嗜好を充たしたりし國民をして、元祿享保の曉には人生の極致を畫き最高義の愛を畫きたる彼が社會戯曲を翫味せしめ、義俠仁愛意氣廉耻英武國矜心等の高尚なる道徳を歌ひたる「國姓爺合戦」「關八州繫馬」「本朝三國志」「信州川中島」以下を愛好せしむるに至れり。

彼は唯り社會に作られたるのみならず、亦社會を作りたりし也。彼が著作は社會の反影なるのみならずして亦社會の教科書たりし也。彼が頭は社會の地平線より高きこと若干なりき。社會の趣味は彼の曳揚ぐる所となりて其地平線を高めたること若干なりき。

彼は高尚なる道徳を多數國民に布教したり。貴族的道徳たる武士の道徳は彼が通俗譯したる史戯曲に由て平民社會に弘布したり。高潔なる愛の眞義は彼の社會戯曲に由て默然社會に理會せられたり。之れが爲に國民の下層にも人生の眞意義を解釋するものあるに至りたり。

遂に日本國民が其精神に於ては悉く一種の武士なるに至りしもの、彼が戯曲の直接若くは間接の感化に因ること實に少なからずとなす。而して其感化力の大なる、彼が戯曲の偶々心中を題としたるが爲に、社會は誤て心中を流行するに至らしめたる程なりき。

彼は文學の典型を國民に與へたり。彼が文學の意義、彼が文學の修辭法、彼が文學の結構術の如き、皆後の作家の模範たりし也。出雲半二の徒が彼を學び、彼を剽竊して彼の範圍を出でざりしは勿論、馬琴其他の作家さへ彼を學びたること極めて多し。

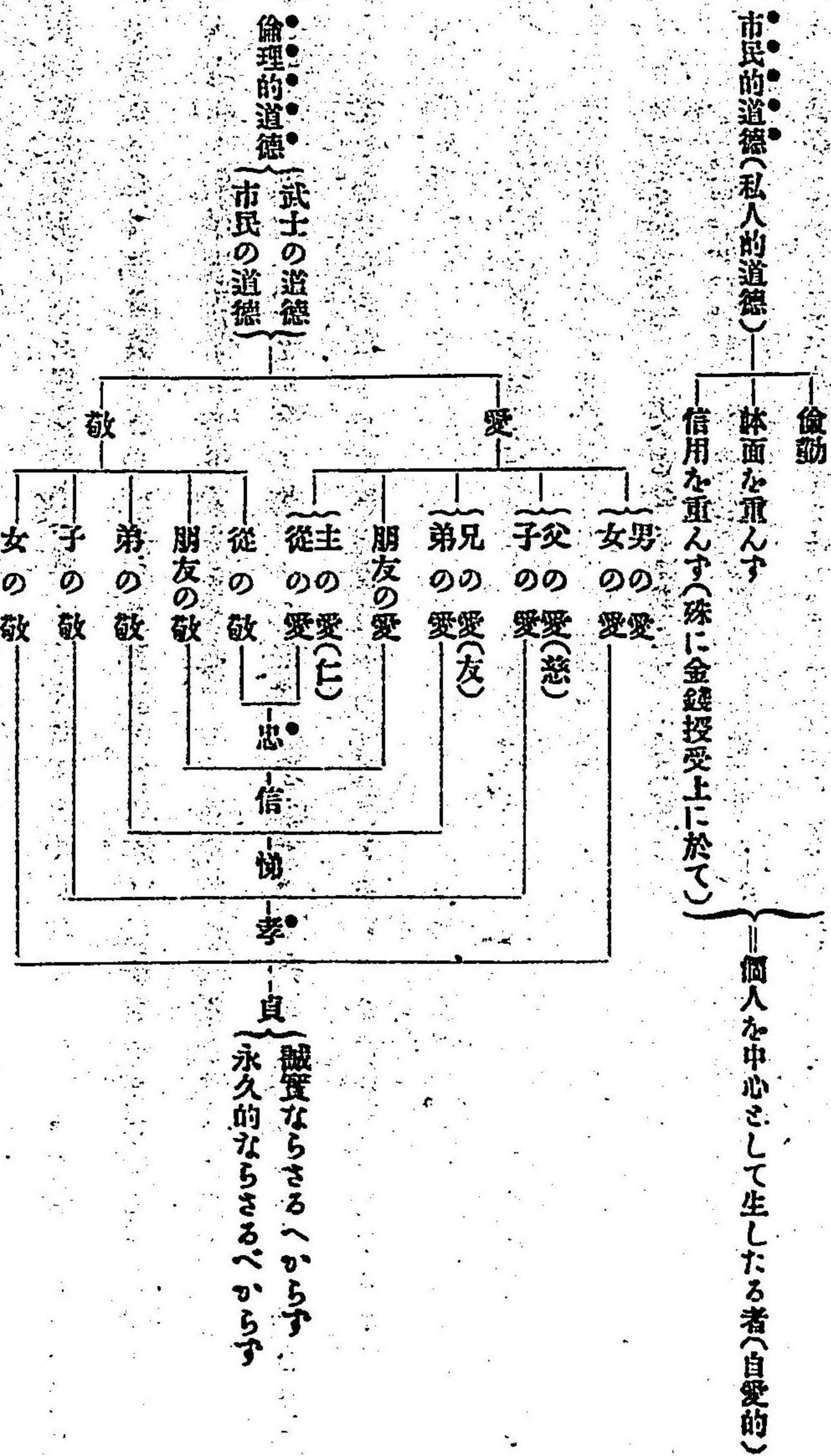
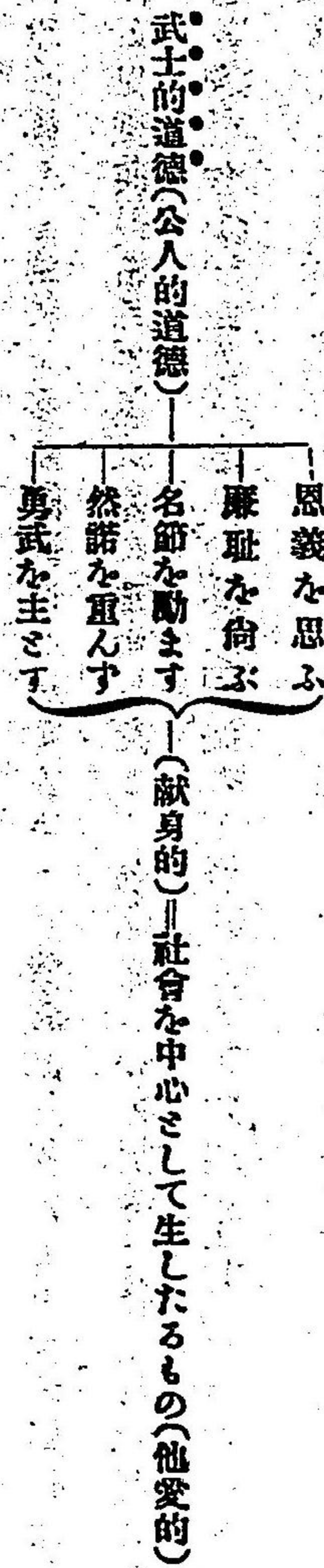
此くの如きは彼れが戯曲の世に影響したる重なる効果の一二なりとす。若し更に彼れが戯曲に由て何の學び得る所あるべき乎を究めば、吾人は首として下の三條を擧げんと欲する也。



(一) 彼の戯曲より學び得べき教訓

(一) 道德上の教訓 彼が戯曲の道德は最も明確なるもの也。其威力の猛烈なる、常に個人想と衝突して之を破壊する乎、然らずんば之を一致せしむることなくしては止まざる也。唯其訓示が馬琴等の如くに露骨ならざるのみ。

彼が戯曲の道德とは何ぞや。曰く、武士的道德是也。主として史戯曲の之を訓示する所。曰く、市民的道德是也。主として社會戯曲の之を訓示する所。曰く、倫理道德是也。武士道德、市民道德の通有するものにして、史戯曲及び社會戯曲の之を訓示する所。然らば何をか武士的道德といひ、何をか市民的道德といひ、何をか倫理道德といふや。



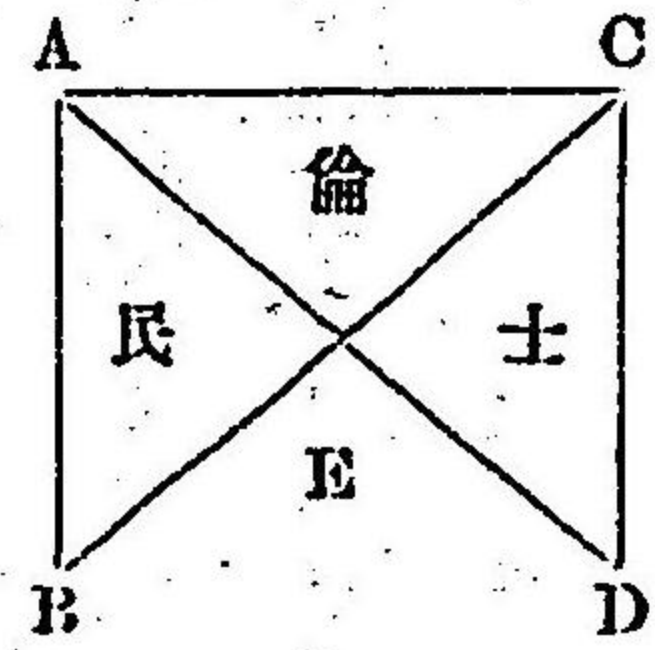
一、倫理的道德の武士道德として採用せらるるに當りては、第一に重せらるるもの忠也。孝、貞、悌、信、次を以て重んず。



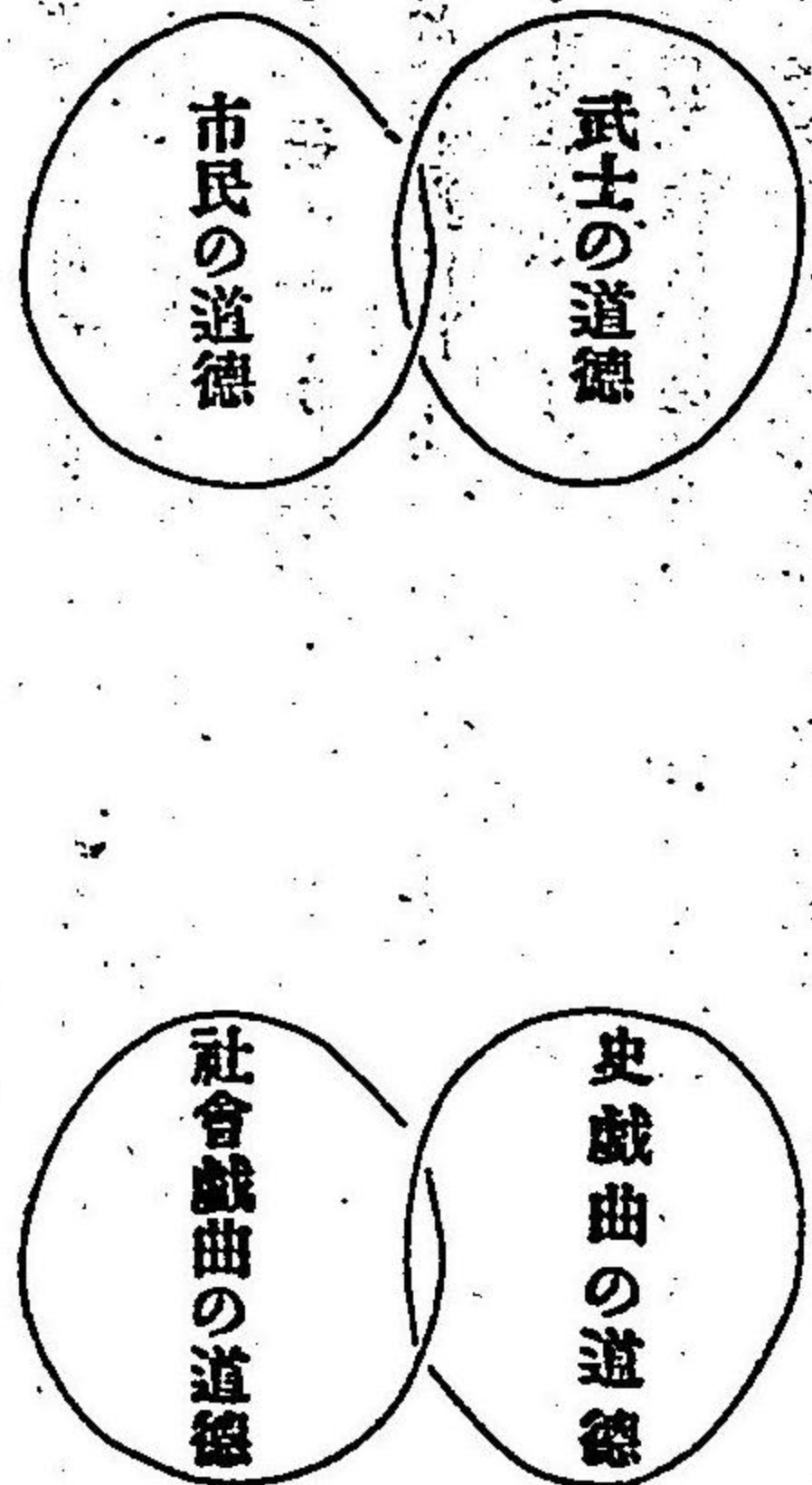
二、倫理的道德の市民道德として採用せらるるに當りては、第一に重せらるるもの孝也。忠、貞、悌、信、次を以て並べ。

若し夫れ三道徳の關係に至りては、

- 一、A C D 〓 武士的道德
- 二、A B C 〓 市民的道德
- 三、A O E 〓 倫理的道德



- 一、武士の道德 〓 武士的道德 (A C D) + 倫理的道德 (A C E)
  - 二、市民の道德 〓 市民的道德 (A B C) + 倫理的道德 (A C E)
  - 一、史戯曲の道德 〓 武士の道德 + 倫理的道德
  - 二、社会戯曲の道德 〓 市民の道德 + 倫理的道德
- 大體よりいへば實に此くの如しと雖、若し更に精密なる意義を以てすれば、



而して彼が戯曲の其道德的教訓を訓示すること果して此くの如くなるや否やは、吾人がこゝに冗曼を難からずして之を擧證するまでもなし。彼が戯曲を一讀するものは何人も能く之を見出し得べき也。殊に市民的道德として、金銭授受に關する信用の甚だしく重視せられたる如き、『町内に申譯なし』若くは『世間へ言譯して見せふ』等の觀念が甘じて身を殺すに至らしめたる如き、驕奢と遊怠とが最も惡まれたりし如き、中に就て著しき顯象にあらずや。殊に武士的道德として、恩義を思ふ笑田二郎を歌ひたる如き、然諾を重んずる出羽の冠者頼平を歌ひたる如き、名節を勵ます山本勘介の母を歌ひたる如き、中に就て極め



て見易き所にあらざるや。  
 加之こゝに最も注意すべきは彼が戯曲の更に國民的道德を歌ひたること也。假令其歌ふ所は多からざりしにもせよ、「國姓爺合戦」の如き實に隱約の間に愛日本國愛日本人若くは矜日本國矜日本人の思想を歌ひたりしを知らずや。而して國民の最も之を歓迎したりしも亦此の愛日本國愛日本人若くは矜日本國矜日本人の思想を歌ひたるが爲なるを知らずや。』  
 (二)眞理の片屑。單語片々、亦是れ一種の教訓として見るべからざるにあらざる。其俗調なるの故を以て金言の價値を疑ふを休めよ。

- 一、百里來た道は百里歸る。
- 二、盗する子は憎からず、縛ける人が恨めしい。
- 三、親はなきより。
- 四、懸路には偽もなく誠もなし。縁のあるのが誠ぞや。
- 五、鰯は枯木に巢を造す。大魚は小池に住す。
- 六、萬卒は求め易く、一將は求め難し。
- 七、かげを隠くすを母の慈悲、打つ杖は父の慈悲、心はばるこ子や思ふ。
- 八、侍までも貴からず、町人までも賤しからず、貴いものは此胸一つ。

- 九、夕朝の鐘の聲、寂滅爲樂さ響けども、聞て驚く人もなし。野邊よりあなたの友きてば、結脈ひきつに珠數一連、是が眞途の友さなる。
- 十、女は我人のむき思ひかへしのないもの。
- 十一、駕籠に乗る人、駕籠かゝ人、品はかはれど行く道は同トコ。
- 十二、鶯の巢に育てられ、子で子にならぬ杜鵑。
- 十三、天道も日月も神も佛は爵はあてはなされれど、此方から爵の下にあたりに往く。
- 十四、生身には餌食あり。人間一人生るれば乳房さいふ天道の御扶持方、正直に家職勤むれば、分限相應く天の乳房が備はる。
- 十五、戀さ小袖の一模様、身に引しめて合てこそ、疑心もよく苦心もよし。
- 十六、なんぼう憎み貯へても、死んでは帷子一枚。
- 十七、猫は火燵に寝臥する、犬は土邊で物喰へど、火燵な猫の眞似せぬは、身の分量を知つた故。
- 十八、春に育つも花さそふ蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず。知られず知らぬ中ならば、浮れそめまい狂ふまいもの。
- 十九、逢初めてより今日が日まで鳥の啼ぬ日はあれど、顔見ぬ日はなかつたに。
- 二十、大工殿より鍛冶屋が憎い。國の饑饉治がうつ。
- 廿一、曇さ忘るれば影忘るも。
- 廿二、國に盗人。家に風。



- 廿二、千夜萬夜は寝てこそよけれ。掛けてよいのは小竿に小袖。掛けて悪いは薄情うすなさけ。
- 廿三、摺子木に蒔繪、奢った望み。
- 廿四、形は産めども、心は産まれぬ。
- 廿五、只寝た内に、夜舟の着きたる如くなり。
- 廿六、千里を踏出す一歩み。
- 廿七、天に不時の風雲あり。人に旦暮の禍福あり。
- 廿八、水は石が鏡にあらずして、泰山の滴した、ういはは、塵ちりを穿ち、案なほは木が鏡にあらずして、羅桶つるべの液、案なほわけたを切る。
- 廿九、思ふに逢はで、思はぬが、情を盗み盗まれて、濡れより濡るゝ雪の笠、心變るな變ら下さ、浮れ出るぞたゞな  
られ。
- 三十、狐は尺寸の穴に隠れて千里の虎を圍る。
- 卅一、鏡の曇りは研げば暗れる。いかな上手の鏡さども、破鏡はつぐにもつがれず。
- 卅二、強いばかりが勇士は申されまじ。
- 卅三、惡に強きは善にも強し。
- 卅四、善と惡とはたまり水、導く方へ随ふならび。
- 卅五、焦りたる種は芽を生ぜず。落花枝に歸らす。
- 卅六、天を以て眠さし、地を以て休さし、國民を以て心さす。
- 卅七、總じて酷い目を見まいと物の哀れを知つたり、人のおれそれ、世の中の義理順義を知るが最後、貧乏神が乗移のりうつり

- 卅八、唐を照らす日影も日本を照らす日影も光に二つはなし。
- 卅九、口にあまき食物は腹中に入れて害をなす。
- 四十、刃やいばの錆は刃より出で、刃をくさらし、樺山の火は槍より出で、槍を焚く。
- 四十一、鳥にあらざれば鳥の心を知らず、魚にあらざれば魚の心は知られども、人の心は人が知る。
- 四十二、滄海深しと申せども、權權ごんごんの立たぬ海もなし。山さいふ山に、露つゆのぐらぬ山もなし。谷間やまといふ谷間に、ちりく草の生へぬはなし。駒に踏まれし道芝も、露つゆに一夜の宿は貸す。風に採るゝ笹竹も、小鳥に一夜の宿は貸す。
- 四十三、笠は甲に似せて穴を掘る。
- 四十四、兩刃の劍にて人を切るに、振上げさまに我先づ切らるゝ。
- 四十五、念力岩ねんりくを通す。
- 四十六、こまばかりに日が照るか、世界に主には事缺かぬ。
- 四十七、主と病には勝たれぬ。
- 四十八、窪くぼい所に水溜る。
- 四十九、命をかける秤はかりはない。
- 五十、親の打つ拳より他人の撫るが痛い。
- 五十一、本来出づべき家もなければ、山さで入るべき山もなし。
- 五十二、世間に多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない。



五十三、此世の名残、夜も名残。死しに行く身を譬ふれば、他たしが原の道の霜、一足づゝに消て行く。夢の夢、こそ哀れなれ。あれ敷ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響の聞をさめ、寂滅爲樂と響くなり。

五十四、今捨る身にも恐ろし犬の聲。

五十五、一分は寸の初り。

五十六、男は世間が大事。

五十七、親の始は皆人の子。

五十八、草木心なしと申せども、花實時を違へず。

此類今一々數ふるに暇あらず。

## (二) 彼の戯曲より學び得べき歴史

彼が戯曲は戯曲として之を見れば勿論單に戯曲なれども、史的眼孔を以て之を見れば寔に活ける歴史なりき。寔に元祿日本の國民史なりき。

嚴格なる意義を以て之を論ずれば、彼が戯曲に於ける歴史の中心は固より京坂なりし也。然れども其版圖は則ち總ての日本に及びたりき。嚴格なる意義を以て之を論ずれば、彼が

戯曲に於ける歴史の中心は固より元祿時代なりし也。然れども其版圖は則ち日本近世史の多くの部分に及びたりき。

看よ、彼が史戯曲は明に元祿日本の理想史なるを看よ。元祿日本の理想したる武士は彼が歌ひたる和藤内以下なるにあらずや。元祿日本の理想したる大將は源頼光源頼朝高富久吉武田信玄上杉謙信以下なるにあらずや。元祿日本の理想したる忠臣は笑田二郎母子以下なるにあらずや。元祿日本の理想したる女丈夫は山本勘介が母以下なるにあらずや。元祿日本の理想したる美術家は吃の又平等にあらずや。而して此くの如きは皆に元祿日本の理想したる所なるのみならず亦近世日本の理想したる所たる也。

又看よ、彼が社會戯曲は明に元祿日本の社會史なるを看よ。元祿日本の國民は大坂國民を中心として彼が社會戯曲中に生動しつゝあるにあらずや。元祿日本の理想は彼が社會戯曲中に横流しつゝあるにあらずや。元祿日本の生活は彼が社會戯曲中に活現しつゝあるにあらずや。元祿日本の風俗は彼が社會戯曲中に詳に歌はれつゝあるにあらずや。元祿日本の習慣は彼が社會戯曲中に明に叙せられつゝあるにあらずや。元祿日本の好尚は彼が社會戯



曲中に列擧せられつゝあるにあらざるや。元祿日本の宗教は彼が社會戯曲中に真相を呈露しつゝあるにあらざるや。而して此くの如きは實に元祿日本の社會相たるのみならず亦近世日本<sup>の</sup>社會相たる也。

### (三) 彼の戯曲より學ひ得へき文學

彼の戯曲より如何に多くの文學を學び得べき乎に至ては、願くはこゝに吾人をして之を説くことの煩を避けしめよ。何となれば彼が文學の價値は則ち彼が文學の學び得へき價値を宣告するものにして、彼が文學の價値はこゝに之を説くまでもなければ也。

唯記すべし、彼が文學は其想に於ても其跡に於ても其文章に於ても其品位に於ても其縦横に於ても其總てに於ても、優に「近松文學」として一種の旗幟を樹るに足るものなることを。而して之が文法の如き、亦「近松文法」として優に一種の文法を存するに足るものなることを。

人生如大夢



## 第二 波の夷戯曲

### (一) 「雪女五枚羽子板」解剖

解題 「雪女五枚羽子板」は從來彼が三傑作の一と稱したるもの。彼年五十三

の時之を作り、詩思昂盈、結構文章の縦横を以て勝れり。光景宛轉、筆勢飛舞し、花の吹雪に路去りあへぬ趣あり。

赤松滿祐將軍足利義教を弑したる事跡を翻案し、撥亂反正を趣向とし、以て藤内兄弟五人を寫せり。

寶永二年七月十四日大坂道頓堀竹本座に於て、竹本筑後少掾初めて之を塲に上す。

登場者 の重なるものは、



藤内太郎家治、同二郎盛治、同三郎武治、同四郎光治、同五郎忠治兄弟五人 太郎未嫁の妻中川  
 二郎妻小ざらし 五郎妻おたまり 斯波左衛門尉義將 細川右馬丞勝秀 源義教 赤沼入道幸滿  
 同新判官則久 熊橋犬二郎景滿 古川權頭清氏夫婦、姫琵琶姫 古川總領藤冠者氏連 畠山小將監  
 高明 山名伊織介氏廣等

藤内兄弟は一種の郎等たるべき理想武士を寫したるもの也。武士は其本領として武力を有せざるべからざるは勿論、更に武事以外に於て一能一藝の所長を有するを要すとは、是れ元祿武士一派の希望にして、彼等は實に其人なりき。

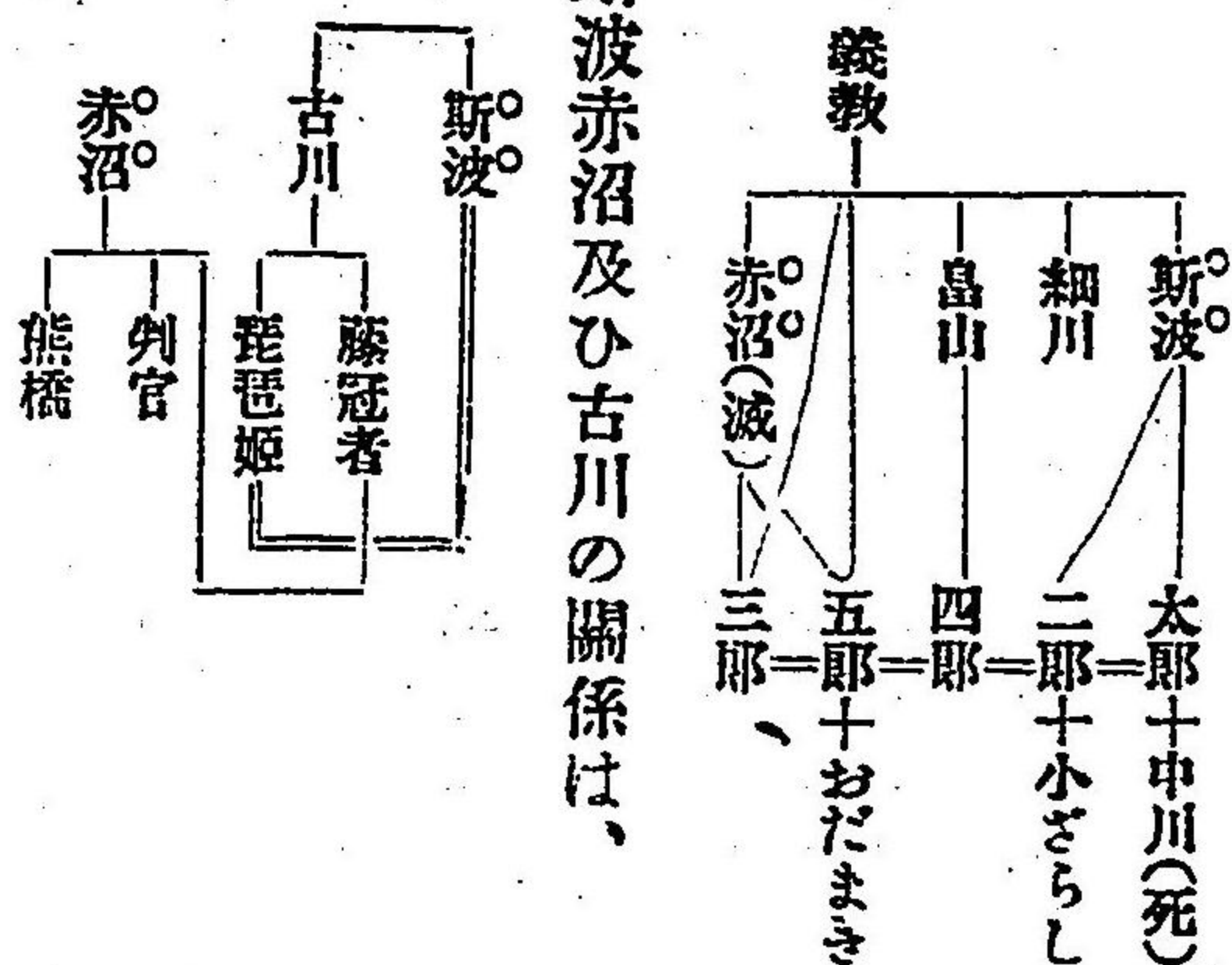
彼等は何れも相應の武力あり。而して太郎は笛、二郎は大鼓、三郎は小鼓、四郎は大鼓、五郎は棒を使へり。彼等は遂に身を立てたり。

内三郎は其客氣短慮を以て一旦惡に與みしたれども兄に救はれ、五郎亦其家庭に於ける境遇及び年少者としての過失より成す所ある能はざらんと欲したりしも、大決心の刹那に同じく意外の事より救はるゝを得たり。

斯波左衛門尉義將は年壯に氣鋭き執政諸侯として理想せられたるもの。赤沼入道は則ち奸惡佞邪の臣。

要するに彼が史戯曲の人物は、時に個人として、活きたる人として畫かれたるものなきにあらざり、多くは是れ單純且つ嚴密ならずして理想的人物と見らるるものなり。

戯曲中に於ける人物相互の關係を擧ぐれば、



斯波赤沼及び古川の關係は、



結構、主意 赤沼逆を謀り、斯波亂を討する間に處し、藤内五兄弟が身を立  
るに至りたる所以を寫し、以て武士一種の生活を畫きしもの。正義は最後の戦  
勝者たるのみならず、藝は身を助くるものたり。

彼が史戯曲は多く五所作より成れども、此曲は三所作より成れり。其結構左の  
如し。

第一光景 藤内太郎笛を切りたる。

第一所作 第二光景 赤沼、義教を愚にす。  
赤沼、中川を殺す。  
斯波苦諫。

第三光景 斯波と細川。

第一光景 藤内三郎と藤内二郎。

第二光景 藤内二郎妻小ざらし身を賣る。  
二郎妻の金もて縛を免る。

第二所作 第三光景 小ざらし男装、斯波と稱す。

第四光景

藤冠者赤沼判官森計。  
斯波(實は小ざらし)男家に到る。琵琶姫奪ひ置きたる將軍の印を與へんす。  
藤内二郎斯波(即ち妻)を見る。  
藤冠者等斯波を殺さん欲し、却て藤内夫妻の爲に皆捕はる。

第三所作 第一光景 義教道行、藤内四郎赤沼の旗熊橋を捕ふ。  
第二光景 斯波等赤沼を攻む。藤内五郎藤内三郎功を立て罪を償ふ。赤沼遂に滅ぼさる。

一、全動作の配置 第一所作は藤内太郎夫妻の功を立てることを叙し、第二所  
作は藤内二郎夫妻の功を立てることを叙し、第三所作に至りて藤内三郎四郎五郎  
の功を立てて身を顯はすに至りたることを叙したるもの。而して之か事實の連絡  
を保つべく赤沼逆謀斯波蓋忠の事を以てして、之に系けたり。

第二所作の権門に於ける豪華悲慘誇々の光景より、第二所作の嬉戯冤罪零落異  
装姦計の破壊等となり、遂に第三所作の將軍を落魄より叛臣討平にまで救ふに  
至る。此戯曲は寧ろ立意の奇創局面の轉換等を以て喝采せられたるもの、如し。  
小ざらしの男装、四郎の撥、五郎の棒、若くは五兄弟が陣前に於ける奏樂の如  
き、特に其所謂場當りなる趣向を弄したるを見るべき也。

二、部分動作の配置 第一所作に於ては、第一光景曉の出仕より緩歌漫舞の  
高會となり、無情の雪は美人を埋め、忠臣の誇々もなす所なく、追騎却て相親



みて去る。其轉換配合亦見るべきにあらずや。

第二所作に於ては、第一光景の無邪氣なる嬉戯より盜賊の冤罪となり、第二光景の浪人住居の凋零となり、第三光景の意外なる男裝となり、第四光景の男裝婦人の婚儀となり、不思議なる良人との會合となり、壯快なる姦計の破壊となる。其轉換配合亦見るべきにあらずや。

第三所作に於ては、第一光景義教の落魄より、第二光景亂臣討滅に至る。其轉換配合亦見るべきにあらずや。

三、動作の統一 彼が史戯曲は多く事を寫して人を寫さざる者なるを以て、

此曲の如き亦其全曲を連ぬる大脈絡は、主人公其人たる五人の性情行爲にあらずして、却て個々なる五人は斯彼等の撥難反正運動に由て其關係を綴續せらる。故五人は運動の主にあらず、運動を利用して始めてなす所あるを得たるもの也。若し夫れ五兄弟に關する行爲の系統に至ては、

一、藤内太郎は一色大炊介實は藤内五郎の爲に笛を切られ、これに由て却て赤沼父子が主人斯波左衛

門を陥れんとするを知り、遂に赤沼が左衛門と争ふの座に於て、これを擧げて面責し、以て其主を辯護せり。

妻中川は赤沼の爲に欺かれて將軍の刀を盗み、遂に凍死せられ、怨魂赤沼が逆謀を夫及び斯波に告げ、後赤沼を捕へ來れり。

二、藤内二郎は三郎が爲に盜たるの冤罪を蒙り、妻は身を賣るに至り、却て三郎及び赤沼の黨藤冠者赤沼判官を捕へ、將軍の印判を奪返し、且つ左衛門琵琶姫が婚をなすの機會を與へり。

妻小さらしは夫の爲に身を賣り、却て便宜を得て夫の行爲を成功せしめり。

三、藤内三郎は左衛門に奪へんを欲して許されず怒り赤沼に仕へ、仕官の爲に刀を盗み、因て二郎を冤に泣かしめり。而して遂に二郎の捕ふる所となりて悔悟し、功を立つ。

四、藤内四郎は島山に仕へ、將軍義教の爲に赤沼の黨藤橋を生捕る。

五、藤内五郎は義教に事へ、腰元を不義ありて走り、太郎の笛を切りしが、後を罪を謝せんを欲して自殺を計り、意外の事より自家赤藤内兄弟の一人なるを知り、亦功を立つ。

要するに此戯曲に於ける動作の脈絡は、人に因て接續せられず、而して事に因て接續せられたること知るべき也。

四、動作及び趣味の進行 已に動作の脈絡が人に因て接續せられずして、事に因て接續せられたる如く、動作の進行も亦人に因らずして事に因れり。



即ち第一所作に於ける藤内太郎夫妻の行爲は、第二所作に於ける藤内二郎夫妻の行爲に影響を及ぼす事なきを以て、若し藤内兄弟を中心として之を論ずれば、其脚色の支離滅裂なるは言ふまでもなし。然れど撥難反正の事柄を中心として之を見れば、義教佞臣赤沼を近付けて、權を專にするを得せしめたるが爲に、斯波左衛門の苦諫して退くに至り、以て第一所作を成し、第一所作赤沼逆謀の結果として斯波左衛門及び古川の息女琵琶の姫の婚成らざるを致し、左衛門及び琵琶姫の婚成らざるより、藤内二郎の妻小さらしが左衛門に擬するに至り、以て第二所作成り、而して義教佞臣を近づけ忠臣を退けたる報酬は遂に都を出で、近畿に落魄すべき命運を招きたれども、斯波以下の反正運動機漸く熟して、第三所作の喜的收結を見るに至りたるを見るべし。隨て動作の進行が趣味の進行を伴ふて、第一所作より第二所作に昇り、遂に第三所作に下りたることも見るべし。

而して其部分動作に至ては、

第一所作は、赤沼入道權勢を專にせんが爲に、斯波主従を陥れんを欲して笛を切り、又中川をして將軍の太刀を盗ましめ、及び將軍を襲して印を奪ふことより、進みて斯波苦諫の中央高點に上り、遂に斯波細川の討逆規畫となる。而して趣味の進行亦動作の進行に伴ひたり。

第二所作は、藤内二郎の冤罪より女房小さらしの身を賣るに進み、小さらしの身を賣るより其男装に進み、其男装より古川館に於ける最高動作にまで進めり。而して其趣味の進行も亦動作の進行に伴ひたり。

第三所作は、義教道行より轉じて斯波以下吉野城攻撃に進み、遂に陳前奏樂の中央點に達し、赤沼討滅を以て事畢れり。而して趣味の進行亦動作の進行に伴ひたり。

是に由て之を觀れば、此戯曲に於ける全體の美は其實部分の美の爲に少なからず壓する所となりたるの恐れなからざる也。各所作に於ける中央趣味は見出し易けれども、全曲に於ける中央趣味は却て見出し易からざるにあらずや。又此戯曲に於ける全體動作は其實部分動作の爲に少なからず壓する所となりたるの恐れなからざる也。各所作に於ける中央動作は見出し易けれども、全曲に於ける中央動作は却て見出し易からざるにあらずや。

##### 五、時間の配置

は、



第一所作 第一光景 永享八年正月三日  
 第二所作 第二光景 同四日夜  
 第三所作 第三光景 同五日夜  
 第四所作 第四光景 同十一日  
 第五所作 第五光景 同十一日  
 第六所作 第六光景 同十一日  
 第七所作 第七光景 同十一日  
 第八所作 第八光景 同十一日  
 第九所作 第九光景 同十一日  
 第十所作 第十光景 同十一日

六、場所の配置

第一所作 第一光景 虎の門外  
 第二所作 第二光景 赤沼館  
 第三所作 第三光景 山崎せきぎの院  
 第四所作 第四光景 京都木阿彌居宅  
 第五所作 第五光景 宇治の里  
 第六所作 第六光景 古川館  
 第七所作 第七光景 吉野山城外

其梗概

第一所作

登場者 斯波左衛門義將 赤沼入道幸滿 將軍義教 奥女中川 熊橋犬二郎満景

左衛門近習藤内太郎家治 赤沼新判官即久 細川右馬丞勝秀 一色大炊介久常 おだまき其他

時 日 永享八年正月三日(第一光景) 同 四日夜(第二光景) 同 五日(第三光景) 同 五日(第三光景)

注意 赤沼入道父子逆謀、斯波左衛門忠慮を運らし苦諫すれども用ひられず。斯波の郎等藤内太郎斯波を佐く。藤内未嫁の妻中川は入道の爲に罾中に凍死せらる。

第一光景 虎の門外

主君斯波左衛門義將は、當家の管領たるに由て、藤内太郎が文武の器量將軍義教公の上聞に達し、御直の諸武士同前に、年頭五節の御目見へ、ことさら笛の達人にて、小水龍といふ名管を上より預け下さる。

そも此笛は、天曆の帝の御寶物、國に怪異ある時は、吹かぬにをのれと音を出す神妙あり。御先祖尊氏將軍より、代々に傳ふる笛の音の、ひいや兵亂治りて、實祚百王のかためたり。時は永享八年正月三日。將軍家御松囃子北山の御所にてあるべしと、藤内太郎は笛の役。御預の小水龍餘寒の風に吹きそらし、また夜も深き五更の一點、虎の御門に着にけり。太郎挾箱に腰打掛け、御松囃子は辰の刻どの御觸なれば、役人伺候の諸大名夜の中より群



参あるべきに、御所の内ひつそとして御門も未だ開かれず。不思議さや退屈さ。『奴に持たせし煙管筒一服ついでくゆらする。めざまし草は初鳥の入聲も鐘もかすみ行く、門のひはだを踏越る霜のふり袖すみ前髪、取かはす手もわな／＼と、女が帯の若紫茶宇の袴の忍ぶすり、亂れあひにし密通の欠落とこそ知られけり。』

『尤めて無益、見ぬ顔せん』と、下人等にもさ／＼やきて、築地のかげに忍ぶとは、見ずや知らずや門松を傳ひ下り來くる人も木も連理の女松男松かや。

太郎愈身を隠すを、かの若者きつと見て、打物ぬいて弓手より聲もかけずに打掛くる、刀の柄にて拳をうち太刀ふりおとさせ、二の拍子にて胸骨あて踏みつくれば、女は又右の方より打掛くる。拳を打たんと持つたる笛振上ぐるをつけ入て、笛を二つに切折つたり。すはしれ者と取て引寄せ、二人をどうとひつして、

ヤアこび過たる奴等哉。斯波左衛門が家來藤内太郎家治ぞ知つらん。ものれ等不義の欠落、見通にする所に、却つて手向ひ、剩へ御預の笛を切り、言語同断の始末、白狀せばゆるすべし。偽らば繩を掛け、四職衆の白洲に引据へ、一家一門の耻を見るか。サア

分別次第。

と申しける。

若者臆せず、

ヲ、藤内太郎よく知つたり。我は一色が末子大炊の介久常といふ奥小姓。此女は御臺所におだまきといふ御腰元。あこきか浦のぬけ舟も、度重りし通路の、赤沼入道幸満に見付られ、御成敗たるべきを。直に入道がはからひにて隠密に命を助け、御所を夜援にせさせ。此恩賞には御門前に藤内太郎相詰たり、御預りの笛を二つに切折て得させよといふ。心得ずとは思ひながら、一旦の恩を請けいなどいふを卑怯と思ひ、扱こそ笛を切折つたれば入道が恩は報じたり。扱是からはそちへの咄、入道が根心上へ對して其意を得ず。御分が主人左衛門にも言聞せ必ず油断あるべからず。某身にも望あり。正八幡ぞ偽なし。なんと落してくれまいか。

ヲ、一色大炊の介殿承り及ふだ。お身柄と申し御誓文虚言はあるまい。去ながら明朝は御松囃子の御觸なるに、はや東雲に及べども、其沙汰なきは様子あらん。御前向を有躰



に承らん。

おだまき聞て、

「扱は御存じ候はぬか、昨夜俄にへんかはり、松囃子は明日の晩、赤沼の方へお成にて、節分のお年取御遊覧との御事にて、皆々お觸が廻りしに、たどへお觸がないとても御前の事を知らぬとは、エイよい加減の事ばかり。朋輩の中川殿とこな様の挨拶が大抵なみの事かいの。奥の事はつゝぬけ、飛脚よりまじやもの。知らぬとは小面憎うぶちたい。と笑ひける。

ア、音高し〜。扱は赤沼めが此笛をあやまたせ、我々主従越度にせんとて、御祝儀までを延引せし一大事を承る御厚恩には、御身の上奈落までも隠密ぞや。はや夜も明る落給へ。

藤内太郎を寫し、并せて藤内五郎(即ち一色大炊介)の前記に及ぶ。

第二光景 赤沼館

御大將義教公赤沼が館に入御あつて、追儼の御祝儀行ける。

年男には熊橋犬二郎満景、御年玉を献ずれば、赤沼前司入道幸満子息新判官則久、御前に畏り、

冥加に餘る御成、一家の面目此上や候べき。然れば毎年御所にての御祝儀は、斯波畠山細川などと始め、馬鹿愚懃の堅侍卷舌の諸禮、折目正しき正月詞、さぞ御究屈と存じ、某が御馳走には、御供の諸大名残らず退出致させ、古流な事をさらりと止め、奥方の女中の中の通り者、其外浴中の娘子供の色よきがござんす詞の酒のこなし、上覽に入れん爲め召寄せ置て候。

と兼て仕度の色揃へ、御腰元の其内には心いきも風俗もこれ當流のまん中川、酒になりての名人さ飲まずに人をあさよの君。琴三味線のばち音は誰も袖にすがとかや。扱又町には、姉が小路の針屋のぬひ。こう屋のお染。おしろい屋のつや。絲屋のふさ。舞子踊子小歌のふし、上手に座敷を持ちければ、なを御機嫌はよしのり公、烏帽子の紐も直垂も打解け給ふ膝枕、脚さすられつ御腰をうつゝともなき酒宴なり。

入道時分よしと思ひ、「扱節分の夜厄拂ひと申て民間には行はれ、上つ方には御存じなし。御



身の大事とあるものを捨るといふて、某に預けられ、厄拂ひの詞を演へてまじなへば、悪病邪氣を除くと申す。とくく行ひ奉らん。』とぞ申しける。

義教公誠と信じ、

幸是に先祖よりの印判、軍兵を集め、關所廻船、日本を治むるも此判一つ。是をしばらく預くる。

と、錦の袋に入れながら、

サア捨た。

『ち厄は我等拾ひのけ、四魔三障崇りはなし。是女子共、都の町の厄拂ひ物は咒ひ出るまゝに、拂ひ申せ。』といひければ、『あつ』と答へて、口口に厄拂をぞまねびける。

やあら目出たや。こなたの御壽命申さば、鶴は千年。龜は萬年。浦島太郎が八千歳。東方朔が九千歳。西王母がもゝのさね。さるまめこまめ。親もまめどり雛鳥の羽がひ重ねに、寶はあつまる。家は治まる。持丸長者の、四方に四萬の藏の巨前の明行く年から、福神達の御えうがう。一に市姫辨財天女。二は西の宮若姪子殿。三は三面大黒頭巾の、ひだ

のかずく十二ヶ月は無病息災。其身は金槌うち出の小槌。うつて打出す金銭銀錢。福徳圓滿悪魔外道打拂ふて西の海へさらりくさつくこきやかう。まづ斯う祝ひ納むるは是上方の厄拂ひ。扱又東の果にては斯こそ厄を拂ひけれ。ち厄拂く厄つづばらひ申べい。がいに目出たいこなたの御壽命、語るべいなら、鶴と龜めが何うちくらつてすつ百萬年。のめりくと死ばりはづれにわやかりなされ。父ら母らにちいば息災。めなご小せがれ産のまゝなるがき十二匹。錢かね俵や小袖の中から、目玉むき出し、耳たぶでつかく、五百八十七まがり悪魔外道ぶつばらつて西の海へぶんなげる。こつきやつとうといはふとかや。爰に名に立つ色廓、揚屋女郎の厄拂ひ、まためづらかに斯もなん。あらく目出たや。みなさんの御壽命申さば苦界十年。はいがとまつて鶴は千年。龜は萬年。浦島太郎が重箱さかな。紋日くは一歳に、數の子も御盛や。いや大ぶくの茶はひかず。揚屋にいりこくしあはびたいと、あひきやく、やど屋あるせの附届け、そこく宿のなさげごと、身上りぶんのあどもりも、東方朔か九千兩、それで残らずむめほうし。あどへつられた大黒天も、よい客ふまへた俵子や、みかんかうじだいじん。子の日



の松やねびきのよねん。三年さきのかみばなから花すてた。ふるがけ今年はくるくくるわの全盛。炬燵に火をせいとこせば酌せい。酒はこぼすとしきせはいとはじ。禿がぶんせにこまはふるさに、寶引、かるたをうつらわうじが八千歳。女郎に口説の痛もさがり、遣手はきはの血の道なく、揚屋くゝの賑ひは二階、中の間、奥座敷、五きやく、六きやく、しつきやくいれず。扱こそふしんはるの日のながふいらぬは見せかけ大盡、わるごう末社のちよつとかざりにくひ物すひ物。こいといふ人おやじの意見は手代の始末。ひとつ買ふては三度かる客、これが廓での悪魔外道。うち拂らふて西の海へざらりくゝ、こきやこう。

どこそ拂ひけれ。

大將猶々御盃の数もぬぶりもかたぶきて、伺候の女に誘はれ、寢殿ふかく入給ふ。

入道父子見送り、

サア熊橋してやつた。いかに厄を拂ふとて天下を治むる此印判、人手に渡すうつそり、滅亡に思案はいらず。むづかしいは斯波細川。此判をもつて義教の下知と偽り、鎌倉勢

を催し、一戦に討取るべし。此年越からまんがなをつた。是熊橋。來年はめつきりと好い年取らせふ、精出せ。

うなづき悦ぶ折節御腰元の中川つかくゝと走り出で、

是赤沼殿。只今の印判はお厄落しの呪ひに、少しの間御預りかと思ひしに、もどさずそこに留置て何とやらひそくゝと、わしはどふとも吞込れず。女子なれども御盃様よりお付けなされた中川。サア其御判を戻そうか戻さぬか、戻しやらねば思案がある。

と男勝りの氣色なり。

入道動せぬ顔付にて、

チ、よい所へ來召された。是にこそ仔細あれ。斯波左衛門義將諫言申すかち氣に入らず、竊に諸國の軍兵を聚め、左衛門亡ぼす御催し。それを聞て笑止さに、御判をさへ取つたれば軍兵一騎寄せることも叶はぬ故やうく慊し取つたる御判。聞けばそなたは斯波が家來藤内太郎家治と夫婦の契約してゐるげな。是に付ての大事がある。藤内太郎はお預りの笛を折る。それを越度の仰にて、今宵これへ召寄せてお手討になさるゝ筈。今宵さ



へ過しなば明日は某御訴認申し、藤内は助くべし。とふそち側の刃物共盗むことはなるまいか。いかにしても笑止な。

と誠しやかにいひければ、流石女の一筋に、

ア、忝き御知らせ。夫の命助くると申し、斯波殿とても夫の主人よしなき疑ひ耻しや。此上にはことない九献にて御躰の最中そつと御太刀を取りませう。

チ、それ、目の覺めぬ先片時も早ふ太刀奪取り、高遣戸の小庭から椿島の妻戸を明け、鞠場の口に待たれよ。土戸の錠を明けさせん。それを合詞にそつとぬけ、左衛門方へ落ちられよ。吞込んだか、仕損ずまいぞよ。

ア、身にかゝつた事じやものそこに氣遣ひなさるゝな。

と奥をさして入りける。

そりや又きやつも喰せたは。屋敷の内をうろかせ、曉方に引捕へ、斯波左衛門逆心にて、家來藤内か密通の女に御太刀を盗ませしと證據を出す上からは、よい仕合で切腹道具。今宵はどふした夢かな見る、こちらは誠の寶舟、一さきがむいたのめきは。

と勇み頭を振る雪空の、春凄じく更にけり。

\* \* \* \* \*

時分はよしと中川、義教公の枕の太刀奪ひ取て出でけるが、

思へば品こそかはつたれ、慾心ならで此太刀も主のめぬきの盗物。生る死るのせつはぞ。と、心も臆れ手も悸ひ、持たる太刀の柄轂や罫に逐はるゝ心地して、檜の木書院に出にけり。

遣戸をそろりと明けければ、吹雪とあとの恐ろしさ。すくむ心の駒下駄に怪めらるゝな。

『ま、ま、よ』と、素足の雪に飛下るれば、劔を踏むが如くなり。

赤沼つけ來り遣戸に錠をちろせども、中川それとはしら雪を打拂ひ、土戸を押せども開かねば、『扱はまた早かりつ』と、しばし待間のかきくれて、こぼすが如く降る雪の、庭も埋れて白妙に立寄る軒も横吹雪、袖打拂ふ蔭もなし。佐野のわたりもさのみやは、嵐は五躰を劈けり。

袂は舞ひて防げども、襟にたまりし雪解けて、肌は水に浸さるゝ。足は膝まで埋るゝ。



髪のつららは白銀の瑤瑤かけし如く也。

ア、寒むや、苦しや。

と顛ひ上りて齒も合はず。

通路ならで是も亦男の爲じや、戀じやもの、こゝを一つ廻らう。

と身を抱しむれば呼吸切る。雪にて口を濕せば、身の内までもしみてほり、寒苦島の苦みや、立返つて湯一つと、腰まで埋む大雪を押し分け踏分け遣戸にすがり、押せとも引けとも明かばこそ、『南無三寶。誰か錠を下ろせし』と、立歸れども、時の間に分來し跡を降り埋み、波路を凌ぐ其風情。

土戸は猶も明らばこそ。次第く降り重り、身もうつもるゝ其苦しき。

扱はたばかられたか口惜しや。病に臥し刃に伏し火水に死するはあるならひ。殺しやうもあるべきに、雪に凍やし殺さんとは。ちのれ入道め、むざくとは死ぬまら。

ど、むもるゝ雪を這ひ出れば、ふみしづみ、這ひ上り、ふみちとし、嵐は咽に吹きせまり、呼はる聲も立たばこそ。手足も凍え身も冷えわたり、『寒むや冷めたや苦しやなふ藤内殿

く我夫なふま一度逢て死にたいぞ。』と、雪に喰付く涙のこぼり、眼も口も閉られて、あまざる雪はほうく、寒風頻に颯々々々、五臟六腑をさす如く、いきのたもちもなればこそ。二十の春の花待ちあへぬ、雪に先立ち消けるは、あへなき最後や。

東南に雲起つて、西北に風静かならず。夕闇の空もとろく雪も夜の、あら物凄の景色やな。

斯波の左衛門義將は、『今宵しも小水龍の己れと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はし』と、人馬も具せず、藤内一人提灯ともさせ、雪踏分て赤沼が門の此方に着きけるが、俄に持たせし提灯の吹消す様に消てけり。

堀の内よりうづまいて提灯にうつるとひとしく女の姿、白衣白髪白妙の雪女ともいひつし。

左衛門主従太刀の柄に手を掛くれば、

なふ見忘れ給ふか藤内殿。互に忍びて落合の漏らさぬ水は御身と我、思ひ二つの中川が



幽靈是迄來りたり。口惜しや赤沼親子逆心にて君の御判を奪ひ取り、みづからには御太刀を奪はせ、左衛門様我夫にも其科おぼせて失はんとくみと知らず盗み出る道の後先錠おろし、今宵の雪に埋れてこゝやかし殺されし。此世から八寒の苦患は我身一つにて、いと可愛の我夫主従の御命助けたや救ひたやと思ふ一念こほりつき、只今知らせ申ぞとよ。此御太刀を義教公へ差上げ、御身の言譯立て給へ。名殘惜の我夫や。此世の縁の薄雪も長き契りは厚氷結び添へ、生々世々によもとけじ。さらばく。

と泣く涙のみぞれと消て失にけり。

藤内涙を押拭ひ、

己れ入道め。妻の敵、國家の仇、首引ぬいてくれんず。

と躍入るを、

やれまて、是は一應ならず、申ても天下の大事。大將の御座といひ、御直衆に慮外せしといはれては理非立たず。是にひかへて伺ふべし。罷出ば勘當ぞ。

と宥め給へば、藤内太郎あつとしつめて控へたり。

其身は衣紋引繕ひ、御太刀持て静々と廣間に立て、

お小姓衆く。斯波左衛門義將御機嫌伺ひ申す。

と高々にのたまへば、『すは左衛門よ、討取れ。』と赤沼親子犬二郎心得たりと出けるが、遺五常の徳備はり、威有て猛からぬ忠臣の威光に氣を吞まれ、

ヤア斯波殿。奇特の御出。

と手をもんでこそ居たりけれ。

大將斯波と聞給ひ、寝ほれ髪に烏帽子引かけ出給ふ。

左衛門につこと笑ひ、

義將は今宵珍らしき夢を見、御物語の爲め伺公仕る。いやはや夢はおかしい物。是赤沼殿お氣にばし掛けられな。貴殿逆心の企にて、尊氏公より御相傳の御印判を慊し取り、御腰元中川をだまし、御太刀を奪はせ罪を某におぼせて、此左衛門に切腹させんず謀、とまさくと見たる夢、覺むるとひとしく枕元に此御太刀のありたるは、何と正夢とは覺ほさぬか。夢なればこそお仕合、若し誠にてあるならば、赤沼殿でも青沼殿でも御前



にて只中を親子つなぎに突き貫くか、又一戦に及ぶとも和主ごときの相手に騎馬を向け  
るまでもなし、左衛門が足輕十騎計差向けば、朝がけに生捕て、洛中を引渡し、なんで  
も柱一本の主にしてくれんもの。去ながら春の夢は合はぬもの、必ずお氣に掛けられな  
どかんらからとぞ笑はるゝ。

赤沼もいひこめられじと、

いや是れ義將。和殿が今のいひ分は其身の誤り人はいはせぬ前置に、かさから出る詞な  
りと此入道は聞申た。ヲ、思ひ付たり、お預りの小水龍の笛を打折り、御尤を恐るゝよ  
し。其れ程の事は某が申譯をしてやらん。エ、氣の狭い。左程の事氣苦勞にめさるゝな  
左衛門殿。

藤内太郎飛び出て居高になつて、

是入道。兩刃の劔にて人を切るに、振上げさまに我先づ切らるゝといふ譬あり。先づ其  
如く、人を惡に落さんとして身の惡を囀るか。其御笛は此藤内太郎家治が預り奉り、先日  
北山の御門にて一色大炊の介を己れが頼んで切らせたを忘れたか。功あるものの心掛、

誠の小水龍は庫に納め、かげを作りて持たる故、うぬが頼んで切らせたは其影の笛なり  
しは。うつけもの。誠の小水龍といふ御笛。天曆帝勅筆の銘有て、天下の大事におのれ  
と鳴る。只今も音を出し、怪しさにはせ參ず。是を見よ。  
と差出し、

是程大事の御寶を、何として御邊は大炊の介を頼んで切折れとはいひしぞ。笛を切るが  
すきならば、己れが咽笛切折らん。

とつめかくる。義將

ヤア藤内。御前といひ、主を差置き、憚り千萬、罷りしされ推參者。赤沼入道ともあら  
ん人が笛を切折り、意恨を晴すなどいふ若輩業の有るべきか。よしそれはあるにもせよ、  
上は天下の武將なり、御譜代忠功の斯波の武衛笛一本に思切かへられんや。とは思へど  
も忠臣を厭ひ、佞臣に心をゆるし、酒宴妓樂に御目みくら、枕元の太刀取らるゝ程の大  
恩將、山鷄を鳳凰とし燕石を玉と見て、國を失ひ身を破り、名を末代に損ひ給はん。口  
惜の御所存や。



と拳を握り席を打ち涙を流して教訓ある。

大將御氣色變つて、

折こそあれ祝儀の座敷、己れ一人智恵あり氣に、愚將とは誰がことぞ。罷立つて閉門せよ。

と大きに怒て仰らる。

左衛門つゝと進出、

愚將と申は我君の事よ、愚將と申が御耳にさはる程ならば、など佞臣忠臣の詞を聞分け給はぬ。淺ましきよ、愚さよ、御祖父義詮將軍御父鹿苑院殿義滿公、御舎兄勝定院殿義持

公、御先代義量公、我君までは五代。我々は三代、管領職を承つて終に閉門の例候はず。

左程誤りある左衛門ならば、閉門までもなく御指領をもつて御手討になさるゝか。但御氣に入りの赤沼入道子息新判官此の歴々に討手を仰付られ、軍勢をもつて此左衛門をなぞ攻滅し給はぬぞや。チ、赤沼なんどの手に及ばぬは理りく。軍といふは酒宴遊興と事變り命づくのものなれば、鬨の聲矢叫びに怖れて馬より落ちて目をまはさんより、追

従いふて世を渡るが一段の思案ならん。エ、我君。莫耶を鈍とし、鉛刀を鋭しといひ、周の鼎を捨て、ひやうたんを寶とするといひしは御身の上と御存じなきか。麒麟も繫がれて動かねば犬猫に同じ。渴して温泉の水を飲まずとは義者の耻る所。章甫の冠を香にはかれんより、首陽山の蕨餅をぬり汨羅に沈んで江魚の腹中に葬られんには如かじ。某都を開きなば、赤松細川畠山結城長沼仁木石堂大内今川山名京極宇都宮凡そ名ある諸大名頼もしげなき世を憤り、面々分國に引籠らば、民百姓は貢物を私し、地頭郡司に收斂有て、國を恵む糧つきん。時には四海野心を含み、四夷八蠻一度に起つて攻來らんは必定。其時には御寵愛の佞臣奸人、味方を棄て敵に降り、君一人敵の擒となり給ひ、元祖尊氏公の御軍功も一度に朽ち、御父義滿公の七寶八貨に金銀をちりばめ造りたまひし北山の金閣、室町殿の花の殿、三條の紅葉の殿、野原となつて鳥松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に隠れ住んで、こだま山彦ならで誰か昔を問ふ人の候ふべき。其時には此斯波が詞を思召出され、天に望み、地につまだて、臍を噛で悔み給はんこと掌を指す如し。三度諫めて用ひずんば身をほうじて去るといへり。左衛門が一生の諫言も是迄也。仲尼はかし水を



受けて衛の國を去り給ふ。某も其如く宿所へも歸らず、直に他國仕る。お暇と申すと罷立つ。

赤沼判官つゝ立て、

コリヤ左衛門。主君に暇出す推參者餘さじ。

と飛でかゝる。藤内太郎かけへだり、

ヤア己れ如きの鍔刀が主人の身に立つべきか。ま一度身もだへするならば、御前とはいはせぬ。

とはつたと睨めば、義教公『やれ待て赤沼、討手をもつて左衛門が首を取る。静まれ〜』と御説ある。

左衛門少とも慮せず、『討手とは有り難し。速に腹切て穢首を差上ぐべし。去ながら討手の人には誰ならん。其相手によつて戦の勝負を決し、討手の首を此方へ拜領いたし候べし。慮外と思召れぬ爲め御断り申置く。藤内太郎供せい。』と、御前を立て悠々と顧みもせず、立退きしは、臣下の手本弓取の鑑とこそは見へにけれ。

赤沼の逆謀、斯波の忠慮を寫し、又中川を寫す。

第三光景 山崎せきどの院

斯波の左衛門義將は腹巻に小具足かため、侍には藤内太郎家治、若黨少々放さし一騎相具して、都を隔る山崎やせきどの院にぞ着にける。

斯りし所に緋威の鐘月毛の馬に騎つたる武者、ひた兎五十騎ばかり引卒し、

ヤア〜左衛門。御暇申棄て京都を開く慮外者、討取て參るべしと、義教公の仰を蒙り、

細川右馬之丞勝秀向ふたり。引返せ。

とぞ呼はりける。

左衛門聞も敢へず、

何勝秀とや。たとへ千萬騎が向ふとも打物のつゝかん程攻め戦はんと思ひしが、勝秀と聞くからは、速に腹切らん。首取て歸れ。

とてどうと座を組居たりける。

勝秀馬より飛で下り、



やれ待て左衛門。和殿が切腹に三ヶ條の不審あり。勝秀が武勇に恐れての切腹か是一つ。日來水魚の朋輩の討手に向ふ恨の腹か是一つ。まつた浮世を軽く見て身を見限つて切る腹か。三つに一つをいふて死ぬ。

とぞ申しける。

左衛門打笑み、

ホ、ウ退が勝秀程有けるよ。問ひにくい事をよふ問ふたり。然らばそちにも不審あり。人こそ多きに御邊が打手は、此の義將が諫言を辭言と思ふか一つ。但し某程の弓取の首取て高名せんと思ふか二つ。まつた佞心赤沼と一味の心か三つの内。明さば我も明かそふず。勝秀如何に。

と有りければ、

オ、尤の疑ひ。某か心はな、管領の其中にも御邊と我は断金の契りあるに、我にも知らせず都を開く心とし氣遣はしく、死すとも活くとも朋友のまじはりを違へど、山名を討手とありけるを、請受て某が向ふたる討手なれば、むさど腹は切らせぬぞ。サア御邊

の心底承らん。

とありければ、

ム、聞へたりとぞあらん。此左衛門も其通り、勝秀はちろか樊噲が討手なりとて恐ろしとも思はず。諫言申も君の御爲め。死せる孔明生る仲達を走らしむとあり。死しても忠は忘れまじ。一旦都を立去り、御邊とも内通し、悪人を退け、我君を名將と仰がんと思ひし所に、案に違ひ御分討手とあるからは、浮世の望みも切れ果て、扱生害に及ぶなり。弓矢とる身の討手を蒙り、手を空しうは歸られまじ。介錯せよ勝秀。

と自害せんとする所を、

さて〜左衛門。げに満足せり〜。日頃語る朋輩のかほどに心の合ふものか、爰は死する所でないし。筑紫瀧へも身を忍べ。我も本國に引籠り、世上の安否を内通し、佞臣の榮枯をうかひひ、義兵を起し討て出で、悪人を攻滅し、聖賢にまさる名將となさんと思はずや。

と理を盡し諫むれば、左衛門横手を打て、



ハア、そうじや過つた。君の御爲め大事の命、爰は死ぬる所でなし。一先づ落ん。御身も退くか。中々の事。

やれ勝秀。斯程に揃ひし忠臣に君君たれば唐土も靡け随へ治めん物を無念にないか勝秀。口惜しいは左衛門。

と互に鎧の袖と袖、取附きすがり泣居たる忠義の涙ぞ哀れなる。

ヤア時刻移して益もなし。朋輩の縁盡きず、また逢ふことは命次第。

と泣々左右に別れしが、又立歸つて、

是々、思へば明けて未だ對面せず、これ當年の逢初め。

さればく其通り。先新春の御吉慶。

こなたも。

そなたも。

互に目出度い御越年。此春よりの御悦び十分の御仕合、珍重く。ち盃は永日く。

然らば春永。

末永月永日永、年も壽命も永々と傳はる御代の時に逢ふ、春の門出を祝ひける。

斯波左衛門を寫し、傍細川勝秀に及ぶ。

第二所作

登場者 藤内三郎盛治 藤内三郎武治  
古川頼盛の姫 古川頼清氏夫婦  
赤沼判官即久 本阿彌頼冠者氏連  
肝煎老婆其外

時 正月十一日(第一光景)  
同夜(第二光景)  
前光景の翌日(第三光景)  
前光景の翌日(第四光景)

主意 藤内三郎夫妻の苦節、遂に斯波左衛門の許婚の妻を救ひ、藤冠者赤沼判官等の悪計を破る。

第一光景 本阿彌居宅

藤内三郎武治奥を見入て、是兄じや人。本阿彌右衛門太郎清祐が居宅。此身代は浦山しからず、此内に澤山お銘の



物の大小を持つならば、よい主を取つて立身をいたすもの。何をいふても此竹光。いつか此の無念さを。春といふは名計り心は未だ師走じや。

と小頸を投げて悔みける。二郎盛治聞もあらず、

浪人の鼓太鼓(二郎太鼓の上手、三郎小鼓の上手)に武士の道忘れたかと思ひしに、頼もしい心掛け。然らば咄す事がある。兄の太郎家治の主君斯波殿は、近日義兵を起し、佞臣赤沼を攻滅さんとの用意と聞く。此所ぞ我等が立身の種。斯波殿のお身方に加はり、兄太郎殿諸共に軍功を勵まんと思へども、又物としては脇差一本ちぎれ具足の一兩も才覚とて叶はず。いかにはせんと思ふ所に、是女房は持つべきもの、黄金三十兩調へくれうといふ。此金子では御邊と我れ軍用意は物の見事。斯波殿の御手に屬し、藤内太郎二郎三郎と名乗り、赤沼親子の首引提げ、目覺ましき高名、御威狀を拜受し、今の泣言やめふぞや。

と語れども三郎は少ものらぬ顔色にて、

ナ、主日照はいかず、斯波に扶持を受けんとは勿躰なし。いつぞや兄太郎殿の肝煎にて

某奉公望みしに、氣に入らぬとてあり付かず。斯波に嫌はれ無念の折なし赤沼入道幸滿殿へ肝煎らんといふ人あれども、こしらへにもとでなく延引に及ぶ中、犬二郎満景より斯波の左衛門は勿論、宗徒の郎等一人にても討來らば三千石は相違なしと是儘な書中到來す。三千石では仕よい事、二人扶持や三人扶持の御合力、兄きそこらは引きませぬ。とぞ廣言す。

二郎むつとそら笑ひ、

兄なればこそ二人扶持の合力とは先過分。去ながら二人の兄が主と頼まん斯波殿の大敵赤沼に隨ふ其方に此の大切な金子與へて、敵に勢付けふとはいひ難し。天下の忠臣賢臣と叫ばるゝ斯波殿に嫌はるゝを口惜と思ひ、手を下げかせいで奉公し、斯波殿にも懸慕はれんと思ふ心はなく、末頼みなき佞臣の赤沼を主にとらんとは、道に背く無分別。追付け獄門の相伴せんずる瑞相。エ、笑止な。

と教訓ある。

氣短き三郎ぐつとせき、



春早々から獄門の相伴とは、兄者人嬉しう御座る。此三郎が相伴するか、賢臣の斯波左衛門を木のぼりさするか、今御覽せ。

といひかへす。

ム、扱は斯波殿に付く我々なれば、太郎殿も此二郎をも討つべきな。

ヲ、まさかの時は三郎も、弟とて用捨はあるまい。すれば組んで落ちる一戦に及ぶ時、

貴殿の首は某が討取り、兄甲斐には獄門の木を太ふして、外よりは五六寸も高ふ上げてやらん。

とらふ。

二郎腹をすへかね、

うぬが知行になる某が首、戰場までもなし、今でも取られば取て見よ。

と脇差に手をかくる。

イヤ三郎が取り兼ふか。

サア討て。

サア来ら。

柄に手を掛け睨み合ふ。目のさやはづしの下はいき、身は竹刀、扱兼ねてしばし挑みあひけるが、三郎飛退て、

是二郎よいか減に引もせず、我等が大小本身でなしと侮るか。組伏て赤沼殿へ引て行も合點なれど、兄弟のよしみゆるし置く。追付大小調へて真劔の勝負せん。待ておれ盛治。と、上は立派なさま口にはらをつかふて別れける。

二郎見送り、『弟と思ひあまやかす情が却てあたまがちなりけるよ。』と、呆れて立し垣越に、どりくひくひく羽子板の音は娘のあつまりや。笑ひに春の色こもる。祝義もこもる。だてこもる。情も何もかも羽根。雉子のかざ切思ひばや。思ひの我をひとふたみらふよ。十二三までまだ君知らず。十五六から濡鷲の、羽根の數々年の數、よむ聲聞けば姿までそこを思ひやり羽子に、正月めきし氣色なり。

藤内二郎も曲者にて、扱も間のよい羽子板の音、姿見たしと思ふ所へ、しまふて戻る『萬歳殿。鼓を少しかして』よつて見物せよ、面白ごととして聞かせよ。』と、戀もなり手の曲鼓。垣の







扱も小氣な。往來も見る。門の内へちと御入。  
 ど、手を取て引きければ藤内是ぞ幸と思ひ、  
 何と此家に將軍より御預りの銘の物あまたあると承る。武士たる者の冥加の爲め、いた  
 いくことはなるまいか。

皆までいはず、姫悦び、

お安いこと。將軍様の御重代天國の小鍛冶よしみつ、其外名に負ふ銘の物、今日は  
 御鏡開きにて奥の座敷に飾られたり。玄關からは人目あり。それ爐路口の錠あきや。  
 沙汰しやんな。

と夕節の人にまぎれて入にけり。  
 藤内三郎武治は兄の歸るさ待伏し、投てくれんともとの道、本阿彌の門の内、奥の爐路口  
 細目に明く。何かは知らず入て見て、しかられたら出るぶん」と、獨言して身を細爐路の  
 取つきの桁椽の、障子を明けて床の間の床に置れし一腰のよき折紙に相州物の中にとつて  
 も出來心、盗みといへば氣も後れ、前後棒とや身はふるひ、足もしとるにとつて出で、行方

知れずなりにけり。

暫くあつて家内には折紙道具失せたりと、家來は面々身ひらきに上下さはいで友吟味、出  
 入を詮索する所へ、爐路より歸る盛治を門外まで付出して、「盗人知れた」とちつ取捲く。

二郎騒がず、

是々卒爾せられな。我等は宇治の邊に居住の浪人、用事ありて出京し、女中方の誘引に  
 て御太刀頂戴致せし分。胡亂ならば女中衆へ尋ねられよ。

と断れども、

吐す程ひるがんど。旦那の留守をねらひ、女子供をたらし、手のよい盗人。うてよ。  
 縛れ。

といふ所へ、外より歸る下部の男、「たつた今三の橋にて、棒鞘の刀持て走つて下へさが  
 つた。」

『扱こそはや同類に渡したな。大小もいで擲めよ。』と、六尺仲間立掛り、「意地張らばぶち殺  
 す。』と、捨伏て大小取り、



いやはや見掛計の金拵、やき付でやけどするな。  
と雑言たらしく、脇指扱けばあら身の疵物。

ユリヤ／＼刀の身を見よ竹の筥。扱も見事な侍。冬年ならば此刀を疊たゝきに借らふもの。

と、一度にとつとぞ笑ひける。

藤内涙にせきくれて、

盗人とは無實の難。天道も晴し給ふべし。武士の刀に竹の筥、こそげても此耻をすゝぐことの有べきか。舌食切ても死にたし。

と我身をつかみ腕に嚼付き、大地を踏付けはをたゝき、絞り泣くこそ道理なれ。

『いや／＼少しき耻を忍んで大功を立てるは丈夫の勇』と思ひ定め、

是なふ心あらん人は聞てたゞ。毛頭覺なけれども、折悪ければいひ分なし。去ながら一門兄弟歴々主も持つたる者。我も望ある身なり。細か／＼つては一家の破滅。又後日に盗手顯れなば、此家内主人下人何十人あるかは知らず、犬鷄に至るまで生て置かぬか合點な

らばともかくも。去れどもそれ無益の事。願くは了簡あれ。某身上かせぎの爲め妻の女房、今明日に金子三十兩借り調ふると申たり、刀の折紙いか程知らねども、盗人の實否立つまで右の金子を渡し置ん。逃失る身にもあらず。所で人にも知られたり。細をゆるして此了簡頼み入る。

とぞ申ける。

家のおとな文平次、

ム、聞へた／＼よいいひ分。折紙は百貫、町人方の賣道具、旦那の留守に失ふては此文

平次がわけ立たず。卅兩あるに極らば、五兩は某まどふべし。宿へ送れ。取逃すな。

兩人兩手を引れば、一人はたゞさを取り、四方を棒にて取圍み、『サア歩め』といふ所へ、姫玉棒走り出で、

やれ其人は御存じなし、いとしほなげに何事ぞ。許してたも、頼むぞ。

と、泣叫べども聞入れず、先を拂ふて道すがら、面も恥も名もさらしの宇治の里へと送り行く。



藤内三郎を寫し、藤内二郎を寫す。

第二光景 宇治の里

世もかすかなるかげろうの、森の下庵軒あれて、月の影さへもりけるが、つまの女房小ざらしは、夫の出世の物入に、我身を捨る心ざし、あはれやさしき貞女なり。

中立の老女、供の男に財布を持せ、『内儀様ござりますか。今日御契約の日限故、金子も渡し、手形をも極めませふ。』と腰掛る。

小ざらし悦び、

なぜに遅いと心待致せしに。先こなたへ。

と請じ入れ、

扱連合には大名方の若君のお差奉公といひきかせ、夫の判も預りしが、世間へも其通りにいふて下されなば、茶屋廊の外は何なりとも奉公は嫌はぬ共、先のお主の名を聞て手形もしたい。

とありければ、小聲になり、

勿躰ない、お山や女郎にやるものか。先の家主は去御本寺の大寺の悟ひらいた長老様、寝酒のお伽にそれさまを三年切て置たいとの御事。こなたからされたふてもあなたがかきつい隠密。三十兩は捨金、四季の仕着に、遣ひ銀、未來も悪ふあるまいぞいの。サア金渡そう判なされ。

と手形と共に出しける。

女房はつと涙ぐみ、『いかに夫の爲なるどて、出家に思はれ、來世まで取はづさん、悲しや』と、そいろに涙はすしめ共、差當て變改も、泣く泣く判を押しければ、あたへの金をよみ渡し、『只今迎ひを連參らん。御亭様とも暇乞。門出祝ふて待給へ。』と、忙しげにぞ出にける。

斯る所へ藤内二郎大勢が取巻て、『逃出したらぶちすへる、ぶち殺せ』とどよめけば、『逃はせぬ棒あてな。』逃びたらぶつぞ。『棒あつるな、逃はせぬ』と、命からしく來る躰。

女房きつと見、たしなみの手槍提げつと出て、『仔細は知らぬぞ我夫。そこをばなせ。放さずば片端に突留ん』と、突出す鎗をより棒にて打つ拂ふつたゝき合ひ、既に危く見へたり



けり。

盛治聲を掛け、

やれ女房早まるな、此の人々にも一理あり。様子を聞け。

と制すれば、小ざらしはがみをなし、

エ、不甲斐なや。理にもせよ非にもせよ、浪人なれども藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。白晝に手ごめに逢ひ、其耻が立身の害にならひであるものか。夫を出世させん爲め奉公に身を賣て、たつた今手形して三十兩取たる金、皆むだごとくに成つたよな。賤しき下々相手には不足ながら、夫婦此處で討死し、名を潔ふ残さん。

と金子を大地へはらりとすて、杖も棒もいとはこそ、無二無三に突立てしは人の妻たる手本なり。

二郎てごめをふりほどき、勇んではげむ女房が鎗の柄を確と取り、

チ、健氣なり頼もし。先づ鎮つて仔細を聞け。去とは武運拙きは今日都本阿彌にて、百貫の折紙道具盗まれし場へ行掛り、我盗まぬに極れ共、云分なき首尾となり、既に半

舎のしほり細掛らんとせし所に、御身が情の三十兩ふつと思ひ出せし故、それをあかなふ約束にて、口惜ながらあめくど面をのこふて來つたり。御身が無念の心底を尤と思遣り。我も生んず覺悟なかりしが、卞和が三度足きられ本意を磨く夜光の玉、韓信は市に股をくぐり、勾踐は石淋をなめて會稽の耻をきよめしためし。それ程こそはあらずとも、盗人の虚名を忍び、武功たて、一天に名を留むべき念願。細目の耻をのがれしも誰か情そや、妻ながら親にも劣らぬ厚恩を生々世々に忘れはせじ。思へはいかなる貧乏神、よしなき所へ導きて、思も寄らぬ難に逢ひ、妻の情の身の代を無下になさふか口惜や、淺間しの運命や。

と男泣に泣居たる。

女房はつと心くれ、勇む心も弱々ど、

扱もく先の見へぬは浮世ぞや。夫の爲に捨る身はいづれも同じ道なれど、世に立て所領の主乗馬よ引馬よと綺羅を磨いて、浪人のすぼんだ肩のいかりをも人にも見せつ見ん爲に、添ふ間もなき夫婦の中、三年といふ年切て生別れする身の代を、無實の難にかへ



んとは。口惜や本意なや。金惜いとは思はねども、夫婦別る、三年の月日が惜い。  
と計りにて、聲も惜まらず泣居たり。

警固ども「遅し〜、金子渡せ。」と聲々にいふ。

ハア渡すまでもなし、其金子取てうせふ。

請取らいで置ふか。

小判吟味し、數讀みて、皆々京へぞ歸りける。

盛治彼等を見送り、

エ、心ない雜人かな。盗まぬには極つたり、此歎きを見るからは、情も了簡もあるべき  
こと此上はわやにする。取戻ひてくれんづ。

と駈出るを、女房

ハテよいわいの。金より命が大事なり。迎が来れば往かねばならず。三年の内逢れぬぞ  
や。死なふも生よふも知らぬもの、迎ひの來ぬ間についちよつと門出祝をござんせ。

と、泣はれし目をにつこりと涙かた手の暇乞、哀れわりなき別れなり。

藤内二郎夫婦を寫す。

### 第三光景 玉水

跡は霞の八重一重、山吹の瀬をわが中の、天の川瀬と又いつかなれにし夫の盛治に、逢ふ  
はたまさかたまくも、歩みならはぬ大和路や、涙にもまれ駕ゆりて、額重しと徒歩既足、  
道の伽とや中立が咄も今は氣に合はず。まだ春淺き御室山、花には雪をやとひ人が、戀知  
らぬやら荷も軽きかたにのしにさげ烟草盆、折々やすむ道草の、今の悲しさを忘れ草、思  
ひくゆらせ思ひけし、胸にほどかせ手にむすぶ、玉水の邊に着きにけり。

肝煎の老女聲づくり、

是れ申し内儀様。今宵は奈良に泊らせ、明日はお國へ着く。此所で月代剃らせ、衣裳も  
替て袴を着せ、男の姿になします。用意なされ。

と申しける。

女房大きに仰天し、

それはかゝ様何事ぞ。寺方の奉公と聞くも心にいらぬ共、それはいふて返らぬ事。月代



を剃り袴着て男の真似する約束はこちやしませぬぞ。餘りな。  
と烟草を吹いて顔をふる。

ハテこれこゝな人、餘りぎし／＼いはしやるな。金遣て手形は取る。それがいやならど  
うなりと卅兩の金立てて、此からいんでもらひましょ。チ、なま暑い。

と上衣脱掛け汗押しのごふて居たりけり。

女房しく／＼泣出し、

何事の報ぞや。奉公の身の代が男の身にもつくことか。三年たつは夢の中、月代剃た髪  
付を戻て男に見せられふか、人に面が會されふか。道でさへ斯る事、猶行く先が思はる。  
と泣けど悔めど甲斐もなく、思ひ直すも亂る／＼も心一つの泪なり。

『歎きて返らず、ともかくも。責てのことに様子を語り堪能させてたべかし』と、泣々／＼  
ば肝煎悦び、

チ、語らねば叶はぬ事、寺と申は偽り。心を鎮め聞給へ。此國の大名古川權頭清氏殿の  
獨り姫琵琶の君とて美人あり。斯波左衛門義將殿といひ名付け。去共父權頭は赤沼入道幸

満と水いらすの伯父甥とて、斯波殿の御祝言今に延びて沙汰もなし。おいとしや琵琶の  
君二十の花は散過ても殿御の顔も見給はず。只斯波殿を戀慕ひ、思積りて氣病となり。  
今養生の眞最中、それ故容色のよい人を斯波左衛門義將と名付け、心に勇をつけたれば  
ちのづと薬も廻らんと、醫者衆の指圖なれども、ほんの男はならぬ故、男らしい女中の  
お尋にて、斯くまで談合なりしこと。月代剃るが厭ならば、三十兩を今こゝへ立て、還  
りや。

と語りける。

女房餘り可笑しくなり、

寺よりそれは増しならん。常に聞きしこともある、左衛門様の真似をして、合戦いくさの  
咄でも見事間には合はせふが、みづからと姫君の肝腎の夜討にはどふも勝負がつくまい。  
と笑ふて齧を晴らしけり。

『扱は合點か喜ばし』と、荷物をほとき櫛道具、衣裳品々取り出す。女房常に連合の髪月代は  
手馴しが、じぞりじびんの初元結、もむ黒髪を玉水の底の玉藻と水鏡、油の梅花剃刀も匂



ひを惜む額際、それはあくたの花かずら、髪をきしての幾歳か、見なれし顔を我ど我が、別れの涙亂れ髪、共に落ち来る膝の上、こまくら捨て、たけながも、より元結に大たぶさ、肩の引墨男眉、おはぐろおとす磨砂、みがき楊枝の青柳に、櫻咲いたら二役や、女ども見へ、男なら御もつあがりの若者と擬ふばかりになりけり。

衣裳更め太刀刀衣紋繕ひ待つ所に、引馬乗物徒士侍、七つ道具を押立て、古川権の頭清氏より、花笠斯波の左衛門義將公の御迎ひ。』と呼ばれば、

ア、馬がでんく打つはいの。ア、怖や。

とぞ逃にける。

肝煎も氣の毒さ、これく是は何事ぞ。小訛になつてどうすべいかうすべいと男らしう遣ふぞや』と囁けば、打領き、

身が方へ鼻殿よりのお迎ひだといふか。ア、太儀く。目出たい折柄だ酒でも打喰つて、唐辛をかつかじり、寒風を凌いで供をせろ。先へ行くべい、奴さまゆるさしやんせや。

と口掩ふ、袂張肘のしくと歩むとすれど、かいどりの身癖顔癖引つゝむ殿御模様のかさね着の、うらなつかしき女肌、男女の二面、このて柏や此手ふれ、ふれくお先をつ立てる。

藤内二郎の妻を寫す。

第四光景 古川館

春の霜古川館へぞ迎へける。

家の總領藤冠者氏連は、妹の祝言と装束改め居たる所へ、都より赤沼判官下向のよしにて案内し、竊に冠者に對面し、

此頃は御飛脚、特に斯波の左衛門義將入との御知らせ。是ぞ屈強の時節と存じ、罷下り候が、してそれは必定にて候か。

冠者小聲に成て、

中々の事。妹の琵琶の姫左衛門を戀ひこがれ、病氣重り候を父母歎きて申遣し候へば、左衛門も合點し、今日聳入仕る。我等には何も知らず。是ぞ天の興へ、手を合せて討取らんと内通致せし所に、早速御下り、大慶く。



とぞ申ける。判官悦び、

扱なふいづぞや此所にて失ひし將軍の印判も必定琵琶の君の盗しに疑ひなし。妹とて油断せられな。それに付き、この者は藤内太郎二郎が弟藤内三郎武治、兄を疎んじ我々に仕へんと申故召抱へ候。斯る所へ擧入する左衛門めは死に來る同前。

と笑坪に入てぞ笑ひける。

やあ是々下人共には一味もある、父母聞かば事喧し。随分忍べ。

『忍ばん』と、座敷を起て判官は土民の家に宿を借り、案内をこそ待にけれ。

\* \* \* \* \*

殿御見んとて琵琶の君、今日のはらりと氣も軽く、此頃になき笑ひ顔。男といへる妙藥に者婆も匙をや棄けらし。

父母ばかり合點にて深く包むことなれば、兄藤冠者家來まで誠の斯波殿御山と、何公の侍頭を下げ、『御通り』と申上る。

女心の男の眞似、顔に紅葉の錦縁、疊さはりも足浮きて、眞君にも姑母にも、どう挨拶を

諸禮やら無禮やら、只あい／＼と禮をして頭下るに暇なく、割膝痛く、ともすれば女子居座前しどけなく、行儀作るもいた／＼し。

姫君心わくせきと、

申左衛門様、何がお氣に入らぬやら、祝言の取遣りも、渡守なきことがれ舟、片われ舟の片思ひ、よふ頃はして下さんした。

と怨めしそふにのたまへば、

これが舟でも何舟でも手前に帆柱持合せず。本意を背く仕合。

と只禮してぞ居たりける。

藤冠者此躰を心得ずや思ひけん、

是々左衛門殿、貴殿の御事は斯波の武衛のお館とて、系圖正しくあるよし、氏は何氏いづれより別れしぞ、承らん。

と申ける。

南無三寶と思へども、知らずといはれ悪しかりなると、



▲、扱は私を誠の左衛門にてはなきと思ふ疑ひか。拙者が家の氏系圖存せぬことや候べき。未ながく緩々と御物語致しませよ。

と答ふ。冠者何かな詞質にせんと思ひ、

イヤ重ては重て。冠者めはいひ掛つて聞ねば一分異なるものなり。是非語りともなくば、

どうぞ又語らせ様もあるべきに。

と苦々敷ぞ申ける。

今は遁るゝ方もなく、『然らば語て聞せ申さん。』とまゝくしくはいひけれ共、夢にも知らぬ斯波が系圖どこへとりつきいふべきやら、こはいかせんと思ひ亂れて居たりしが、此上は力なし、古の大將兵ものを思ひ出すを幸に口へ出るまゝ、嘘八百いふて退けんと心をすへ、膝立直し、息次し、

抑斯波の武衛の館ぞ申ば、代々左右の兵衛に任ず。兵衛の官の唐名なれば家を武衛と名付たり。斯波の氏は源氏なり。惣じて源氏の品々は、清和源氏、宇多源氏、村上源氏、嵯峨源氏。中にも斯波は清和源氏。源氏くが四源氏とぞる。中に清和ぞ世に光る。光

源氏は敷島の歌道の傳授と聞へたる、百人一首の卷頭天智天皇十八代の御門、陽成院筑波根の峰より落るみなもとの、頼光に胤腹一つの御弟、頼信の跡取頼義の惣領、嘘でないよの愛宕白山八幡太郎義家に五代の後胤、上總の介義兼が末葉、兵庫の頭坂田の公平には、顔まつかいな他人にて、渡邊の綱こそは茨木童子が片腕、只一太刀にうちわもうち伯母尊とよ。鶴をいひし獸物の御門を惱まし奉る、頼政勅誥装つて、たんだ一矢にころく落る所を猪の早太、この刀ぞさいたらばたけ、畠山の重忠も縁者續きの先祖にて、三浦大介が疝氣すぢ。四代の末孫朝比奈の三郎義秀は音に聞へし大力。曾我の五郎時宗が鎧の草摺むんずと取て、引て見せんと踏締てふんばたかつた股野の五郎。力ぞんにて我らまで、いかな殿御も確と、抱き締だけはあられの佐々木殿。土肥の二郎も従弟筋。いどこほとやうにたんの四郎。富士の御獵の高名は、末代末世記録に載つた猪武者の争ひに、負腹立て、讒言いふ梶原とは何でもなく、鎮西八郎爲朝の下戚腹、瓜の蔓になすの與一扇子の的より精兵の達者、弓の傳授の家ぞとは、是ぞ系圖の始めなる。夫より代々に傳はりて、楠多門兵衛正成が嫡子、犬坊丸。二男悪源太義平。三男山邊の赤



人は古今無雙の歌人にて、公家にも一門在原の業平の中將の、手かけ腹の持籠り、妻もこもれり若草に、けふはなやきそ武藏坊辨慶が七番目の末子、七つ道具のさい杵頭、法然上人の一の弟子とあり難き熊谷の二郎直實に三代の一人娘、静御前は血の道持、扱こそ御子まします。常にひきたる腰越より追返され給ひにし九郎太夫の判官源の義經の一の谷鵜越、まつさかさまに落し子の、末葉も繁る桃園や清和源氏のちやくく嫡流、斯波尾張の守家氏。左近の太夫時氏。其子に宗氏。其子に武衛高經が三男、斯波左衛門義將とは我等がことにござんす。

と口に任する系圖の巻、うさんな所をいひかすめ、いきつき次第にいひければ、『扱も廣き御一家。身に過たる聲殿や、三國一じや。聲にどりすまいた』とぞ謠ひける。

權の頭夫婦の人、長物語に女の姿顯れてはいかと思ひ、『ちと御休息候べし。我等も勝手へ罷立つ。皆々是へ。』と打連て座敷を立てぞ入給ふ。

小ざらしは只一人、『扱もあぶなや、氣づまりや、眞似をするさへいゆつなきに、よふ殿達はおの様にして生て居さんす事じやまで。』と、獨言して身を横に手枕してぞ休みける。

琵琶の姫立還り、差足して寐姿の後に立てつくぐと見れば見る程好い男と、とんと抱付伏し給へば、

なふ悲しや。

と起上る。

袴の相引しつかと取りて口説き、

自が兄藤冠者氏連と伯父赤沼と心を合せ、將軍義教公の御判を以て廣廻文之致せし所を、自御判を盗み置き、新手枕の引出物に參らせんと、兄伯父の敵となり、隠し置たる心と

いひ、餘りつらき我殿御。

と怨みかこちて還らる。

藤内二郎盛治は女房とは夢にも知らず、『左衛門殿聲入の風聞あり、赤沼一家に縁を組み心をゆるし給ふ事、飛で火に入る御身の上、いかにしても氣遣はし。』と、假着仕立、古川の式臺に立掛り、當番に近づき、『斯波の左衛門が家來にて候。主人にそと逢ひ申度ことの候。ち取次願み存る』といふ。



當番の侍聞届け、『幸廣間に御出なり。斯ふ御通り。』

御免われ。

奥に入れば上段に、器量由々敷若侍忙然として座し居たり。

『我女房の小ざらしによふも似たるものこかな。さもあれ是や斯波殿ならん』と、顔を疊に、  
謹で

近頃憚千萬ながら、藤内太郎家治が兄弟なれば主同然の忠義を重んじ奉る。當代の習  
ひ、親が子をたばかれれば、子は親に楯をつく。况やは赤沼が一族、殊に御小舅藤冠者  
は君を討滅さん結構と密々に承る、御運盡て不覺の事も候は、色に溺るゝの嘲弄通れ  
給はじ。どつく御供申さん爲め參候仕る。

とぞ申ける。

顔を上げば夫とも知らず、

ヤア誰なればちんぷんかん。殊に此左衛門を色に溺るゝとは宿に残せし思ふ人の傳へ聞  
んも耻しい。先己は何者ぞ、罷立て。

とぞ仰ける。

イヤ某は御家來藤内太郎が弟、同じく二郎盛治。

と顔を上げば、

なふ藤内殿か。

我がつまか。

走り寄て紐付くを、小がひな捨て取て投げ、

やれ物狂ひめ。大名の若君のおさし奉公と偽り、所こそあれ赤沼一家、剩へ女の身の斯  
波殿と名乗て月代剃て其様は、天竺にも例を聞ず。爪一つ髪一筋夫に任せし躰ならやず。  
察する所敵に頼まれ、斯波殿を賺し寄する計畧か、但は不義か、迎も助けず。白状せよ。  
とせいて聲さへ震へけり。

女房動せず。

ア、聲が高い。不審も腹も立つは道理。去ながら不義をする私でもなし。敵に組せん様  
もなし。此所の娘御左衛門様を戀病ひの心ゆかしの伽にとて、欺して斯くはなした事。



それにつき、琵琶の姫、大將の御判を兄の持たを奪取り、床入したらばくれといふ。腹を立すと御判を取る分別したがよむいの。コレせくことではないぞや。

と事を正していひければ、盛治聞て、

それは案の外の事であいた。まづ其御判が取たいが、どうしたものであらふ。

といふ。

是重疊の思案がある。今宵も姫の忍ばれん。こな様わたしと入替り、闇黒に姫と寝て、

賺して御判を取給へ。

ハテそれがどうなるものぞ。餘の分別をせよ。

エ、いはれぬ斟酌わしと欲を離るれば、お主の爲じやないかいの。

いや、遂には左衛門様御夫婦の姫君に疵が付いては後難なり。然らば某園に待受け、姫君忍び給はん時、仔細を語り連て立退き参らせん。時には御判も取戻し、姫君御夫婦と本意を遂げさせ給ふのみが、我々が忠義も立つ。よき折柄に來合せたり。こつちへ任せ案内せよ。

と盛治は上段の帳臺の戸をさし廻したる躰にもてなせば女房は植込の數寄屋に隠れ、首尾合せ、連て退んと手筈を取て別る。

\* \* \* \* \*

はや暮六つの時計の聲、一間へくの大蠟燭星の降りし如くなり。

課じ合せし藤冠者赤沼判官藤内三郎、郎等には走井の久七、久八、根地の大藏、息をも立てず拔足し、帳臺を追取巻き、まりがきの大綱をそろりと引延し、四方を張て包みしは通れがたき手段なり。

仕済し顔に顔合ひ、面々が懷中より大釘鐵鎚取出し、襖遣戸に手を揃へ、一度に打て打付たり。

藤内二郎『南無三寶』と、此所彼所を開くれ共、釘付の戸のあかばこそ、障子を破り差覗けば、大綱掛て軍兵共兵具ひつさげ圍んだり。天へや飛ばん、地や潜らん、六神通の阿羅漢も通れつべうはなかりけり。

障子の内には大音上げ、涙をながひて、



古人の詞に偽なし。己れ女め、此儘にて死する共、大天狗となつて思知らせん。

と、戸障子叩き踏鳴し、

敵のやつよよく聴け。昔が今に至るまで、君を殺し父を亡する族はあれども、主と聲とを討取て世に立ちし例やある。汝知らずや、長田の庄司は主君義朝聲の鎌田を害し、其日に其身も討れたり。因果は下れる車の如し。報はん程を思知れ。切て冠者めか判官めか一人討取り、雑兵五騎十騎も左右の脇に掻こふで、思ふさきに締殺し、心變りし女めを蹴殺して死なんづものを。エ、無念なり、口惜し。

と、踏たる板敷どうくどうく踏鳴し、血の涙をはらくはらくはらくと涙を切裂き、牙を噛み、躍り上つて怒をなす。

障子の外には、女といふを姫のことし心得て、

ヤア愚かなり左衛門。敵の娘兄弟と知りながら悠々と聲入して、女を怨むる不覺さよ。

此通にて干殺に逢ひ、餓饑道に落入より、一思ひに腹切て修羅道に落よかし。

と、一度にとつと打笑ひ、鯨波の聲をぞ上げたりける。

權の頭夫婦姫君諸共走り出で、

ヤア物に狂ふか悪人め。仁義ある斯波殿と縁を組て忠を盡し、身を立ん心はなく、謀叛人に組し、賢人の大事の聲をも討んとは、天魔の障礙か淺間し。

と制し給へば、

ヤア聞ともなし。大義には親を殺す。それ搦めよ。

といふ所へ、庭の一木の蔭よりも、

ヲ、暫くく。斯波の左衛門是にあり。

と夕關照す黄金作り五尺餘りを差貫き。ゆるぎ出たる有様は。鬨群れ居る沙干瀉、葦分鶴ののさくと、物に恐れぬ威勢なり。

藤冠者驚きて、

今までこゝに聲しつるが、いつこより逃田けん。それ討取れ。

と呼ばはれ、

ハ、ア愚か、蟹は甲に似せて穴を掘るとは汝等が事よ。天下の管領承つて六十餘州



の政道を司る斯波左衛門義將、身は一つなれども、命に替はり、名に替り、幾人にならぶとまゝ。是は藤内三郎、何と此左衛門は其の方か嫂の小ざらしといふ女によふ似たどは思はぬか。チ、似たも道理。誠は藤内二郎盛治が妻小ざらしといふ女房なるは。うつそり共、女と思ひ怪我するな。並や通途の女でない。浪人の憂き難儀、針一本の力にて夏の物を冬に仕つ、鏡立を米にしたり、硯箱を味噌にする、古葛籠を忽に目の前で家賃にせし、神變自在の女なるぞ。サア此上は案じもなし。天に二つの日なし。地に二人の殿御なし。夫の爲に棄ん命塵灰芥吹は散る、扇げば飛ぶ、高の知れた浮世の中。たとへ己等鬼神にてもあらばこそ。切らば切らん、衝かば衝ぶつ、飛ばば飛ばん、跳ねば跳ねん。命限り、腕限り、三つ四つの男首、此一つの女首かへばかへどくサア来い。

と身も軽々とさそくを踏み、目の中鋭く、身は凍々しく、勇み掛れる有様は、昔の巴山吹が生れ替りといひつべし。

マア口の過たる女めかな。あれ討留よ。  
と下知すれば、父權の頭打物抜き、母も姫も長刀構へ、

主といひ、婢といひ、親に敵たふ大悪人、餘すまじ。

と入違へ、誓し支へて切結ぶ。

其隙に盛治は疊を上げて板敷をやすくと切破り、大わらに成て願はれ出で、

藤内二郎とは我事よ。敵に優劣なければども、差當ては弟の三郎め、首捨切らん。と飛掛る。

『三郎討すなもの共。』とどつとちめて駈合せ。彼方へ追立追ひ捲り、二郎危く見へける時、女房さかしく障子に張りし大綱外し、勇んで掛る新判官藤冠者が後よりどつくと綱を打掛て、さしやつと引きければ、仰向に打こかされ、『是はく』と手足も叶はず。結柴に掛りし野末の鳥、心地よくこそ見へにけれ。

此勢ひに盛治を取て伏せ、高手小手に縛め、寄来る雑兵四方へばつと追散らし、立掛つて綱繩床柱に括り付け、

彼等二人は左衛門殿より眞殿への御年玉、活けるも殺すも御勝手次第。弟は拙者が正月の料理初めの初着。是れを着に姫君を御供申して御祝言。月代割つたを幸にも興添にも







綱かいくりく栗毛に乗つた馬上はよしやあしげに、雪のよつしろ、白ふくりんや金覆輪。今は梨地の鞍籠。馬はあれども此身には、徒路越行く木幡山。弓手にみつの行先は、口なしはらと聞くならば、世にかくらふる我々が、此身つゝむに頼もしく。明ずもあれた淀川の岸に掛けたる白浪を、花の綱代と朝ほらけ、覺駕鳥の鳥とび飛んで天にいたれば魚淵に躍る訓も上下の道あきらけき鳩の峰。正八幡の鎮座ある我氏の神、軍神、武運を護りたびたまへと、頭をかたふけ給ひければ、各遙に禮拜し、君が行衛を祈念ある御有様こそ殊勝なれ。見渡せば山の名の朝日に水解け渡り、水や烟をまきの鳥。宇治の里の子の打群て、萌る女萎摘む、若菜摘む。つばなすぎなに咲いたつま、つまはたがつまちひぬれば、ふきのしうとめく。水ない川で舟漕がば、そなたは目籠で水を汲め、ふきのしうとめく。あの山の松葉をよめや、嫁菜たんほつくくし、すみれな摘みてわらんべの、相撲取草たつ方に、勝てやかてく、勝鬨のことたがむそう武士の、やぐらにかけてはりまなげ、あぐる團扇や扇の芝に、はや三番の勝相撲。名乗りてすぐる郭公、またぬに春をもれ出で、

弓馬の道もさきがけんと、漲り渡す長池や水草かき分け鳴く蛙。蛙軍の勝負に御身の上の占とへば、水の源淀みなく濁りなき世に和泉川。暫しが程の池沫に沈まば沈め、頼みあるみかの原にぞ着給ふ。

畠山小將監進み出で、

某召具し候は藤内四郎光治と申郎等、太鼓の妙を得戦場の駆引、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人故、則ち御代々の太鼓を預け召連候。斯波の左衛門が家臣藤内太郎が弟にて候へば、此者を御使として斯波が方へ内通し、一先御頼み然るべし。

と申上る。

義教公や、涙ぐみ給ひ、

我も左こそは思へども、斯波が諫を用ひず、今斯る身となつたれば、今生にて左衛門にいかで面を合されん。仁義ある忠臣に見捨てらるゝも義教が運の極め。

とばかりにて御涙にぞ咽ばるゝ。

斯る所に十八九なる若者編笠脱で御前に畏り、頭を地に付け申様。



某は御近習に召使れし一色大炊の介にて御座候。御壁書に背き不義の科、高眼をかすめ女を相具し欠落、重罪逃るゝ方なく候得共、全く色にふけり御成敗を恐るゝにも候はず。本我等は一色が實子にて候はず、元來父母もなき捨子とやらんにて候ひしを、養父一色兵衛拾ひ取り、御目見へ仰付られ、惣領に立つき所に、段々實子出生致し、養父世を去り、母にて候者若年の弟を惣領と申上げ、年かさの某を末子と沙汰し、式日の御禮も俄に末子の座に列り、御供に候六角畠山山名を始め、肩を並べし諸朋輩に面を向んも面目なく、所詮一色が家を出で、誠の親の由縁を尋ね、此面目を雪がんと存じ候折から、心の外に御法式に背き、御所を立退候。じひは上より御免を蒙り、御馬の前にて討死仕り候は、生前の思出。

と涙を流し申しける。

大將御立腹まし、

など以前首を切て棄つべかりしに、入道めが助け落したれば、汝は入道が大恩を受し者を召使はん様はなし。誠あらば立還り赤沼父子の中首取て來れ。其時は勘氣を許し召使

はんづ。罷り立て。

と御詫ある。

大炊の介承り、

有難き上意、赤沼父子が首取て御憤をやすんじ奉らん。いかに朋輩達、若し仕損じて討死すとも、敵に半死半生の深庇よかひを負はせで置くべきか。御勘氣御免の御執成し頼み入る。とばかりにて御前を立去りし矢猛心を頼もしき。

大將彼が後姿を遙に見遣り給ひ、

いかに方々彼奴か詞は心得難し。大炊の介めが瘦腕にて赤沼父子を討んとは誠に螻蛄が斧なれば、叶ふまじきと歎かんこそ誠の心なるべきに、たやすく討て參らんと輕々しく立たるは、思へば彼奴は入道が恩を送らん爲め、義教が有様を窺ふと覺へたり。追駈討て來るべし。とくく。

どのたまへば、血氣盛の若武者共、逃るばかりに思案もなく、討取て御門出の一番手を祝はんと、さそくを照て三人は藤内四郎相具して、もみにもうでぞ追駈ける。



御運のなせる所なり。旅人の休らふ躰にもてなし、傍に寄給へば、何處よりか來りけん、矢一つ來つて左の袂に立たりけり。

『こはいかに』とかなぐり捨て、たまへどたまらはこそ、猶亂れ來る矢を凌んと笠をもつて受給へば、刈残したる村薄枯野に立る如くなり。

『今は叶はず是迄』と、この木蔭かしの草村、隠れ、顯れ、遁れんとすむ所に、赤沼熊橋弓箭の武者百騎ばかりが、一面に矢襖作つてとつと寄せ、

『アア義教、都よりつけ來るをそれと知らざる愚かさよ。速に腹を切れ。異議に及ばばなぶり殺しにせんずる。』

と矢尻並べし其勢ひ遁れつべうはなかりけり。

藤内四郎取て返し、矢面に駈塞つて、

『アアこりやなまこびすぎたる奴原かな。畠山が郎等づでん天下に隠れなき太鼓打の藤内四郎定めて音にも聞つらん。太鼓も打たり、敵も討たり、物臭い赤沼に胸がわるふて頭も打つ。太刀も刀もいらばこそ撥二本が干將莫邪。一曲所望かサア來い。』

どあたり睨んで立たりけり。

『相手に成て犬死すな。遠矢に射取れ。』と差詰め引詰め、雨霰と飛來る矢を『だんじり太鼓の曲撥見よ。』と、撥取て切拂ふは前代未聞の拍子也。

矢種盡れば敵の勢太刀拔連て討て掛る。

太將も太刀を差歸し支へ給ふ其隙に、藤内太鼓をまらばせ寄せて、天も響け、どうくど打鳴らす其聲に、すは事こそと三人は我もくど引返し、大勢に割て入り、切立て確立て追散らすは潔かりし勳なり。

熊槍犬二郎満景取て返し藤内に討て掛る。『しゃしれ者め、太鼓の撥のあんばい見よ』と、目とも鼻ともいはせばこそ無二無三にたいきつけ、太刀打落してこまたをかき、うつ伏に取て伏せ、懸て細をぞ掛たりける。

程なく三人立還り、『御事始めの御吉左右。猶も目出たきしるしには、只今あれにて承れば、赤沼入道吉野山の古城に立籠り候を、斯波細川が攻寄するとの風聞。兩將が陣に御入あり、逆臣亡す謀計時刻を移すべからず。』と言上すれば、御大將げにもと同じ給ひける。



藤内四郎は犬二郎が背中に太鼓を括り付け、

御出陣の武者揃へ、味方を集むる觸太鼓の、秘曲を打て祝はん。

と、撥輕々と打鳴らし、聲張上て觸にける。明日はどうから〜。とん〜から〜  
どんがらが。ツツてん天の時至り、地の利に合へる名將の出陣こそは由々しけれ。

藤内四郎を寫し、義教が佞臣を近け、忠臣を退けたる結果としての艱難を示す。

第二光景 吉野山城外

去程に斯波の左衛門義將は大將軍の御出に、面目開く花櫻吉野に籠る大敵を、血汐になれ  
と赤沼が大手の木戸に向はる。搦手は細川勝秀三萬餘騎を引卒し、貝を吹き太鼓を鳴ら  
し、ときの聲をぞ上たりける。

軍大將竹だば際に駒を立て、

清和天皇の後胤足利の類葉斯波左衛門の尉源の義將。寄せ來る意趣は、赤沼入道父子謀  
叛を搦へ、帝都を騒がし、武將を弑し、四海を覆さんとする罪科、據所なし誅戮せしむ  
べき旨承つて發向す。勅命といひ、武命といひ、天道いかでか免れん。速に腹切て親子

首を渡せややつ。

と呼ばつて靜々と乗入りける。

入道門の矢ざりに立て、

大將を亡し國家を望むは弓矢取る身の定まる法、和漢其例を知らず。忠孝にことよせて、  
位牌知行に膝を屈むる臆病者、入道一家を討んとは鶯の巢を鼠か狙ふに異らず。誰かあ  
る打て出で追つ散らせ。

とざいおつ取て下知すれば、城にも関をどつと上げ、大手の木戸を押開き切て出れば、寄  
手の大勢入違へ入亂れ、もみにもんで戦ひけり。

斯る所へ鐘が御嶽の方よりも若武者一騎、卯花威の鎧着て、大手の木戸に突立ち、大音上  
げ、

義教の奥小性一色大炊之介久常。御高恩忘れ難く、命の親の御先途に鎗一本の御役に  
と御味方に參つたり。門を開き城内へ入れてたべ。

とぞ呼はつたり。



斯と聞くより新判官堀の上に顯れ出で、

ヤア表裡者の恩知らず。汝不義の科に因て害せられんずる所に、父入道か情を以て命を助け落せしに、其大恩を振捨て一大事をなと藤内には語りしぞ。犬猫の畜類も食を與ふる恩は知る。虫同然の奴原を此赤沼か味方にせんずる様はなし。とつく還れ。

といひ捨て、城の内へぞ入にける。

寄手の陣を見渡せば藤内兄弟三人陣頭にひかへたり。大炊之介きつと見て、

珍らしや藤内太郎、定めて沙汰にも聞及ばん。某御勘氣御免の願ひ申上たる所に、大將軍の仰には赤沼父子が中首取て來らば其時御免あらんとの御詔に付、味方と偽り城に入りたばかり討ん心入、門外までは來れども、敵心を許さねば力なし。方々偏に頼み入る、斯波殿にも様子を語り、御執成にて御免あり、心すしくよき敵と引組んで、討死途げたき心底を哀れと思ひ、よき様に披露してたべ藤内殿。と涙を流して頼みける。

太郎聲をあらしげ、

情知らぬに似たれ共、大事の攻口小事にかゝはる暇なし。軍初に味方に對し涙の跡は不吉なり。餘人に頼まば頼まれよ。

と愛相なげにぞあしらいける。

はつと計りに大炊之介、『扱はふつ』と叶はぬか』と、どうと座を組み歎きしが、

敵も味方も聞てたべ。某程世に味氣なき者はなし。誠の親は見ず知らず、捨子となつて拾はれし名字の親の一色殿には死別れ、主君には勘氣を受け、朋輩には疎まる。此身の前世は何者が生替りて此身ぞや。

と諸軍勢の見る目をも耻ぢず歎くぞ哀れなる。

エ、思ひ極めたり。軍すとも侮つてよき敵は向ふまじ、雑兵五騎十騎討共何の益あらん。兩陣の真中にて腹掻破り、生々の業煩惱をはらさん。

と腰刀するりと抜き、

此刀こそ生の親の譲り刀、これを添て棄てられしと養ひ親の物語。二度差すハき鞘にてなし。共に冥土の供せよ。



と、鞘の真中二つにさつと切わつたり。  
不思議や鞘を二重に彫り、父の筆と覺ぼしくて、一通の證文あり。

諸人不思議の思をなし、鳴を鎮めて聞きければ、

五番目の男子に書置く一通の事。抑我等が氏は藤原、生國は河内の國、よつて家名を藤内と呼ぶ。久しく浪人沈淪して五人の男子を置く。一藝に名あるものは用ひられずといふことなしといふ本文を忘れず。藤内太郎より二郎三郎四郎まで笛鼓を習はしむ。汝は襦袢の内にて母に後れ、父又今死に臨む。孤とならんいとしき、路頭に捨て養育の又餘の親を待つことも、誠の親の情なり。共に孝行忘るべからず。藤内五郎忠治へ。慈父藤内太夫實治判。

讀も畢らず、太郎二郎四郎も立寄り見れば父の手跡なり。『ありしとばかり見ず知らぬ弟の五郎なりけるかや。』兄弟達か懐かしや。』と兄弟ひしと抱付き、慕ひ歎くぞ道理なる。

城の内には聲々に『斯くと知らばちびき入れ、とつく討て捨つべきものを。あれ餘すな』といふ程こそあれ、我もくと木戸押開き、鎗先揃へて支へたり。

何所よりか來りけん、藤内三郎高手、小手に縛められ、陣中に躍出で、

城の大將聞てたべ。先日古河の館にて、兄の二郎に擲め取られし藤内三郎武治なり。つれなき兄めが生けもせず殺しもせず、やり放しの放飼、近頃無念千萬なり。細を解て給はれかし。兄二郎めが首取て此無念を晴したし。いかにく。

と呼ばれば、城に籠る藤冠者、『まかせて置け』と飛で出で、

ヤア三郎か珍らしや。大事の味方一人擲めさせては口惜し。サア働け。

と解く所を、『忝けなし』と腕首取り、前へ取て引寄せ、とらと打伏せ、

一旦の出来心兄に背きし後悔さに、たばかつたるぞ呆氣者。直に此繩頂け。

と三寸繩に括り上げ、

兄弟の中直り、土産にする。

と廣言し、味方の陣へ追つ立て行く。

弟五郎入換り、

今までは大炊之介、今日よりは藤内五郎。四人の兄は親の仕付けし亂舞藝。我等は自身



の才覺にて棒の一手覺へたり。我と思はんものあらば某が棒先に當つて見よ。と呼つて、筋金入し櫂のより棒かいこふて、進み出れば、四人の兄弟、『我々が一盞も捕へて軍の目を覺さん。棒に合せて囃せや鼓、吹けや横笛、打てや太鼓。うつたり敵。』と戯れて、一せいに奏すれば、

こは花々しもの共や。討取て高名せよ。

と走井の久七、久八、はね田のどん藏、根地の大藏、栗生の熊藏、石坂九郎、得物くを提げて、打て掛れば、藤内五郎棒の秘術の水車横車腰車片手輪違ひ諸輪違ひ、一文字十文字拂落し掛落し、百手を千手と手をくだき、數多の敵に駆向ふ、目覺しかりける働きなり。胸板胴骨肩間真向打破られ、左手右手へぞ伏たりけり。

『時分はよいぞ乗取れ』と、搦手より細川勝秀城中へ亂れ入り、堀際堀際追詰めく、一騎も残さず討留しが、赤沼親子を見失ひ、此所よ彼所と尋ぬる所に、中川が亡魂は花の吹雪の雪女、一念の鬼女となつて、  
あら怨めしや、いかに赤沼。たど、いづくに隠るゝとも助けはやらし。吉野山花を尋ねて

山廻り、最後の寒風まだこゝに冴えかへりたる雪氣の雲の、雪を誘ひて山廻り廻りく、て輪廻の恨み、思ひ知れや。

と入道親子を引立てく、『來れく』と大將の御前に引据へ、『猶行末は源氏の白旗白雪の守り神ぞ』とゆふしでの、雪を散して失てけり。

大將御喜悅淺からず、二人が首を切懸けさせ、かちどき三度、三々九度、斯波細川に御盃、藤内五人に五々國の御加増し、仕合せよしの今年ぞと、祝ふ春こそ目出たけれ。

藤内五郎藤内三郎を寫し、五兄弟の顛末を結び、斯波細川、赤沼入道父子以下を滅して撥亂反正の功を擧ぐるに及ぶ。

風從頼末蕭々起  
月過花陰故々遲



〇〇〇



## (二)「國姓爺合戦」解剖

解題 彼が戯曲中最も喝采せられたる者、「國姓爺合戦」に過ぐるはなく、彼が戯曲中最も理想的なるもの亦「國姓爺合戦」に過ぐるはなし。蓋し「國姓爺合戦」は國民理想の頂上なりし也。隨て彼等が喝采の頂上なりし也。

彼年六十三の作にして、正徳五年十一月始めて竹本座に於て竹本筑後の弟子に由て場の上せられ、「九仙山」は竹本頼母内匠太夫竹本文太夫三絃鶴澤三三、第三所作は竹本政太夫豊竹萬太夫同難波等之に當り、非常なる喝采の間に反覆又反覆すること十有七月。其後に至りても亦之を繰返すこと幾回なるを知らざりき。

彼が没後一周忌に有名なる狂歌師油煙齋貞柳歌ひて曰く、

さつするに今は安樂國姓爺、

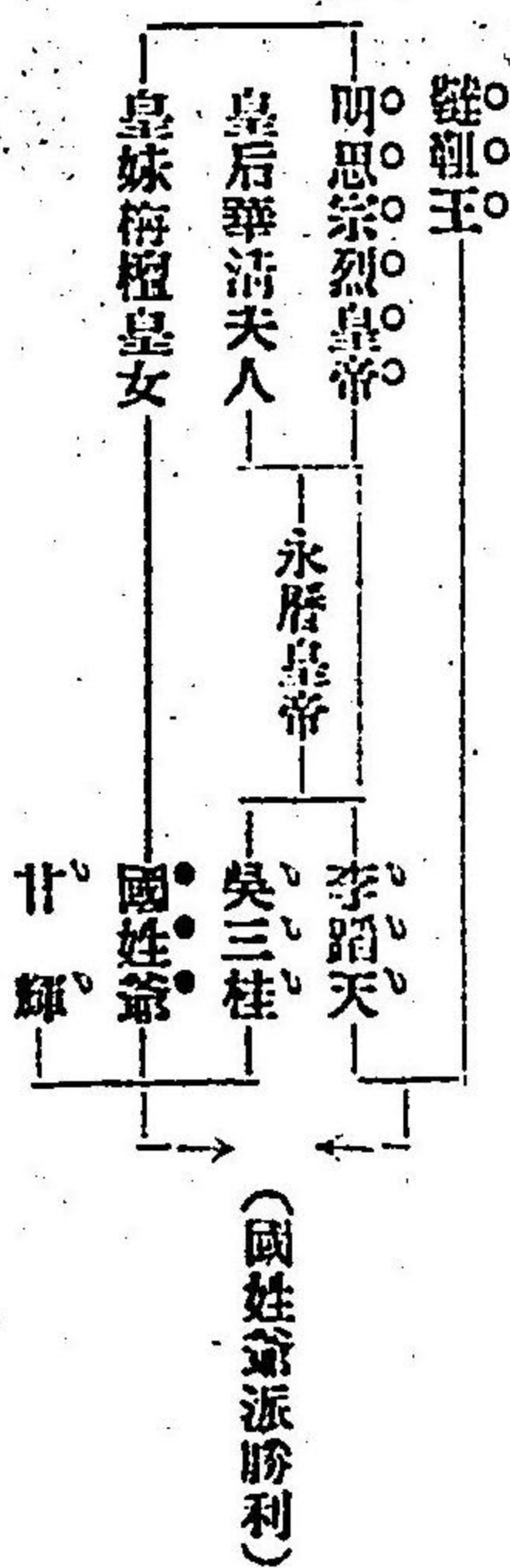
さても其後びんぎなければ。

彼を歌ふに獨り「國姓爺合戦」を擧げたるは「國姓爺合戦」を以て、彼を代表するに足ると思惟したりしに由るにあらずや。

登場者 の重なるものは、

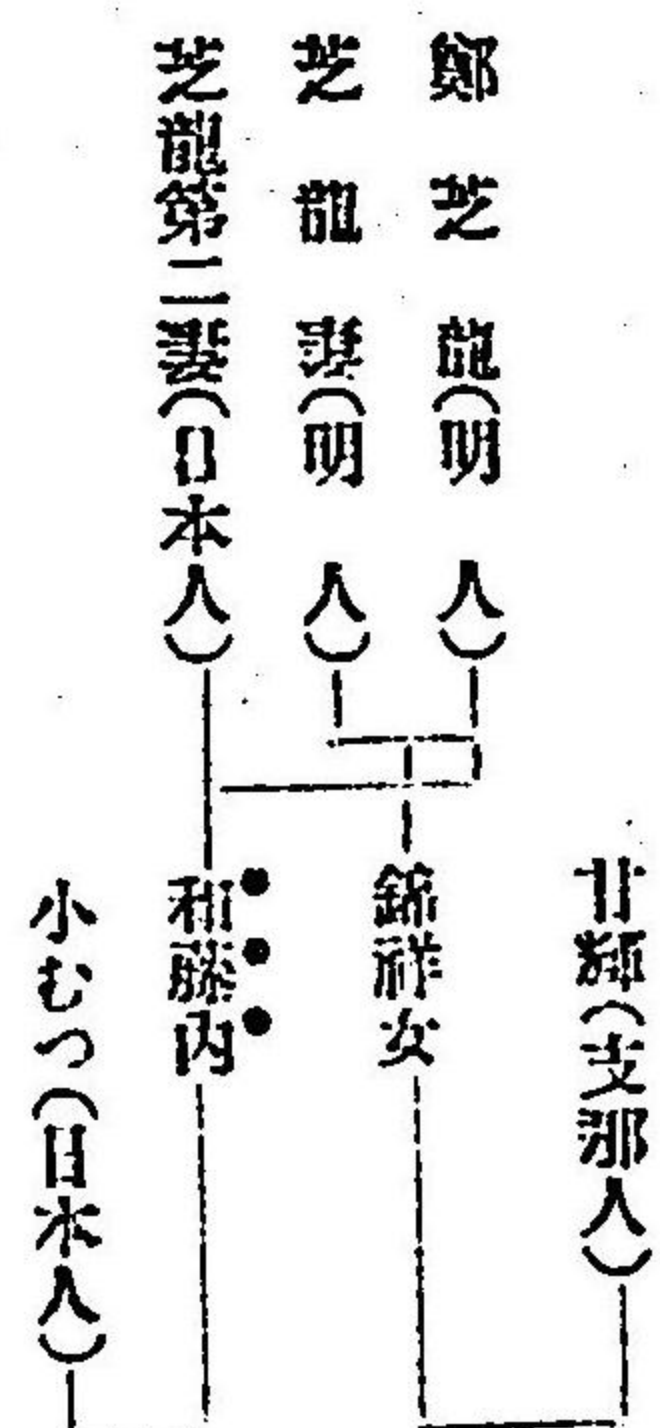
- |            |          |
|------------|----------|
| 國姓爺和藤内     | 和藤内母     |
| 和藤内父鄭芝龍老一官 | 吳將軍甘輝    |
| 甘輝妻錦祥女     | 大司馬將軍吳三桂 |
| 吳三桂妻柳歌君    | 右軍將李踏天   |
| 梅檀皇女       | 思宗烈皇帝    |
| 皇后華清夫人     | 永曆皇帝     |

此等の人々の政治的系統を擧ぐれば下の如し。





國姓爺の戚族的關係



國姓爺鄭成功即ち和藤内は、俠武の權化にして、忠孝の結晶跡とも見らるべきものたり。須彌山崩るゝともびくともせぬ膽氣あり。暴虎馮河の勇力あり。而して忠の爲には落魄皇女に逢ふて赤手家國興復の大遠征を企て、疑はず。孝の爲には事其母其父に及ぶや忽ちに其の抜山の力をも失却す。

彼が勇武の加ふる所四百餘州恰も無人の地の如し。是れ日本國民の國粹心が、常に抱持したる理想なりし也。是れ彼が、國民理想の化身なりし所以。而して「一身の外味方なしとは、日本を出る時より覺悟のまへ」なるもの則ち彼が決心にして、彼は己れを頼みたるの外何物をも頼まざりき。彼が多く其勇を用ひて少

なく其智を用ひんとしたりしは是を以てのみ。

殊に彼が母に至ては純然たる日本人にして、主として彼に國粹心を贈與したりしもの。蓋し彼女は僻陬の一賤女なりしのみ。然れども其愛國心の健全なる、自ら身を以て從容「日本の耻」に殉して疑はず。滿腹の精神を以て彼女を喝采したりし國民の兒孫が、征清の役に連戦連勝したるも決して偶然にあらざるを知るべし。

甘輝、吳三桂、錦祥女、鄭芝龍、柳歌君、皆名を支那人に托すといへども、其性格は竟に是れ一種の理想日本人なりき。

李昭天は國民理想の奸臣也。彼は人を欺くに其眼を抉るの勇氣ありたる者也。「結構、主意 明氏社稷の傾覆を日本人の義俠的遠征によりて扶植したりとは、此戯曲の主意とする所にして、「國」なるもの始めて此戯曲に由て歌はれたり。」而して此戯曲や題自己に壯且つ大、加ふるに當時外情明かならざりし異域を以て其天地とす。是を以て理想戯曲の理想戯曲たるべき特質を發揮するに大なる



便宜を有し、大に筆鋒の自由を得て縦横に其理想を發顯せしめたりき。其九仙山に和藤内が五年の成功を幻中に顯叙したる如き、何等の理想的ぞや。何等の夢幻的ぞや。是れ其理想戯曲の頂上なりし所以にして、亦其國民喝采の頂上なりし所以也。况や加ふるに動作美の頂上を以てしたるをや。况や加ふるに詞美の頂上を以てしたるをや。然れども其理想戯曲の頂上なる所以は、則ち亦其寫實戯曲に漸く遠き所以なることをも記憶せざるべからざる也。故に其多くの夢幻的なること及び不稽なることあるは勿論也。

此戯曲の結構は下の如し。

- 第一所作 第一光景 朝廷(亂の基)  
第二光景 宮中(亂)  
第三光景 かいぎの港(都落ち)
- 第二所作 第一光景 平戸の浦(和藤内明國恢復の途に上る)  
第二光景 千里の竹(支那大陸に入る)
- 第三所作 第一光景 獅子の城樓門(雄飛の地をなさんぞす)  
第二光景 獅子の城中央の間(羽翼已に成る)

- 第四所作 第一光景 松浦灣住吉祠頭(進て遠征に合せんぞす)  
第二光景 舟中(梅檀皇女道行)  
第三光景 九仙山(大業緒に就き、各種の運動命中す)
- 第五所作 第一光景 龍馬の原本陣(攻戰準備)  
第二光景 南京城(大克勝)

一、全動作の配置 第一所作に於ては明の國家の顛覆を叙し、第二所作に於ては之が恢復の爲に和藤内が日本より赴き救ふを叙し、第三所作に於ては事を舉ぐるが爲に黨與を連結するを叙し、其苦辛の意を極狀し、第四所作に於ては和藤内が五年の成功を叙し、及び散在したる各種の運動を會中する爲めに、理想戯曲の極端なる筆鋒を利用して幻中に之を示し、吳三桂は太子を奉じて、小むつは梅檀皇女を伴ふて、興復の徒集合したるを叙し、第五所作に於て集合したる興復軍は和藤内の主力の下に一擧して敵を破り、こゝに興復の大業をなしたることを叙せり。其變化見るべき也。

去れば此の戯曲に於ける動作の進みは、  
第一所作は明國の顛覆動作にして、第二所作以下第三所作第四所作第五所作